

第3回 防災教育推進連絡協議会 報告書

平成27年度 文部科学省「リスクコミュニケーションのモデル形成事業」成果報告

平成28年3月

群馬大学 広域首都圏防災研究センター

片田 敏孝 編

第3回 防災教育推進連絡協議会 報告書の発行にあたって

東日本大震災の発生以後、小中学校における防災教育の重要性が再認識され、全国各地で様々な活動が実施されるようになってきました。その中には、「防災に関する知識を得た」「防災に対する意識が高まった」などといった防災上の教育効果だけでなく、防災を通じて、地域コミュニティや地域住民とのつながりを重視した教育活動を実践することにより、「他者の命を大切にする」「地域を愛する」といった防災以外の面での教育効果があることも報告されています。

このような背景のもと、防災教育を「防災を教える教育」だけでなく、「防災を通じた教育」という観点から捉え直し、特に“教育効果”と“地域と連携した教育実践”の着目し、今後求められる防災教育とはどうあるべきか、それを実践するために教員はどうあるべきかを議論する場として、防災教育推進連絡協議会を立ち上げました。本協議会は、すでに様々な防災教育を実践されている地域の皆さんにご参加いただき、各地の実践報告などをもとに上記課題について議論を深めていくものであり、定期的を開催していく予定です。そして、この活動を通じて、小中学校における防災教育を推進し、それを継続する仕組みを構築することにより、地域の災害文化の形成およびその定着に寄与することを目的としています。

平成 26 年 12 月、岩手県釜石市において第 1 回を開催させていただいたのに引き続き、平成 27 年 8 月には和歌山県田辺市において第 2 回防災教育推進連絡協議会を開催させていただきました。第 2 回では、開催地である田辺市における具体絵的な実践を事例に、「防災教育に求められるコミュニケーション力」と「地域と連携した防災教育」について、パネルディスカッションとグループディスカッションを行いました。その結果、「児童生徒の心を揺さぶるような問いかけ」の重要性、「家庭、地域と連携した実践的な防災教育を通じて、防災以外の面での教育効果が期待できる可能性がある」ことなどについて、参加者間で共通理解を得ることができました。そして、これらの点について、今後、継続してさらに具体的に検討していくことを確認しました。

そして、平成 27 年 12 月に高知県黒潮町において、第 3 回防災教育推進連絡協議会を開催いたしました。具体的には、第 2 回の議論を踏まえて、「児童生徒の心に響き、行動を変える授業」と「地域と連携した防災教育」について、開催地黒潮町の実践などを事例に開放座談会とグループディスカッションを行いました。また、防災教育を通じて、子どもたちに大きな変化がみられた先進的な取り組みを実践されている学校から事例発表もさせていただきました。本書は、これら内容を報告書としてとりまとめたものです。本書が防災教育を実践されているみなさんの一助になれば幸いです。

平成 28 年 3 月

群馬大学大学院 教授 片田 敏孝

目次

1. 開会	3
(1) 挨拶.....	3
(2) 趣旨説明.....	5
2. 事例発表 1.....	7
(1) 黒潮町における防災教育の紹介.....	7
3. 開放座談会.....	13
4. 事例発表 2.....	39
(1) 徳島市立津田中学校.....	39
(2) 大阪市立鶴見橋中学校.....	47
(3) 高知市立城西中学校.....	57
5. グループディスカッションを踏まえた全体討論.....	63
(1) 趣旨説明と話題提供.....	63
(2) グループディスカッションを踏まえた全体討議.....	68
6. 全体討論.....	81
7. 閉会	91

【付録】 当日配布資料

1. 開会

(1) 挨拶

大西 勝也 (黒潮町長)

本日は、年末の色々ばたばたしている時期に、全国各地からまた町内の各学校から多くの先生方にお集り頂きました。地域を代表して歓迎と平素の教育に対する敬意を表したいと思えます。

遠路からお越し頂きました先生には、片田先生が無理を言って、ご迷惑をおかけしているんじゃないかなと思っています。先生とお付き合いをするとこういうことは多々ありますから、よっぽど腹をくくつとかなないと片田防災はできない。このことを自分達もこの2年ぐらいで実感を持ちました。

先日、地区防災シンポジウムを開催させて頂きました。この後、開放座談会でも少し触れるかと思いますが、その際に田ノ口小学校の6年生に発表して頂いたら、会場中の方が涙したという自分達にとって非常に嬉しいでき事もありました。そこに至るまでの学校の先生方の努力であるとか、その教育を受けたときの子ども達の心境だったりとか、そういうことを直感的に観衆の方が感じ取られたんじゃないかなと思っています。防災教育はこうあるべきだと思っています。

本日は、自分達の町よりももっともっと進んだ防災教育をやられている町から、沢山の先生にお出で頂いております。そういった先生方からいろんなご指導を頂いて、黒潮町の防災力向上、機能向上、あるいは相互の情報交換で、それぞれの町に相乗効果が現れるように、そんな日程にして頂ければと思っています。色々開会にあたりまして不備もあろうかと思えますけども、何とかご理解を頂いたうえで、素晴らしい黒潮町での日程にして頂けますことを心よりお願い申し上げまして、開会にあたりましての地域を代表してのご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。



大西 勝也 町長

坂本 勝 （黒島町教育委員会 教育長）

今日は遠路、ようこそ黒潮町へお出でを頂きました。そして、第3回目となりますこの防災教育推進連絡協議会が黒潮町で開催されることで本当に嬉しく思っております。群馬大学をはじめ、関係の皆様にご心よりお礼申し上げます。

これまでの黒潮町の防災教育について、少しお話しをさせて頂きます。黒潮町には、中学校2校、小学校8校、保育所4園、高等学校1校がございます。そのうち、津波の浸水域想定区域内にある施設は6施設ございます。14分の6とい

うことで、決して多くはないのではないかとと思われるかもしれませんが、これは学校の校舎の話であって、多くの地域の住民の方々、そして子ども達は、浸水区域内の低いところで日々生活をしている状況です。そのため、高台にある学校でも低いところにある学校でも、同じように防災教育を行う必要があると思っております。地震想定が公表されて以降、町内の各学校には年間6回以上の避難訓練と10時間以上の防災教育をお願いをしてまいりました。先生方、本当に一生懸命取り組んで頂きました。

しかしながら、これは教育委員会の責任でもあるのですが、各学校では積極的に取り組んで頂いておりましたけれども、学校全体としての一体感というか、そういったものが少し弱いと感じておりました。そういうこともあって、2年前の平成26年3月に、何とかこの黒潮町の防災教育を充実させたいということで、第一人者である片田先生にお願いしようということになりました。私と教育次長と学校教育係長の3名で東京へ出ていきまして、片田先生にお願いを致しました。「何とか黒潮町の防災教育を充実したものにしていただけないでしょうか」とお願いしましたら、本当にお忙しい中にもかかわらず、快く引き受けて頂きました。それ以来、約2年になりますが、何度もこの黒潮町にお出でを頂いてご指導を頂きました。

新しい防災教育を始めて、何が変わったかのかなと考えてみました。やはり、先生方の意欲、「黒潮町にきたなら、防災教育は当たり前だ」という感じになっていったのではないかと考えております。町全体で取り組み始めてから、こういった連帯感を感じるようになりました。

町内には約120名の先生方がおられますけれども、今日はそのうちの半数以上の先生方がこの会場に参加を頂いております。黒潮町が進める、人権教育も、防災教育も同じであると。そういう認識を頂いているというふうに思っているところです。今日明日と二日間、皆様方と共に防災教育を学べることを楽しみにしております。どうぞよろしくお願ひ致します。



坂本 勝 教育長

(2)趣旨説明

片田 敏孝 (群馬大学大学院 教授)

年末のお忙しい中、この遠い遠い黒潮町まで全国各地の先生方、また黒潮町の先生方、お集り頂きまして、どうもありがとうございます。明日は、月曜日で仕事納めという切羽詰まった中にもかかわらず、この会を催すためにご協力を頂きました、黒潮町長大西様をはじめ、教育委員会坂本教育長様、ご関係の皆さんには本当にお世話になります。ありがとうございます。



片田 敏孝 教授

この黒潮町は全国一の津波想定のある町です。この町にあって、「防災教育をどうするのか」ということで、町民あげて、また先生方も一丸となって、「どうしてもやらなきゃいけない」というそんな思いのなかで、防災教育に取り組んでいって頂いています。

昨年 8 月に和歌山県田辺市で第 2 回の会議を開催いたしました。その際に、先生方は、「日々の防災教育をどうすればいいのか」ということに対して、「御自身の教え子に対する防災教育をどうするか」ということに、まずは大きな関心があるようでした。しかし、少し引いて考えてみると、やはり学校だけではどうにもならない。“育みの環境”として、地域みんなで、一生懸命逃げる子ども達を育む、すると、「単に津波から逃げる」だけでなく、「物事と真剣に向かい合う」、「何でも一生懸命やる」、「地域の弱きものに対する配慮の心を持つ」ようになる。色んな思いを詰め込んで、防災教育を推進することの必要性を感じて頂いたことが、第 2 回だったんだらうと思います。

そして、「このような思いで、町民あげて防災に取り組んでいる現場に行ってみよう」ということで、第 3 回は黒潮町で開催させていただくことになりました。まずはこの後の開放座談会で、日本一の津波想定を突き付けられたあの当時から今日に至るまでの 4 年間の、この地の防災教育の軌跡についてお話ししていこうと思っております。

3.11 から間もなく 5 年が経ちます。焦りにも似た気持ちのなかで、皆さんも防災教育に取り組んでこられたらうと思うんです。そして、地震想定が公表されて 4 年です。ずっとその思いのなかでやってきたんですけども、「これでいいのか」と少し立ちどまる時期にそろそろきているのかなと思っております。「がむしゃらに一生懸命やってきた」、「でも、これで良かったんだらうか」と。「防災教育は単に“逃げる逃げる教育”なのか、いや違う」、では「もっと効果的な防災教育というのはどうあるべきなのか」と。僕も含めてなんですけど、少し方向を整理しなきゃいけないのかなと感じがしています。そして、何となく先生方がお気づきになれつつあるのは、“防災を介した教育の可能性”です。「防災教育の教育効果は、極めて多岐にわたりそうだ」ということにも気づきつつあるんだらうと思っております。このあたりをもう一度整理をしながら、僕らは津波から生きのびた釜石の子どもたちを目指さなきゃいけない。3.11 のあの日、あのとき、釜石の子ども達は一生懸命逃げた。あの子どもの姿を僕らは勝ち取らなきゃいけない。厳しいところに住んでいるんだけど、そんな子ども達を育みたいと思っているわけです。そうなるためには、もちろん教育の技術も重要ですが、全体としてどうやってそれをつくりあげていくのかということに対して、手探りではありますが、皆で議論しその方向性を見出していかなきゃいけない、そういう状況だらうと思っております。年末のこの忙しい中、これ程多くの先生方にお集り頂いたのも、皆がそういう思いでいるからだらうと思っております。

二日間の日程になりますが、熱心に議論をしていきたいと思っています。そして、何か掴んで帰って頂きたいなって思っております。明日解散するときには、「今回も来て良かった」。「何となく掴んだかも」という思いで帰って頂けることをお祈りしております。

実はですね、この後の議論は余りシナリオを描いていません。座談会ではなく“開放座談会”という名前を付けて、真ん中でしゃべる人は何にかいますが、その周りからもどんどん意見を頂きながら、皆でフリートーキングをしていきたいと思っております。「俺にも一言話させろ」というのも大いに歓迎ですので、どうか一聴衆の立場ではなく、皆さんと共に方向性を見出していきたいと思っております。二日間、よろしくお願い致します。



2. 事例発表 1

(1) 黒潮町における防災教育の紹介

國友 広和 （黒潮町教育委員会 学校教育係長）

皆さん、おはようございます。町外からはるばる参加して頂いた皆様につきましては、黒潮町によろこお出で下さいました。また今日は、小中学校の教職員の皆様、町内の皆様も、招集議員の皆様についても多数参加を頂いております。ありがとうございます。黒潮町の教育委員会の国友といいます。

1.少し時間を頂きまして、黒潮町の防災教育についてお話をさせていただきます。中央にあります、「自立」「創造」「貢献」は、黒潮町教育振興基本計画に掲げられている3つの理念になります。本町の教育行政は、この3つの理念を基にして取り組まれています。右上の航空写真は、佐賀の中心地区になります。左下の写真は、現在、皆さんがおられる海上周辺の航空写真になっております。「創造」の文字の下に今自分達がいる会場が映し出されております。

2.まず、黒潮町の概要からご説明をさせていただきます。黒潮町は平成18年3月に旧大方町と旧佐賀町が合併し誕生しました。この会場の周りの砂浜では、毎年5月の連休にTシャツアート展を開催しています。佐賀地区では土佐カツオの一本釣り漁業が盛んであり、本町は海の恵みによって豊かな町です。黒潮町の人口は11月末で11,908人で、年々減少傾向にあります。先頃行った町独自の推計によれば、25年後には約6,600人から8,000人程度になる見込みとなっています。この人口の減少からくる過疎と防災の問題が黒潮町の大きな課題となっています。

町内には現在、小学校が8校、中学校が2校、高等学校が1校あります。今年の4月から教育委員会の所管になりました保育所につきましては、4か所設置しています。このうち、佐賀の保育所、佐賀小学校、佐賀中学校、上川口小学校、南郷小学校、田ノ口小学校の6施設が津波浸水予想区域内にあります。大規模な災害が発生した場合、避難が厳しいと思われる佐賀保育所につきましては、浸水予想区域外への移転を進めているところです。

3.本町はこれまで何度も津波の被害を繰り返して受けてきた町です。南海地震は紀伊半島から四国の南方沖を巨大震源とした地震です。最も古い記録では、684年に発生しております。この地震は、100年から150年の周期で発生しており、私達の先人達は、この自然の災いをどうにかしながら乗り越えて、この地に住み続けてきました。



國友 広和さん



8.防災教育は、学校で子ども達だけが取り組むものではありません。学校、地域、家庭、職場が一体となって取り組んでこそ、その効果を発揮するものだと思います。学校では、参観日や運動会、地域学習等、従来の取り組みに防災を組み込んで、家庭や地域に広めて頂いております。一方、地域のほうでも、これまで危険個所の点検や住民一人一人の避難カルテの作成等、様々な防災の取り組みを行ってきました。

現在、地域では、東日本大震災等の事例から、大規模な災害の直後は、行政にできる事はほとんどなく、近所同士の助け合いが重要となってくることをお話しさせて頂き、各地域に割り当てられた職員がお手伝いさせて頂きながら、それぞれの地域の特性を生かした、我がこととして感じられる地区防災計画の作成に取り組んで頂いています。その取り組みのシンポジウム（画面右下）を今年の10月に開催し、そこで子ども達から学校で学んだ防災学習について発表してもらいました。子ども達からは、家族が迎えに来れなくても、助け合って避難しておくので心配しないで欲しいこと。炊き出し訓練では、自分達だけでもできる事を見つけて積極的に動けるようになりたいと思ったこと。家族で防災会議を開き、お互いの避難場所について確認したこと等、一人一人が学び感じたことを発表し、最後には全員で、「100回逃げて100回津波が来なくても、101回目も逃げる」ということを大人達に宣言しました。地域の大人達もそれぞれの地域に応じた取り組みを子ども達に伝える機会となり、大変有意義な会になりました。今後はこうした地域の取り組みと学校の取り組みを今以上に近づけ、一つにしていくことが大切であると考えています。

9.少し時間は遡りますが、昨年度には、学校の繋がりや役場の関係各課との繋がりを強化するため、二つの組織を立ち上げています。この二つの組織には、群馬大学の片田教授や金井先生、スタッフの皆さんに指導や助言等を頂いております。連絡協議会は、執行部、関係各課、学校代表者等で組織し、年度毎の防災教育の取り組みについて情報共有や意見交換の場としての機能を持たせることにしました。作業部会は、各校の代表者で組織しています。黒潮町を目指す防災教育について議論を深め、それを形にするものとして黒潮町の津波防災教育プログラムを作成し、今年3月、全教員の皆さんに配布させて頂きました。

10.このプログラムは、プログラム本編、防災教育必携～指導のココロエ、補助資料、実践事例集の4構成となっています。プログラム本編は、小中学校の9年間の防災教育を体系だて、従来の知識の教育に加え“命の教育”として、防災を我がこととして捉えるための学習、解決を考えるための学習、考えた対応を実践するための学習に取り組み、内発的な自助、共存意識を育み主体的な姿勢を身に付けることを狙いとしています。

防災教育必携～指導のココロエには、先生方による防災教育を行っていくうえで、考慮して頂きた

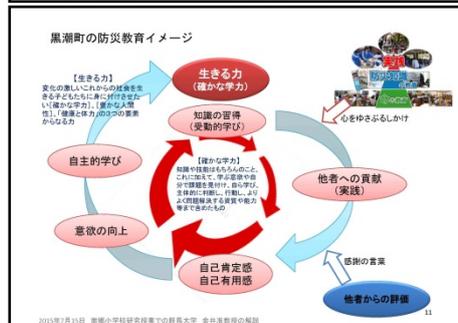


いこととして、①“災害から生き抜く力”を育むこと。②自然の“恵み”と“災い”の二面性をとらえること。③命に関わることと捉えさせて、“主体性”を身につけること。④一生涯つかえる“災害から生き抜く力”を身につけること。⑤20年かけて、“災害に強い地域文化”をつくること。この5点を記載をしています。指導上の注意点としては、①教職員自身の自然と向き合う姿勢が問われるということ。②命の問題を通して児童生徒の心を揺さぶる授業を実践すること。③教育活動全体を通じて、防災教育の目的を達成すること。④家庭や地域と連携した防災活動を取り入れること。⑤学校の特性を踏まえて防災カリキュラムを自校化すること。この5点を記載をしています。

この他補助資料集には、ハザードマップや東日本大震災の動画等、防災教育を自校化するうえで参考となる写真や映像資料をCDに納め、プログラムに添付しています。

実践事例集には、26年度までに各校で取り組まれた命の教育の観点を含んだ実践事例を集めており、以後追録していくことにしています。

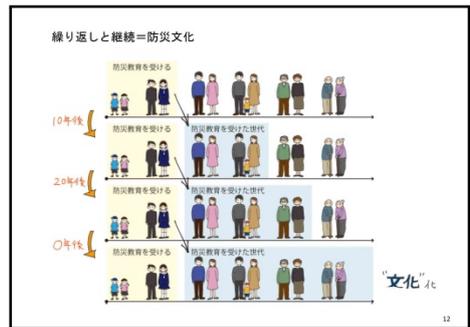
- 11.今年度はプログラムに基づき、作業部会の取り組みとして7月と12月に研究授業、研究協議を行いました。これはその時の様子です。先生方には、どちらか一方の会には必ず参加を頂くようお願いをしました。授業が子ども達の心を揺さぶり、我がこととして感じられるような組み立てがされていたか、授業後の部別研究協議では、良かった点、課題点、改善点を先生方には非常に熱心に協議頂きました。先ほどのプログラムの注意点の一番上の記載にもありますように、教える側の姿勢、伝える為の工夫というのは、大変重要なことだと思っています。本日も研究協議と同様に、町内の小中学校の先生方には大変多く参加を頂いています。先生方の熱心な姿勢は、必ず児童や生徒達に伝わっていくと思っています。今後もこれまで同様、学ぶことの楽しさというものを伝えていって欲しいと思っています。
- 12.この取り組みの中で、群馬大学の金井准教授より防災教育の可能性についてお話を頂きました。それがこちらの図になります。これまで防災教育は、災害のメカニズムや災害の恐ろしさ等を座学で知識として学ぶ“受動的な学び”が中心でした。そこに、心を揺さぶる問いかけが仕掛けをすることで、子ども達が他者のためにできる事を考え、実践するようになるのではないかと。その実践が地域や保護者に評価される。つまり、他者からの評価を受けることによって、子ども達自身の自己肯定感や自己有用感が高まっていく。そうすると更に何かをしていこうとそういう意欲が湧き、自主的、主体的な学びや行動に繋がっていくというものです。私達はこの可能性を追求し続け、教育の本来の目的、例えば、地域を愛し、郷土のために尽くそうとする心の育成であったり、あるいは、学力の向上やいじめの防止、生きる力の育成を達成していきたいと考えています。
- 13.そして、この取り組みを継続していこうということです。防災教育を受けた子ども達は、10年後20年後には大人になり親になります。さらにその子ども達が学ぶことを30年40年と繰り返し、黒潮町の防災文化としてしっかりと地域に根付かせたいと思っています。



14.そしてそれは黒潮町のもう一つの大きな課題であります、人口の減少からくるであろう過疎という問題に対しても有効な手立てになり得ると思っています。25年後の黒潮町は、人口こそ少なくなっているかもしれませんが、自主的、主体的な住民が多く、災害に強いだけでなく今以上に魅力的な町であり続ける。これこそが、黒潮町が防災教育に取り組む意義であり目指すものであります。本日、この会に参加された皆様は、既にこのような取り組みをされている事だと思っています。私達黒潮町もそれに続きたいと思っています。

15 最後に一つ会場の皆様をお願いをして終わりたいと思います。34mの想定に、想定を逆手に取った新たなプロジェクト、缶詰事業は、産業の面から防災の問題を克服していこうという挑戦です。資料には記載されておきませんが、先頃新商品も発売されたとお聞きしております。本日、缶詰販売の時間も取らせて頂く予定のようですので、是非お買い求め頂き、お帰りになられた際は、缶詰を持って黒潮町の魅力を広めていって頂ければと思っています。年末ですので、凄くチャンスだと思っています。よろしくお願ひします。

本会議が皆様にとって有意義なものになりますよう、県外からお越しの皆様は、是非今度は観光で黒潮町に来て頂くことをお願いしまして、お話を終わります。ありがとうございました。



黒潮町視察（その1） 平成27年12月28日（月）10:00～11:30

黒潮町情報防災課、黒潮町教育委員会のみなさんに、黒潮町内を案内していただきました。
大方あかつき館に隣接して建設された『浜の宮地区津波避難タワー』を視察しました。



3. 開放座談会

開催地の皆さんを交えて、参加者全員で『防災教育と地域防災の相乗効果』をテーマに議論した。

黒潮町から参加された方々

大西 勝也さん（黒潮町長）

畦地 和也さん（黒潮町教育委員会教育次長）

松本 敏郎さん（黒潮町情報防災課長）

友永 公生さん（黒潮町産業推進室産業推進係長）

以下略



片田 多くのパネルディスカッションは、前に登壇者が並ぶんですけど、ちょっと異様な雰囲気ですよ。形式的にパネリストの発言が二巡して、はいおしまいみたいな形になっちゃうのは、つまらないと思い、このようなかたちにしてみました。黒潮町にくと、このメンバーで議論することが多いのですが、今日はその議論をそのままここに開放したと思います。それから、真ん中の5人だけで話し続けるつもりはありませんので、「ちょっと一言」とか「それは聞捨てならん」というのがありましたら、手を挙げてください。何本かマイクを用意して、その辺で待機しているので、大いに口を挟んでください。

それでは、始めていきますが、テーマをある程度絞んなきゃいけないと思います。ここにお集まりいただいているのは、皆さん学校の先生です。やはり防災教育として、「子ども達とどう向かい合い、何を目指すべきなのか」ということに関心をお持ちになって集まっておられると思います。ところが、真ん中にいるのは、町長をはじめ、教育次長であり、役場の防災課長であり、また産業振興の係長さんであったりして、どちらかという教育のメンバーではございません。敢えてこのような人員配置にしました。それは、地域で考えている防災と防災教育の関係がどうあるべきなのかを議論したいと思ったからです。もちろん先生方の関心事であるところの「教室で子ども達とどう向かい合うのか」ということも重要です。だけど、地域あつての学校であり、全体の雰囲気の中で学校教育も推進される。また、学校で教えたことだけが

子ども達が身に付けることではなく、この黒潮町という環境の中で子ども達が育まれる。そのある一部分を学校が担っている、という位置付けの中で考えているんですね。そういった意図で、敢えて真ん中には学校の先生を一人も置いてないという状況になっています。従って、先生方からすると、「現場を知らない奴らの議論だ」という話になるかもしれない。そのときは、手を挙げて「ちょっと聞捨てたらん」と口を挟んで頂きたいと思います。まずは自己紹介から始めましょうか。



片田 敏孝 教授

大西 黒潮町長の大西です。先生からもありましたように、決して防災のプロであったりするわけではないので、話の途中で色々突っ込みを入れて頂ければと思います。よろしくお願い致します。

松本 黒潮町役場の情報防災課の課長をしております松本と申します。昭和31年生まれで59歳です。私が防災課長になったのは、新想定が公表された次の日です。それまでは、総合振興計画などいろんなところで40年も役場におります決して防災の専門家ではないですけど、一生懸命今日は話し合いに入っていこうと思います。よろしくお願い致します。

畦地 教育委員会の畦地と申します。この連絡協議会は1回目からずっと参加をさせて頂いております。1回目2回目に一緒に会議に参加していた他地域の先生方から、今日ここにお出で頂いて、「畦地さんが如何に遠い所から来ていたのかよくわかりました」と言われました。ようこそ、黒潮へおいでいただきました。僕は、防災教育は教育の本質に迫ることができる一つの手段だと思っています。そこらへんを皆さんとともに二日間で議論させて頂きたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

友永 黒潮町役場の産業推進係の友永と申します。缶詰を担当しております。試食販売コーナーを設置しますので、是非あとでお願いします。僕は以前防災担当しております、東日本大震災発生とともに異動した、というちょっと変な立場があります。防災教育はかかわりたいと思いつつ、かかわりきれずに担当を外れたということがありしたので、今日はとてもいい機会になったと思っています。よろしくお願い致します。

片田 友永さんのお子さんは今何年生でしたっけ。

友永 高校1年と中学2年です。

片田 ちょうど震災後の防災教育を受けてこられたお子さんをお持ちなので、“家庭の親御さん”という立場からも発言を頂きたいなと思います。

さて、誰かしゃべらなきゃ始まらないので、僕がとりあえずの仕切りをします。4年前になりますが、黒潮町は、「全国一の34.4mの高さの津波が数分で来ます」という新想定を突き付けられました。もうめちゃくちゃショッキングな状況に陥ったと思います。そこから今日に至るまでの4年間があるわけです。まず、町長さんから今黒潮町のおかれている状態についてご紹介を頂けないでしょうか。

大西 最初に言っておかなければならないのは、黒潮町の防災は、新想定が出てから本格的にスタートしたと思っています。当時のことを正確に振り返ることは、無理なんじゃないかなと思います。よく「当時どうでしたか」と質問を頂くのですが、そのときは「当時どういう発言をし

ていたか」を自分で振り返って、そのときとこう
いう思いだったんだろうなということで、構成しな
がらお話をさせて頂くことがあります。今日もそうい
う構成でお話をさせていただきます。

公式発表されたのは3月31日でした。4月2日
が月曜日で新年度の初登庁日。とにかくメディアと
いうメディアが殺到しまして、空を見ればヘリコプ
ターという状況でした。想定公表当初は、ほぼメデ



大西 勝也 町長

ィア対応で追われました。ただし、メディア対応も適切にできるわけではないんですね。自分達
が頂いた数字は、津波高さ 34.4m、最大震度 7、それから黒潮町とは限らないけれど、高知県
の沿岸に 1m津波が到達するまで最短 2分ということでした。この3つの数字を聞いたら、住
民の方はどう思われるか。自分なりに想像してみますと、「最大震度 7、びっくりするような揺
れがあって、2分で 34.4m の津波が来る」と。「そりゃ諦めないほうがおかしいよね」と今に
なるとやっとそういうふうに見えるようになりました。当時は、少なくとも「逃げない」とい
う意思表示をされた住民が多数おられたのは厳然たる事実でございます。本当に「逃げない」
と思っていたのかどうかは別にして、そういう発言をされる住民の皆さんが続出したというの
は事実でございます。従いまして、当時、防災課長たちと、「自分たちはどこからスタートし
なければならないのか」を相談したんですけども、“避難を諦められる方”がたくさん出てく
ると、防災のスタートラインにすら立てないということで、とにかく「諦めない」、「避難放棄
者を絶対出さない」ことから始めました。これが、自分達が本格的に防災を始めたときの第一
フェーズの最大の命題でした。これはずっと続いております。

もう一つは、直感的なことだと思わすけれども、「行政だけでできない」というのはま
ず誰でもわかる話です。それから、この行政も色々な階層区分がありまして、国があって県が
あって市町村があります。「そのどこか一つだけでも無理だろうな」と、これも直感的に誰も
がわかることでございます。その中で自分たちが何をしなければならないのか。今振り返ると、
やりながら整理をしていった、というのが本当のところではないかなと思います。まずは、「混
乱を収めなければならない」ということと、「過度の不安をお持ちの住民の方へのケアはどう
あるべきか」ということが、自分たちに最初に課せられたことだったと思います。

あれ以来、相当の回数、地域に入らせて頂きました。今年 10 月で新想定公表から 3 年半が
経ちましたが、この間に行政が主導して実施した防災関連イベント、ワークショップであつた
りとか避難訓練であつたりとか、こういったものの実施回数は 900 回を超えました。ご参加頂
きました住民の方の延べ人数は 45,000~46,000 人で、当町の人口の約 4 倍になります。ただし、
これが本当にベストの手段だったのかどうかは、検証しなければならないと思っています。

課長にもよく言うんですけど、「助かった命をどう繋ぐのか」とか「町の復旧復興をどうや
って行くのか」とか「産業復興をどうやって町を繋いでいくのか」ということは、これから本
格的に計画を立てて進めていかなければなりません。何よりもこの防災の至上命題は、「そ
のときに、如何にいかにか人命が確保されるか」ということだと思っています。津波防災につ
いては、この命題に対して自分は二つの課題を捉えています。第一は「本当に逃げるのか」とい
うことで、もう一つは「本当に逃げられるのか」ということです。この二つの課題の解決の道

筋をつけない限り、当町が掲げている犠牲者ゼロは達成できないなと思っています。この二つを解決するためには、やはり防災あるいは避難行動は、自主的であったり内発的な思いによって、住民自分でやるしかない。とにかく、そのご本人にお任せする以外ないと自分たちは思っています。行政の情報伝達で、住民の皆さんお一人一人に、すんと落とし込めるかという、非常に限界があるのかなと思っています。

一つ明るい兆しが見えてきていますが、先般の地区防災計画シンポジウムの田ノ口小学校の児童の発表です。あれを聞いて伝わらない大人は多分いないなと思いました。これまで、「地域が子どもを守る」という感覚を自分たちはどこかで持っていたんですけど、もしかすると「子どもたちが地域を守っていく」とことになるのかなと思っています。もちろん、最終的には「子どもも地域も」ということですが。そういったことを通じて、本格的に防災教育を始めていただいて、まだ2年ほどですが、短期間でこんなに成果が出るんだなと、すごく勇気付けられてきました。

新想定が出てから今日に至るまでの、自分の感想みないなものになりましたけれども、詳しくはですね、このあと、防災課長が補足します。

松本 町長が話せなかった黒潮町の当初の状況をお話しさせて頂きたいと思います。

新想定が公表されたとき、町長には、おそらく30日の13時前には情報が入ったんじゃないなと思います。私は30日の金曜日は年休を取っていました。その前に厳しい仕事が続いて、「やっとこれで楽になるな」と言って、女房と一緒に映画を見ていたところに携帯電話が鳴って、「土曜日に急遽会議をするので来てくれ」という話から始まっております。



松本 敏郎さん

それで31日の会議に行くと、幹部が全員集まって、庁舎の3階で南海地震対策推進会議をやっているわけです。この会場のように、皆さんがマスコミで、自分たちが職員という状況で会議をしていました。非常に緊迫した雰囲気があったわけですが、誰もしゃべらない会議でした。町長が一人「平静を装え」というような話をしていました。後でマスコミの方に聞いてみると、「葬式のような会でしたね」と言っていました。私自身、40年も役場にいるんですけど、あれぐらい悲壮感に満ちた会は初めてでした。まずは自分が「どういう状況なのか」を頭に入れること自体が、相当困難であったような状況でした。

翌日には、多くの住民の方がマスコミを通じて情報を知ることになるので、おそらく沢山の方が電話をかけてくるだろうということで、日曜日は朝から役場の防災対策室の職員が待機しました。担当数の職員が収集された。しかし、電話ほとんど鳴らなかったんですね。住民からの問い合わせはほとんどなく、静かな日曜日のまま終わりました。これを見たときに、何も言っていないということは、諦めてしまったのではないかと感じたわけです。それを感じたときに、背筋が凍るように恐ろしくなりました。これから自分たちが防災に担当するのに、住民から全く当てにされてない無念さと、諦めることの危なさにですね。34mの津波は来なくても、この町は歴史的に何回も津波にやられています。7mの津波でも逃げなければ死んでしまう可能性が出てきますので。そこが恐ろしかったというのが正直な気持ちでした。

公表時の国からの情報は、「黒潮町 34.4mの津波、最大震度は 7、高知県には 2 分で津波が到達」という 3つの情報だけでしたので、1 週間くらいして、私は情報防災課長として町長室に行き、町長に「何かからしましょうか」と聞きました。町長からは「防災思想を作って欲しい」と言われました。「おそらく国や県は、細切れに次から次へと色んな情報を出してくるでしょう。そのときにぶれない、住民が不安にならないような“考え方”から作って欲しい」と言われたんですね。この回答には、私も意表を突かれた感じで驚きました。しかし、冒頭にも言いましたように、私はもともと総合振興計画の仕事が長かったので、そこでは思想から入って町作りをするという仕事でした。例えば、この長さ 4km の入野の砂浜を、「私たちの町は美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」という言葉で 30 年前のバブルの時に作ったのがうちの町役場ですね。だから、「思想を作れ」という指示は私には凄く腹に入りました。

そして、付け加えて言ったのは、「東日本の被災地をしっかりと見てきて欲しい」と。「まだ松本は一回も行ったことないでしょう」と。ちょうど国交省から南海トラフ地震対策係長が出向に来たばかりだったので、「被災地に二人で行って来て欲しい」ということで、一週間行ってきました。そして、気仙沼を拠点にして、仙台から田老まで見てきたんですけど、現地で衝撃を感じたのは、東松島市の野蒜の駅、そこに行ったときです。野蒜の駅破壊されていたんですけど、野蒜小学校の奥の北側にあります。そこから南側に向けて、海見て歩いて行くと、ふるさとの景色とその東松島市の野蒜の景色が頭の中でだぶってしまっていて、呆然とした経験をしました。これ現地行ってみないとわかりません。それで、これは防災課長として、これから心してかかればならないと決心をしたような状況がありました。

そういうことがあって、冒頭、國友係長が少し説明してくれましたが、町民が共有する言葉を作って、「諦めない」というのが基本理念です。そこから新たな具体的な政策を 17 個作って、そのトップに教育・啓発を入れました。そして、それをどういう政策に落とし込むか、これを順次考えていくような流れを作りました。

片田 ここまでで、34.4m の衝撃として、当時のことを振り返って頂きました。騒ぐのはマスコミだけで、町民は騒がない。何となく諦めがまん延しているような雰囲気からスタートした。そういう地域社会、そういう大人たちの状況の中で、子どもたちはこれをどう受け止めていたのかが大変気になります。間違いなく大人は尋常じゃないですよ。尋常な精神状態じゃない。おそらく子どもたちも、あの 3.11 を見た残像が頭に残っている。そして、大きな津波想定が出たということも知っているであろう。その中で、子どもたちはどうであったのか。そして、それに対して、あの頃、教育委員会もしくは学校は、どういうふう子どもたちに向かい合っていたのか。畦地さん、どうですかね。

畦地 実は、そのとき僕は教育委員会ではなく、別の部署にいました。なので、そのときに子どもたちがどういうふう捉えたのか、あるいは先生方がどういうふう捉えたのかは、私が言っても不確かなことになってしまうので、この後、会場の皆さんからお話しして頂いたほうがいいのかなと思います。

何かとってつけたような話になりますけども、この間ずっと自分が思っていたのは、「これで何かできそうだな」と思いました。「新たなことにチャレンジできるのではないかな」と思ったのは事実です。僕は、出たり入ったりですけど、三分の一くらいの年数は教育委員会で働いているんです。その中でずっと僕は、「教育って結局、郷土の人を作ることが究極の目的

だ」と思っているんですね。ちょっと言葉は簡易かもしれませんが、要は「黒潮に生まれた人は、黒潮のために人生を捧げて頂きたい」と。「この町に住む、住まないにかかわらず、故郷に命を捧げて貰いたいな」と。



畦地 和也さん

「故郷、郷土のために人を作る」というのは、江戸時代までは普通だったんですよ。藩は藩で人材を作りますし、町や村々の寺子屋で人を作る。地域の者が地域の人材を教育をしていく、人を作っていくというのは、これは当たり前だったんです。けれど、明治5年に太政官布告が出て、教育令が出るわけです。それによって、殖産政策のために、オールジャパンで国家のために働く人間を作ることになった。これが今の教育までずっと150年続いてくるのではないかと思うんです。唱歌で「ふるさと」という歌ありますよね。ふるさとの二番はどういう内容の歌かという、志を果たして故郷に帰るんです。志を果たしてから帰るんですね、故郷に。明治以降の教育では、確かに新しい国家を作るために求められる教育観だったと思うんですけども、現在、このように至るところで人口がどんどん減ってきて、地域の産業も衰退していく。これを何とかしようと思ったときに、「志を果たしてから帰ってくる人材」ではなくて、「志を果たすために帰ってくる人材」を作っていかなくちやいけないのではないかなと、最近思っています。

防災教育は地域によって全然置かれた状況が違うので、“究極の地域教育”、“地元教育”なのではないかと思うんです。そういうふうに考えると、防災教育から「故郷に志をはたすために帰ってくる人材」の育成というのが、何かできそうだなと。厳しい想定を突き付けられたから漠然と何かできるんじゃないかと思ったことが、段々片田先生等とお付き合いさせて頂く中で、防災教育を通じて、本当の地域人材、故郷のために命を捧げる、志をはたすために帰ってきてくれる、あるいは帰らなくても常に故郷のために何か送り続けてくれるような人材、そういう人材を育てていけるのではないかなと思うようになりました。

片田 友永さんは、震災以前に防災におられた。ここまでの防災を全部見てきた中で、今の状況等も踏まえて、またできれば家庭のお父さんという立場も含めて、少しお話を頂ければと思います。

友永 私は、8年間防災担当をしていました。最後の年に東日本大震災が起きまして、3月17日に気仙沼に入りました。3月19日には町長も現地に入りました。この被災訪問が、町長がトップとして今の防災を引っ張っている、大きな出来事の本当のきっかけになっていると思っています。それから1年後に新想定が出るまで、私たち役場全体で見直しをし、一生懸命対策を練り直していたのですが、34mと想定によって、私達のやってきたこと、やり直そうとしてきたことを全部否定されたような思いがありまして、そういったショックも行政内部にはありました。

ただ、そうは言っても、先ほど防災課長も言われたように、今後の町作りというところで、いろいろな対策をとってきました。今になれば、34mを逆手に取ったような対策も進めていますが、それは1年、2年と、いろいろなことを積み重ねてきた結果、やっとうこういう意識になってきた。この流れを知らないと、「ふざけた町だな」みたいに捉えられてしまうかもしれないんですけど、反省を踏まえ、東日本の状況も見ながら、「じゃあそれで故郷を諦めてしまうのか」という思いがやっぱりあるんです。「震災前過疎」という言葉をうちの町から発信して

います。東日本大震災後の過疎は余りにも酷い。仕事がなくなり、町で暮らしたくても暮らせない人達が沢山いるという状況です。それに対して、「想定が出ただけで、故郷を諦めてしまうのか」という思いがあって、そういう言葉を発信しているわけです。



友永 公生さん

そういったこともあって、今では、「産業を作り、仕事を作ろう」ということで、防災の町で働く場所を作っていこうとしています。子どもたちが出て行

ってしまう構造は、なかなか改善できないんです。大学もないですし、どうしても一旦は出て行く必要がある。出て行った方がいろんな社会的な要素が身に付いて帰ってこられるので、それは否定するものでもないんですけど、帰ってくる仕組みがなかった。というところで、そういった仕事を作るという意味で、産業興しをしているわけです。

私の子どもは地元の大方高校の1年生なんですけれど、これまでは中学を卒業すると八割方は地元に残っていました。悪いときでも七割方は残っていました。ところが、今は半分以上が高知市内とか町内から通えない学校に出て行ってしまったこともあります。子どもたちが少なくなることが加速度的に起こっている。地域社会として、最も重要な財産を失っているのではないかと正直危惧しています。せつかく地域で育んだ子どもたちが他所へ出て行ってしまう。ただ、その流れを否定するだけではなく、帰ってきたいと思う魅力的な町作りをしていく必要があるというところで、自分たちの仕事は本当に重要な内容だなと思っています。

私は一つのバロメーターとして、今ベンチャーで立ち上げたばかりの缶詰工場に、自分の子どもを就職させたいと思っています。町長に「ちょっと裏口から入れてくれないか」とお願いしないと入れないぐらいに、いい会社にしていく。それが一つのバロメーターかなと思っています。そんな感じで、本当に手探りの取り組みをしている町です。皆さんの意見を頂きながら、「このやり方でいいのか」、「どういうやり方がよりいいのか」をこの場で意見交換できたらと思っています。

片田 ここまで黒潮町のこれまでの話をしてきました。日本一の津波の想定を突き付けられたときに、この町はへこんじゃうんじゃないかと、「負けるか」と言って立ち上がり、そして缶詰工場を作り、日本一の津波の町を日本一の防災の町にしようとしている。そして「絶対に犠牲者を出さない町にするんだ」という思いのなかで、これまで900回も役場と地元の方々が議論し、いろいろな取組を行っている。延べ数で人口の4倍くらいの45,000~46,000人が参加しているということは、一人少なくとも4回くらいは何らかの取組に参加している。地域は災害に向かい合うということにおいて、ここまで明確な行動を取れるようになってきている。今、地元の方々や役場の方々とお付き合いしていても、全然暗さがないんですね。「日本一の津波の町は、今さら他には譲れんぞ」というくらいの勢いがある。「絶対に負けない町にするんだ」という思いを、町民そして役場が共有している。その中で、今、子どもたちが生まれている。ということで、ここから教育の方に少し話をシフトしていきたいと思います。

まず、あの想定突き付けられた当初、その頃の子どもの直後の様子はどうだったのか。坂本教育長、あの直後、子どもたちはどうだったのか。また教育長として、それをどうご覧になったのかをご紹介頂けないでしょうか。

坂本 まず想定があったときの教育委員会の状況をご紹介します。町長からの話にもありましたが、あの想定は、想定外の想定というイメージでした。34.4mという数字は、防災教育で子どもたちを救えるのかどうかよりも、町がなくなるという状況です。冒頭でも申しましたけれど、子どもたちのほとんどは低いところで生活しています。そういう状況ですが、子どもたちの命を救うということまで



坂本 勝 教育長

できるのかなと感じました。もちろん学校の先生方も同様だったと思います。教育の中で、「この子どもたちの命を救うことができるのかな」という同じ思いだったと思います。

だから、普通の事をやっても駄目だということで、当時の高知県が出した避難訓練の回数、防災教育の授業時間数の2倍をお願いしました。それでも子どもたちの命が救えるのかということに、私は自信がありませんでした。学校の先生方も同じであったと思いますが、その辺りは、その当時からおられた校長先生方に、学校の状況なんかもお聞きしたいと思います。上川口小学校の前田校長先生、お願いできますか。

前田 上川口小学校の前田と申します。想定が出たとき、私は、現在は休校になっている伊田小学校にいました。想定が出たとき、津波の映像などは確かに頭にはあったんですけども、数字でこられても何かピンとこなかったというのが第一印象でした。たぶん子どもたちも、それまでに見た映像などからイメージはつかむことはできたとしても、実感はわかかなかったんだと思います。そのあとは、「もし想定通りの津波がきたら大変だ」ということで、頭にあったのは「それ以上のところに逃げる訓練をしなければ」ということだけでした。だから、避難訓練を東日本大震災以後続けました。毎日8時から朝マラソンをやっていたので、毎週金曜日の朝マラソンを避難訓練にあてました。四十数メートルのところまで毎週駆け上がる訓練をしました。子どもたちはそれを素直に受けて入れて、訓練をしました。もちろん授業でも知識的な学習もしてきました。

けれど、あるとき、ふと思ったんですね。海から600mくらいの距離にある学校でしたから、高台に上がると、太平洋の素晴らしい光景を見下ろすことができるんですね。何度も訓練していて、ふっと早朝の太平洋のその美しさを見たときに、はっとしたんですね。「怖いから逃げろ」、「津波が来たら大変だから、とにかく逃げろ」と毎日毎回言ったことによって、私は子どもたちに恐怖を与えているんだろうなと。ことさら恐怖を与えて故郷を否定して、いずれこの子どもたちが大人になったときに、「本当にこの地域を愛して暮らすことができるのかな」と。ふとそう思ったんです。「これは違うな」と思い始めて、もう一つ認識を持たなければいけないなと思い始めたんです。「自然と共存していると、ときに自然は刃を向いてくる。そのなかで共生していかなければいけないんだ」という認識も、同時に持っていかなければいけない。「怖い」、「逃げなければいけない」ことはわかってますけども、それだけでは駄目で、転換していかなければいけないと思いました。それで、子どもたちと一緒に太平洋に向けて大声で叫ぶようにしました。最初は「ヤッホー」でやっていたんですけども声が伸びないので、そのうち「おーい」という声で叫ぶようにしました。これによって、美しい故郷の海の光景を目に印象付けてもらおうと思いました。単純なことですけども、危険なところから避難するという気

持ちと同時に、日常的に故郷の美しさを感じ取ることをセットにするようにしました。今、上川口小学校に転任していますが、そこも避難訓練のときには同じように続けています。



前田 浩文先生

先ほど思想と言われていましたが、子どもたちは教師の思いでそのまま進んでいきますので、やっぱり我々の思うところがしっかりしてないといけないと思います。思想作りというのは、今日この場で

いろんな話をしながら、これからやっていかなければならないんだろうなと思います。自分もまだ迷いがあります、「果たしてこの防災でどれだけ効果的にできるのかな」と。今まで人権教育であり道徳教育であり、様々なことで同じように自尊感情を育てることをやってきています。さらに防災教育の切り口でどうできるのかということが課題なんですね。自分の中でまだ消化されてない部分がありますので、今日はそこで勉強していきたいと思います。

片田 校長先生、子どもたちは、当時やはり怯えているような状況はあったのでしょうか。

前田 いや、表情にはそれを見せていませんでした。しかし、中には避難訓練の J-ALERT の放送がある度に、最初は泣いてしまう子もいました。上川口小学校には今もいます。そういった非常に感性の高い子どももいるということだと思います。それぞれ子どもたちは心が違いますので、だから放送があるだけで、びびってしまうという子どももいます。当時も恐怖というよりも、「とにかく逃げなければいけない」と、純粋に子どもたちは、我々の言う事を聞いて訓練をしていたというところですね。

片田 役場の方々は確かに“思想”らしきものを持ってですね、「こんなものは、所詮想定よ」。「次の津波は想定通りとは限らないし、どんなことだってあり得る」。「だから脅しだけではなくて、この町のいいところを意識していく」というように、役場の中では思想固めはできているように思うんですね。一方で、黒潮町の現場の先生方は、そこまでの思いで子どもたちに向かい合うことができているのでしょうか。

前田 もちろん、防災に限らず、今までもいろんな場面で、たぶんやってこられたと思います。だから、これを機に、どういうふうに進手に取って前向きにやっていくかという。先ほど言ったように、自然という刃、それと共生していくなかで、「これだけ地域は美しいんだよ」、あるいは「地域ってのは素晴らしいんだよ」というところをどのような切り口で探っていくのか。そういったところをやっていく必要があると思います。そして、我々がそういうふうに向いていければ、子どもたちもそういうふうに向いていくだろうし。

ただ我々には人事異動がありますので、ずっと黒潮町にはいるわけではないです。だから、その思想が続くかどうかです。町の思想はもちろんわかっています。けれど、それが現場ですっと続くかどうか。続けていくことが一番のネックじゃないだろうかと思っています。

片田 もう一言。先生方はそれを頭では理解され、そしてその方向に向かおうとされていることはわかるんですけども、子どもたちはどうでしょうか。全体を客観的に見たときに、子どもたちは、「こんなもんには負けるか」とか、地域の良かれところと災害の危険性の両方をちゃんと向かい合と、「その日そのとき、しっかり逃げればいいんだ」というような、少し心を軽くすることができているかどうか。この辺りはどうですか。

前田 そうですね。そのところがやっぱり我々の指導力になってくるんだろうと思います。実感として、子どもたちはそこまで感じているのかというと、正直難しいですね。「負けるか」という捉え方は、「来るんだ」という事実があって、それに対して「負けるか」となる。だから、「来るんだ」という認識が、どこまで子どもたちの中でリアリティがあるのか、ということなんですよね。戦争平和についてもそうです、リアリティの問題。そういった部分は子どもたちを教える側として非常に難しさがありますね。

一方で訓練をすることによってイメージ力は確かに湧いたんですね。友永さんに来てもらって、クロスロードとか HUG とかをやって、「この場面ではどうするか」という迷いを通じて、イメージが芽生えてくる。そういうところでは、子どもたちの中に、決して否定的ではなくて、前向きな気持ちというのは育っているようには思いましたけどね。まだまだ十分ではないので、片田先生が願っているような、「これくらいの想定で負けるか」というようなところまではまだいってないと思います。これからだと思います。

片田 ありがとうございます。中野先生、どうぞ。

中野 三重県尾鷲市から来ました中野と言います。これまで、行政の立場とか、あるいは校長先生、管理職の立場から、学校の様子を話して頂きましたが、地元の先生方も沢山参加されているので、個人的な意見でも気持ちでも結構ですので、津波想定が出たときのその思いとか、それからその子どもたちに接する中で、どういった様子だったか、あるいは教育を進める中でどう変わってきたか、ということを先生の立場で聞かせ頂きたいと思います。

宮川 大方中学校の宮川と言います。釜石二回行かせて頂いて、和歌山にも行かせて頂きました。大方中学校が地元で、大方中学校のすぐ下に家もあります。津波が来たら、たぶんないんじゃないかなってということで、高校三年生と大学一年生の子どもや家庭とも話をしています。「お父さんとお母さんはおいて逃げるから、自分のことは心配しないでくれ」と高校生の子どもは言っていました。

想定がでたときですが、自分たちにはあまり数字が入ってこなかったかなというところがあります。実感が無いなというところがありました。2年前に地元の大方中学校に赴任してきましたんですが、その後に釜石に行かせて頂いて、釜石の実態を見させて頂いた後に、「これでは駄目なんじゃないかな」と思いました。数字だけではなかなか実感が無いというのは、他の先生方や子どもたちにもあるんじゃないかなと思います。自分は釜石の実態を見て、それを受けて、自分たちで考えて授業を作ったりとか、子どもたちに実感を持たせるようなことをやらしているかなと考えていきました。

防災主任をやっていますが、一年生はやっぱり「どういふふうには逃げるか」から入って、二年生で南海大地震などの過去のことを学んで、それを繋げていって、最終的に三年生では、町



中野 敬太先生



宮川 昭二先生

長さんも言われたように、例えば都会に行っても、避難者率先して避難できるような子どもたちとか、地元を離れたとしても、地元のためになることを自分で考えて行動できるような子どもたちを育てていくことが、最終的には一番大事ななと思っています。実際には外に出て行く子どもが多いのですが、また帰ってくる子どもたちがでてきたらいいなと思っています。自分の子どもも黒潮町が好きなので、最終的には帰ってきたいと言っております。そういう子どもを増やしていくことが、防災教育の良さかなと思っています。

片田 防災教育は論点がいっぱいあるので、いろんなところに議論がいくんですけども、今度は端的に伺いたいんですけども、黒潮町の子ども、次の津波が来たときに、現在、自分の命を守る子どもになっていますか。町長はどうお考えですか。

大西 先ほど、前田先生からもありましたけども、決してゴールに到達しているということではないと思っています。ただ、少なくとも前には進んでいるという実感はあります。

今職員としてご活躍されていますけども、新想定が出た時に大方高校の生徒さんだった酒井君の意見を一番聞きたいかなと思います。

酒井 大方中学校の事務の酒井と申します。東日本大震災が起きたときに、僕は高校 3 年生になる前でした。そして新想定が公表されたのは、就職する直前だったので公表された時は、「もう何をやっても駄目なんじゃないか」と思いました。今は就職して、こういう研修会や防災教育にかかわっていくにつれて、以前よりも前向きにはなっています。



酒井 健太郎さん

大西 ごめんなさい、むちゃぶりしてしまいました。

地区防災計画シンポジウムで発表頂いた田ノ口小学校の児童を生徒の発言を聞いていると、少なくとも新想定が出てバタバタしていたときの状態よりも、はるかにステップアップはされているかなと思っています。ただその進捗のスピードが、今のままで及第点が頂けるスピードなのか。その判断は、学校の現場の先生にお伺いしてみないとわからないところですけども。少なくともステップアップはしていると思います。

片田 何で防災教育をやっているかという、いつどんな大ききで起こるかかわからないわけなんですけど、やはり子どもたちが絶対に生き延びられる、ちゃんと逃げることができて、ちゃんと自分の命を守り抜くことができるような子どもたちになることが、少なからず我々のアウトカムですよね。それは、是が非でも勝ち取らなきゃならないわけです。そこに向かって黒潮町は歩いていることはわかりました。その進捗はまだまだかもしれないんですけども、そこに向かって動いているんだろうということはわかったんですね。

ただ、どうしたら本当に一生懸命逃げる子になるだろうかって。そのためには現場の先生方は、どういうふう子どもたちに向かい合えばいいのか。前回の田辺でも議論になったんですけども、学校だけではどうにもならない。黒潮町はこれだけ役場が一生懸命になって動いていますよね。他の役場と比較しても、どこの役場よりも意思統一ができていると思うんですね。34.4mの日本一の津波想定に役場が向かっている。そして、先生方も一緒に足並みを揃えておられる。その中で、子どもたちは本当に逃げられる状態に向かっているのか。まだまだ十分じゃないかもしれないけども、向かっているでしょう。でも、こんな年末の忙しいときに、こん

なところに来ている皆さんは、とにかく勝ち取りたいわけですね、その日を迎えたときであっても、絶対に死なない子どもたちになることを。そのために何が必要なのかを今日は議論したいわけですね。実際に実効性のある防災教育というのは何なんだろう。その際に地域はどうあるべきなのか。地域との連携はどうあるべきなのか。ということが今日の主たるテーマなわけですね。

黒潮町の置かれている状況はわかってきました。これまで防災教育をやってきて教育委員会として、今の状況をどういうふうに見ておられるのか。そして、どうしたらその実効力を高めることができるのか。非常に漠然として非常に難しい課題なんですけども、教育委員会から今思っておられることをお願い致します。

畦地 教育委員会というよりも、僕の個人的な考えになろうかと思えますけども、僕は、もし今揺れたとしたら、子どもたちは逃げられると思います。ただし、その子が10年後、例えば25歳になったときに逃げられるのかというと、それはまた別の話になります。というのは、「何のために逃げるのか」というところが、子どもたちにしっかり根付いていないのではないかと不安があります。知識としては、「揺れたら逃げる」ということを子どもたちはしっかり受け止めているので、今は家庭でも逃げようという行動をとると思うんです。けれど、10経ち20年経ったときに、本当にその真剣に逃げる行動に繋がるのかなと。今まだ僕の中ではちょっと不安です。

片田 何が阻害要因なんですかね。確かにまだ知識のレベルで、学校で先生方が熱心に教えておられることを子どもたちは素直に理解し、「逃げなきゃいけないんだ」という知識を持っている。でも、それは、10年経ち20年経ったときになくなるんじゃないか、という不安を畦地さんは持っておられるわけですね。それは、「身に付いてない」ということなのか。単なる知識のレベルにとどまっているということなんですかね。

畦地 それは、先ほど前田先生がリアリティというお話をされました。例えば戦争のことを子どもたちに教えるときも、リアリティをどれだけ持っているか。つまり、「戦争はいけないよね」ということは頭でわかったとしても、じゃあ本当に「戦争を防ぐ行動を取れる大人になれるか」というのはまた別の問題というのと似ているのかな。つまり、そのときに学んだことは知識として、何となくちゃんとわかっているんだけど、リアリティがないままそこを過ぎていくと、大人になったときに本当にそれをいかせるのかなと。リアリティを欠けたまま勉強をしても、今はちゃんと正解ができた子どもたちでも、将来の正解に繋がるのかというのは不安です。

片田 そこで言うておられるリアリティっていうのは、おそらく『34.4m』に対する具体的なイメージということですね。でも、そんなものは単なる計算結果です。実際には、どんなことが起こるか分からないので、そこで言うているリアリティって一体何なんだろうかと。そのへんはどうですか。

畦地 僕は、究極は『命』だと思います。自分の命が今日失われるかもしれないことに対してリアリティを持つこと。それから、友達が亡くなるかもしれない、家族が亡くなるかもしれないことに対して、リアリティを持てるかどうか。やっぱり命が失われるということに本当にリアリティを持てたら、何とか防ぎたいと思うのではないかと。それは頭ではなくて、必然的に無意識でも行動に繋がることになるのではないかと。やはり僕は、命の大切さというところに究極は行きつくのではないかと。思っています。

片田 確かに、釜石で一番効果があったのは、「先生は皆は逃げると思うんだけど、皆のお父さんやお母さんはどうするだろうか」。「迎えに来ちゃうよな」と言った瞬間に子どもたちにリアリティが出てきた。津波のリアリティではないんですよね。日常親から言わずもがなで受けている愛情が、「お母さんが迎えに来ちゃう」、その後に想起されることに対するリアリティですよ。やはり命に対してのリアリティですよ。そこに気付いたときに、子どもたちに本当の「逃げなきゃ」という気持ちが出てきたように思うんです。僕もそのリアリティっていう問題は、畦地さんの言われた通り、「命」に対するリアリティだと非常に理解しますし、その通りだと賛同も致します。防災教育の中で効果をあげている多くの事例は、津波のことをどれだけ詳しく教えたかという教育ではなく、「家族の中での自分の位置付け」とか、「津波が来たときに地域のおじいちゃんやおばあちゃんたちはどうなっちゃうんだろう」とか、「保育士さんが数人しかいないのに、隣の保育園の子どもたちはどうなるんだろう」とか、僕の見てきた現場は、子どもたちに“命のリアリティ”を持たせる教育なんですよ。 “命のリアリティ”が実効性のある行動へと導く第一歩になっているように思うんですよ。

会場からでも結構なんで、ご質問なりご意見なりありませんかね。

宮田 高知市の城西中学校から参りました宮田と申します。今日、午後発表させていただきます。どうぞよろしくお願ひします。今日のお話を聞いておまして、素晴らしい内容でございますけれども、もう一つの手前の原点の部分が気になります。私の前任校は、高知市の潮江中学校でした。潮の江と書くくらいですから、完全に低いところがございます。3.11があつて、5年間、今のところ、まだ映像で見たあの津波のリアリティが頭に残っているのですが、そのリアリティによる防災教育は継続できるのかなというところにちょっと危惧するところもあります。



宮田 龍先生

というのは、最初、潮江で防災の話を始めたときに、ほとんどの人が「南海トラフは100年後には必ず起こるんだ」と知識としては知っておりました。しかし、高知市内で開催される防災に関する講演会などの会場に行きますと、ベテランの方ばかり来ているんですね。そして、毎回ほとんど同じメンバーなんです。そして、話をして、仲良くなってから、「校長さん、あなたは南海トラフの構造は知っていますか」と聞かれたんです。「海溝部でプレートが跳ね上がって、地震と津波が起こってくる」「そういう中で、こういう大きな地震が東北でも起こった」、そして「歴史的過程の中でも、100年おきにこういった形で間違いなく来ますよ」という話を何回も話をしましても、最終的には「本当にそれ見たことあるのか」となる。リアリティを感じていないんですね。

「本当に来るのか」という一番最初の原点でしっかり話をしていなかったら、逃げる前の段階で、諦める前の段階で、うまくいかない。私が、中学生に一生懸命話をしてみると、知識としては理科の授業や社会科の授業で明確に教えてくれておりますし、3.11のあまりにもショッキングな映像が頭に残っているので、すぐにすんと入っていく。しかし、明日来てもおかしくないですけども、10年経って20年経って、30年後くらいに発生する確率が高いという状況に

対して、文化としてリアリティを継続してきちっと教えるための工夫がどこまでできているのか。例えば、昭和の南海地震の聞き取り集を一生懸命つくっているところがありましたら教えて頂きたい。それから、今までの実践例では、昭和の南海地震のときに、ここまで津波が来たよという石碑があることは調べられている。じゃあ、それを見ながら、どういうことを子どもたちに訴えていたのか、とか教えて頂きたい。

それから、私はリアリティをずっと持つていくための工夫が、教職員としては必要じゃないかなと思います。それがあって、諦めない教育があって、そして次長さんが言うように、郷土の自信と誇りを持つ。綺麗な高知市だけではないかなと思っています。日本はどこ地域も、何度も地震や水害やいろんな災害によって被害を受け手、そこからたくましく復興してきた場所なんです。潮江で教えていたときは、「ここが嫌になる教育」ではなくて、「私たちの先輩は復旧復興してきた」「少しでもそれを見習って頑張っていこうじゃないか」とか、こんな気持ちで教えました。

黒潮町のここ3、4年の実践というのは、大きい内容があるんじゃないかなと思いますが、一番最初の障害をどのように行政の方が克服していったかなと。マスメディアのおかげで、多くの方は「もう来る」という意識でいますけれども、中には「いや違う」という方も私はいると思います。実際いました、「いや、本当に見たことあるのか」という感じで。どんな実践を起こしていった子どもたちが生き、そしてまた将来に向かっていくのかというような形を教えて頂いたらありがたいかなと思いました。

片田 ありがとうございます。それはそうですね。備えるべく存在をしっかりと認識できることがスタートだということ、その通りだと思います。そのへんも重要ではあるんですけども、今日の議論の目途としているところとして、“単に逃げるという教育”だけではなく、“防災教育の可能性”みたいなところを少し議論の中に入れていきたいという思いもあります。すみませんが、時間の関係もあるので、話をすすめさせていただきます。

「子どもたちが一生懸命逃げて、命を守れる子に育みたい」という思いに対して、ここまで議論の中で、もちろん現象面でのリアリティがなければ話にならないんだけど、それがあつたうえで、さらに“命に対するリアリティ”を意識するようになったときに、本当の行動力が出てくるということまでは、コンセンサスが得られているところだと思うんですね。

一方で、その過程で子どもたちに様々な変化も出てきている。その一つの例が能登の小木中学校だと思います。今日は小木中学校の大句校長先生に来て頂いております。これから少し、小木の話をお聞き頂きたいと思います。小木中は東日本大震災以後、防災教育を一生懸命やってこられました。それ以前は、ざっくばらんに申し上げると、八十何校ある石川県の中学校の中でも、学力は八十何番という学校であつた。ところが、防災教育をずっと続けていく中で、県下の実力テストで今回一番になったそうです。もちろん先生方が熱心に教科科目を教えられた成果だと思いますが、おそらく原因はそれだけじゃない。防災教育との関わりの中で、そのような結果があるように思えるんですね。その本質はどのへんにあるのかということも含めて、まずは先生の方から、ここまでの軌跡みたいなものをご紹介頂ければと思います。

大句 5年前の3月11日は、うちの学校は卒業式をしていました。そのとき。私は教頭だったんですけども、とにかく「ああ、怖いな」という思いと、「こんなことはあつていいものか」という思いでテレビを見ていただけでした。その年の4月1日に、ここにおります小川先生が校

長校として本校に赴任して参りました。小川先生は能登半島地震を経験していて、家がぺちゃんこになっているのを見てまわり、自分のビデオで映したりしていました。そして、赴任してすぐ、東日本大震災のときに現地に入られた消防士さんをお呼びして、子どもたちに話をしてもらったり、避難所運営をされた方を連れてきて、講演をしていただいたりし始めました。最初、私は「何をするんだ」と思



大句 わか子先生

っていたんですけども、凄く熱い。そんなときに、小木地区もある新聞社から名指して、「リアス海岸なので、M7.2の地震で小木港に9分で18mの津波が来る」という記事がでました。「こういう災害はどこで起こるとも限らない」ということで。「うちの校長は突拍子もないみたいな気がしたけど、そうでもないのかな」と思い始めました。他の職員も私と一緒に戸惑っていたのですが、その中で、今隣におります廣澤は、「やってみる価値があるんじゃないか」ということで、すぐにいろんな教育活動を始めました。

私は国語の授業を担当していました。国語の中に「小学生にわかり易く教えよう」という単元があるのですが、「今、中学生が小学校に教えることって何だろう」と思ったときに防災を取り上げました。本当に拙い内容でしたが、「津波の起こり方」とか「今避難所に避難されている方はどんな思いでおられるのか」をネットや新聞で調べて、それをグループ毎にまとめまして、小木小学校に行って、子どもたちが小学生に発表するという授業を展開しました。

その授業に参加したのは、当時小学校4年生の子たちで、中学校に進学したあとは、廣澤が1年生、2年生と担任して、現在3年生になっています。先ほど、片田先生から、学力が上がったという話を紹介してもらいましたが、どの学年も高いってわけではないんです。今の3年生は学力が高いんです。で、この5年間の活動を整理をしたら、「この子たちだったんだ」って気づきました。この子らは、先輩たちの思いを純粹に受け止め、避難訓練などを行っています。「地域には、昼間は僕たちと小学生と保育園児、そしてお年寄りしか居ない」、「じゃあ、助けるのは僕たち中学生しかいない」という思いを持った先輩の思いを受け継いで、中学校が主導権をとって、町の避難訓練をこれまで5回実施してきています。小木地区の集落は海面すれすれのところにあり、そこから42mの高さにある本校まで急激に上がるような地形になっています。子どもたちが「どうか中学校小学校に逃げてください」と呼び掛けると、町の人も参加して下さる。そして、足腰の弱い方に対しては、子どもたちが手を引いて、あるいは「こっちですよ」と誘導したりしています。こういう活動を5年間してきました。最初は300人の参加だったんですが、その後、私が一時別の学校に異動している間に、小川校長が大々的にいろいろやって、850人が参加したこともありました。町の人口は1900人程度名なので約半分の人が、実際に中学校小学校に上がって来てくださいました。その活動をする中で、子どもたちは地域の方から「ありがとうね」、「良かったわ」、「あんた、上手いこと誘導するね」、「今日も会えたね」などと声を掛けてもらえます。

それから、「もっと小さい子どもに津波の怖さなどをわかってもらうにはどうしたらいいだろうか」ということで、廣澤が先ほどの学年を担当していたときに、『防災カルタ』を作りま

した。「ぬいぐるみ、それは避難に必要なの」とか、50音順で作りました。それを保育園に持って行って、一緒に楽しみながら防災意識を高めてことをしました。

それから、『防災体操』も作りました。歌を作って、その歌に合わせた体操を作りました。体操は、自分たちだけでなく、被災地へ何度も行って、『寄り添いプロジェクト』に参加している大学生と一緒に作りました。それによって、「僕たちだけじゃなくて、大学生もこんなに一生懸命考えてくれた」「大学生が僕たちを引っ張ってくれて一緒に作ったこの体操は、地域に広めなければいけない」という意識を持つようになりました。今年は、お声がかかれば出かけていって、出前講座みたいなことをするようになりました。子どもたちは全然嫌がりません。「夏休みだけど、校長と一緒にバスに乗って2時間程かかるころまで出掛けてくれる人」と声をかけると、3年生は全部18人なんですけど、14人くらいは「いいよ、お昼何かおごってね」って言って、一緒に行ってくれます。そして、他地域の方に、「僕たちはこういう防災の活動してます」という発表までしてくるようになりました。

そうすると、“張合い”のようなものが出てくるのでしょうか。先ほど、國友さんが紹介されたように、自己有用感が高まり、その結果、「もっとこれができるようになりたい」、「もっと知りたい」と思うようにいろいろな意欲が高まった。その中で、“学習意欲”もあがった。この学年の子たちは、たぶんもとからそんなに悪くなかったと思うんですが、凄く上がってきた。4月の全国学力学習調査では一番ではなかったですけども、この前行った調査では本当に一番になりました。「石川県一位」というのは眉唾にしておいて頂きたいのですが、地域の中では間違いなく一位になりました。じゃあ、私たちが「何をしたか」じゃなくて、子どもたちが自分自身で学びたいとより思うようになった。それは、家庭学習時間にも表れていて、ともて沢山します。それから、この前の期末テストの平均点もすごく高かったです。

本当によく頑張っていると思うんですが、「今年になって、私たちは新しいものを何も開発していない」、「今年はちょっと活動が足りないように思う」と子どもたちから声が出ています。「あなたたち、受験があるのに、そんなことして大丈夫？」って声をかけるんですけど、「そうですね」って言うんですが、「もうちょっと何かをしたい」という意欲のある子ども達に育ったのは事実です。

片田、「避難訓練をやりました」とか「小学校の子どもたちに防災教育を中学生がやりに行きました」とか「こんな授業一生懸命やっています」とか、そういう話はどこの地域、どこの学校でもそんなに変わらないんですよ。「そういうのを一生懸命やりました」ってだけでは、そういう子どもは育まれないと思うんですよ。もちろん、避難訓練を繰り返せば、早くできるようになるでしょう。子どもたちが保育園や小学校行って防災教育をやれば、教えられた子どもたちに知識はつくでしょう。でも、子どもたちがここまで前向きになり、そして内発的な防災だけではなく、様々なことに対して凄く一生懸命やるようになって、今や学力の向上まで図られるようになった。おそらくこの影響は、目に見える学力だけではないと思うんですよ。

そこで、大向先生、そして小川先生、廣澤先生にも伺いたいんですけど、「防災訓練をやりました」って話ではなく、その根底に何が子どもたちをそう導いたんでしょうか。現に小木中学校では、“動く子ども”、“一生懸命行動するような子ども”が育まれている。それは、避難訓練をしたからではない。じゃあ何なんだ。僕は、黒潮町の子どもたちにもそうなってもらいたいわけですよ。先生方もそう願って今も一生懸命やっておられる。その先をいく良い例と

して、何がそのポイントになっているのか。これまでやって来られて、先生はそのへんについてどのように感じておられますか。

大句 教員からの働きかけだけでは、“やらされ感”がとても強いと思うんです。そうではなくて、「今度こういうことを解決したいんだけど、どうしたらできるか」ということを子どもたちに、人数少ない学校なので、縦割り班で話し合わせたり、子どもたちの意見から吸い上げていくということはやっております。また『小木防災の日』というのがありまして、子どもたちがそのチラシを近所に配りながら、「こんなのがあります」、「また一緒に活動してください」という呼びかけも行っていきます。

片田 その「呼びかけた」ということも。行動としてはそういうことだというのはよくわかるんですね。でも根本は、先生と子どもたちの間のコミュニケーションとして、何が子どもたちを動かしているのか。おそらく、「小木ではこういうことをやりました」とこれまでやったことを箇条書きにして、それを他の各学校でやったとして、必ずしも小木と同じような子どもたちにはならないと思うんです。やった項目のリストに沿ってマニュアルのようにやっても、小木のような子どもが育まれるとは思えないんですね。

とても難しい質問なんですけども、「子ども達を動かしている」、「子どもたちをそういう気にさせている」、「そこまでの思いにさせている」、それは子どもたちとの向かい合い方において、何がコミュニケーションのポイントになっているのか。どうして子どもたちはそんなに動くようになったのか。廣澤先生は、子どもたちにどういう姿勢で、どう指導されているのか、そのツボを教えてください。

廣澤 先ほどから、“命のリアリティ”という言葉が出てきていますけど、教師が子どもたちにリアリティを持たせられるかと考えたときに、自分自身もそんなことを経験していないし、子どもたちにも経験させることができません。だから、先生方がいろいろと議論されていますけど、自分は「子どもたちはリアリティを持たせられないな」と思っています。そんな力は全然ないと思っています。



廣澤 孝俊先生

「じゃあ、どうしていくのか」というところで、自分の中で一番大切にしているのは、防災教育では、「とにかく地域のことを大切に子どもたちを育てる」、この一点だけです。「じゃあ、どうしたら、子どもたちはその地域のことを大切に思ってくれるか」と逆から考えていて、「地域の人たちと子どもたちの繋がりを沢山作ってあげたい」とかなという発想がでてきた。じゃあ、どうして作ってあげたいのか」となったときに、いろいろな活動を企画し、いろいろな年代の人たちと子どもたちが一緒に活躍する場面を教師側が作っていく。ただ作っていただけでは、子どもたちも活動して終わりにになってしまうので、ここで学校現場でよく言われる“評価”というのがすごく大切になってくると思っています。この活動に対して、「地域の人たちがどう思っているか」、「自分たちはどう思ったのか」、「先生たちはどう思ったのか」、それをきちんと気付かせてあげないと駄目だと思います。子どもたちが「そうなんや、そうだったんや」と絶対にわかる場面をつくる、そういう活動が必要だと思います。それがないと、ただ活動して終わりにになってしまうと思うんですね。

次に、少しずつ意欲が子どもたちにできたところで、今度はその意欲を上手く使った活動、もう一つ上のレベルの活動を子どもたちに考えさせる。そして実践して、また反省させて、また評価して、また強い肯定感を持たせて、というサイクルを継続してまわしていくことを、もの凄く自分たちの中では意識しています。そして、その際に、同じことを繰り返すんじゃなくて、子どもたちの意欲を高めながら、自己肯定感を高めながら。ぐるぐるぐるぐるそのサイクルが大きくなっていくような、そういうイメージを自分の中では持っています。それは、「子どもたちがよりいいものいいものを」って、考える力になっているんじゃないかなと思います。

去年、いろいろな事例を参考にして、『小木中防災宣言』というのを子どもたちが作ったんです。現在、自分は他校に異動しているので、もう小木中学校にはいないんですけど、今年の3年生が、「今年は防災宣言をしないんですか」って言ったそうなんです。去年の活動が、子どもたちに「さらにもう一つ上の活動をやりたい」と思わせ、そして、そのサイクルを継続してきたことによって、そのような気持ちを子どもたちは持つことができているのではないかなと考えています。

先ほどの黒潮町教育委員会の方の発表で、最後に「生きる力」って書いてありましたが、自分たちは、それを「生き抜く力」と考えています。

片田 ここまでの話を聞いてどうお感じになったか、ご意見もしくは小木中学校の動きに対するご質問でもあればと思うんですが、どうぞ。

中平 田ノ口小学校の中平です。6年担任と防災主任をしています。今までのお話を聞いてきて、思ったこと、自分の学校が取り組んでいることを話させてもらいます。



中平 巖先生

まず、リアリティの話があったんですけど、1年生の持てるリアリティと6年の持てるリアリティと全然違うし、死に関する認識も違うんじゃないかなと思います。子どもたちに釜石に津波が来る映像を見せたときに、1年から6年までの全員が「やばい、怖い」と言っていた。それは間違いない。でも、亡くなった方がいる一方で、助かった人はいっぱいいた。だから、助かれるっていう事実に対して、自分らは取り組みをしていかないといけないのではないかなというふうに捉えています。

僕は黒潮町に来て3年目なんですけど、すごく学ばせてもらいました。例えば、「想定にとられるな」、「最善をつくせ」、「率先避難者たれ」。3年前はこれがすらすらと言葉に出せたかといえば出なかったかなと。それは、黒潮町が教育委員会が中心となって、リーダーシップをとりながら、各学校がそれぞれで取り組みをしている結果ではないのかなと思うんです。その中で防災学習をしていて、いいなって思うのが、負の面はあるんだけど、「黒潮町の良さをもう一回捕まえ直すことができる」というところです。それから、普段の学習ではなかなか活躍できない子が、防災学習の話し合いの中で活躍できる。また避難訓練で逃げるときに、下級生に優しく声を掛けてあげる子どもがいたりすれば、それを褒めてあげられる。普段の学習活動の中でもそれぞれ子どもを認めてあげられる場面っていろいろあると思うんですけど、防災学習は、子どもたちを褒めてあげられる場面が沢山あるんじゃないかなと感じました。

それから、学習と活動が連動しなければいけないということもすごく今感じています。今、田ノ口小学校では、全校で学習内容と行事との関連性を確認しています。「その学習がどういう行事でいきてきて、子どもたちがどういうことをそこで得ていけるか」ということを確認できるところが、よい部分じゃないかなと思っています。

片田 皆さん、いろんな試行錯誤をやっておられます。どれもこれも悪いことではない。どれも大事なことなんですよ。ただ、廣澤先生の話の伺って思うのは、その“連鎖”、つまり、地域のことを考えた活動の場を与え、その成果が上がったら、地域から評価を受ける。そして、子どもたちが評価されていることを実感することで、彼らの意欲が高まる。さらに次の活動として、成果の上昇を繰り返すのではなく、その成果の上にさらに上乘せする活動を考え、実践する。そして、また評価され、それを実感し、意欲を高め、と繰り返していく。このサイクルの中で、先生が仰るように、それぞれの子どもの持っている“いいところ”を様々な形で褒めてやることができ、そしてそれが皆の活動の推進力になる。その結果として、地域に貢献できる子どもたちが生まれ、学校全体として見ると“地域に貢献できる学校”になる。このように自分の存在を肯定する場を連続的に与えていっていただけるなという感じがするんですね。

今日、ここにお集まりいただいた先生方の地域は、どこもここも一生懸命やっておられます。しかし、学校が孤軍奮闘している状況、もしくは先生が個人で奮闘しておられる状況が少なからずあると思うんですね。一方で、小木の場合は、それが一つに繋がっているように思うんです。先ほどのサイクルの中で、活動が次のレベルへと上がっていくという意味で“繋がっている”という面と、その活動を行う際に、学校や地域という組織間で、またそれぞれの先生方の個人間で、皆が手を組んでいるという意味でも“繋がっている”と感じるんです。

まだそういう面で、それぞれの地域で実情が違います。一人一人の先生方は皆、その思いがあって一所懸命やっておられるんだけど、一人で疲れちゃってる先生。学校の全体の動きになっていかないことに対して限界を感じておられる先生。そして地域との関わりを持つことが大事だという認識は、おそらく皆さんお持ちなんですけども、一人の教師が個人でそれだけやることの限界。これらについては、個々の先生方を学校がサポートして下さる、教育委員会がサポートして下さる、役場がサポートして下さる、というような動きがあれば、改善の方向に加速していくであろうと思います。おそらく、小木は小さな集落ということもあって、それができているという側面もあるんだとは思いますが、何かそのへんが大きなポイントになっているような気がします。

大句 先ほどの自己有用感かどうかわかりませんが、子どもたち自身も「自分のはのびた」と実感しているんだと思います。「より良い方に向かっている」、「自分のためにも良かった」と。

さらに“繋がり”については、町内の中学校間の繋がりができています。今年、能登町の危機管理室が、町内の全ての小学校を対象に町全体で避難所開設訓練を実施したいとことになりました。そこで、町内の4つの中学校の生徒が、それぞれの小学校に行き、中学生主体で訓練を実施してくれ、ということになりました。他の中学校の校長さんの中には、「小木みたいにはできない」と言われた先生もいたんですが、「いや、できることからやりましょう」ということで実施することになりました。そして、訓練を実施する前に、隣の能登中学校に異動していた廣澤から、「小木中学校の生徒にこれまでの取り組みを、隣の中学校の生徒に対し

て発表してもらいましょう」という提案がありました。そこで、去年まで小木中学校の教頭していた先生が隣の中学校の校長になったので、もう一校、そこにも声を掛けました。そして、他校の生徒を集めて、「小木中もそんな大きなことをしてきたわけじゃなくて、こんなふうにして避難した人に声掛けたら、こんなふうになったよ」という話をしてくれました。このような場を少しずつ広げていこうとしています。もう1校にも声を掛けたんですが、その校長先生が「自分はいいわ」と言われれば、深追いせずに、また次の機会で思ってやっています。

行政の人は発案だけして、「あとは学校現場でなんとかしてください」という無茶ぶり状態でした。でも、逆にこの無茶ぶりを引き受けたので、今度、小木中学校の体育館をLED化することになったのですが、その予算は教育委員会じゃなくて、危機管理とか総務の方から出てきていたりしています。こんなふうに恩を売りながら、ゲリラ的な広げ方をしています。

片田 ゲリラの創始者である、小川先生。非常に上手くいっている一つのケースだと思いますが、先生方がここまでもってこられた、最初のとっかかりのところに関わっておられる小川先生は、どのように感じていますか。

小川 大句先生、廣澤先生からお話があったんですけど、

“とっかかり”という部分では、黒潮町と全く逆ですね。町には危機管理室もない、従って総務課に一人だけ担当がいたという状況した。そして、何からするか、ということで、「学校で避難訓練を一度やります」、「避難所の体験とかもやりますので、何か資材貸してくれませんか」と言ったら、「そんな物はありません」と。このような状況だったので、「自分たちが思いついたことをとにかくやってみよう」というなかで、廣澤を中心としてやってきました。



小川 正先生

避難訓練を実施して、どんなことが大切なのかがわかってきたので、中学校で津波フォーラムを開催し、そこで地域の皆さんに中学校から情報発信していきました。その際には、役場の人にも「関心あったら見に来ませんか」とお誘いをするような形でスタートしてきました。そして、活動を積み重なって行って、ついにはこちらからは招待も何もしないけど、教育長さんが防災服を着て、避難訓練を見に来てくれるようになりました。また、町長さんから、避難所体験にきている保護者の皆さんや地域の皆さんの前で「しゃべる時間を俺にくれ」と言うくらいに、少しずつですが来てくれるようになりました。

結局、「学校が何をすべきか」とかでなくて、「学校でできることをできる範囲でやってきた」ことの結果であり、逆に「今度の防災訓練に教育長としても、これだけ協力させて下さい」となってきました。そういった中で、「地域の皆さんがこれだけ協力しているんだから」ということで、県も見に来たりしました。一番大事なものは、「どこどこがすべき」ではなくて、「学校ができることをできる範囲でやる」ということだと思います。でも、「できる範囲でやる」というのは非常に乱暴ですよ。自分も「そんなことするんですか」とって、よく職員に言われました。例えば、「避難所訓練を夜間にやりましょう」と言ったら、一番最初に言われたのは「勤務対応はどうするんですか」と。そのときは「う～ん、PTA行事にしましょう」というように、思いつきで対応してきました。自衛隊さんや海上保安庁さんに来てもらうのも、「一中学校が一地域のためにやるんで協力してくれませんか」とどこも通さないで、自分がダイレクトにお

願いに行きました。そうした行動の積み重ねが、今につながっているわけです。逆手なんです。町が動かないから、逆に町に「こんなんしたらどうですか」とこちらから提案した。

一番いい例が、『防災体操』です。これも最初は音楽の先生に「文化祭ですることもないし、防災の歌でも作ってよ」って言ったら、音楽の先生が「そんなことをするんですか」と。「うん。いいからやりなさいよ。」ということで適当に歌を作って、歌っていたんです。そしたら、それをたまたまある大学の先生が見つけた。そして、協力して「それを防災体操に格上げしましょう」となった。それが、お年寄りを“ほっとネットサロン”とかで使えるようになった。『防災カルタ』も作りましたら、地域の社会福祉協議会がそれに目を付けて、「じゃあ 200 セット作ります」と。ですから、学校から少し情報発信したことに、社会福祉協議会であったり、大学であったり、いろいろところが関心を持ってきて、それがこちらの想定した以上のことをしてくださる。ですので、今、自分は能登町の隣の輪島市に住んでいるんですけども、能登の社会福祉協議会が 200 セット作った小木中の『防災カルタ』を、輪島の社会福祉協議会のボランティアサークルに通じて借りてきて、それを勝手に使ったりしています。そんなふうにして、一つの学校が何か発信することを各種団体が注目している。そして、小木中学校が真ん中にいて、それらを繋いでいく。

それから、もう一つだけ言えるのは、自主防災組織です。おそらく黒潮町でも町内会単位であるかと思うんですけども、うちは、最初からそこには中学生がその協議会の一員として、他の大人と同じレベルで入らせてくれということをお願いしました。そうしましたら、ここは素敵なんですけども、能登町が「だったら 200 万円の予算をつけますんで、それでやってください」と。「こちらもノウハウがないんで、あなたたちでやってくれ」と。全校生徒 60 人の中学校に 200 万円という予算はそんな簡単につきませんね。でもそれを丸投げでした。また、町会も「中学校がやってくれるんなら協力します」という雰囲気でした。自主防災組織の結成率がたまたま遅れていただけにやり易かったです。

片田 「地域が子どもを守ろうとしている、だけど違う」、「子どもが地域を守ろうとする」と。そして、「地域が子どもを守り、子どもが地域を守る」という関係、これが大事なんだというご指摘が町長から最初にあったと思います。小木を見ていると、それができている感じがするんですよね。非常に上手くまわっている事例だと思います。

日頃、地域防災、地区防災計画づくりを一生懸命やってきているこの黒潮町で、松本さんはその推進役の責任者なわけですけども、今の小木の話聞いて、地域防災と防災教育の関係について、どのように感じていますか。

松本 60 人の学校に 200 万を渡して「やってください」と。町長に予算をつけて頂いて、うちもやってみたいですね、

10 月 31 日に片田先生にもお出で頂いて、この会場で開催した地区防災計画シンポジウムですが、この主催は町じゃないんですよ。主催は、自主防災会という設定なんです。町と教育委員会は協賛だったと思います。できるだけ地域の方が主体的に関与することができるステージがあれば、最も効果的にことが動くと思います。学校あるいは地域が主体の方が理想的であって、しかも効果は必ず出るんですね。主体はやっぱり動く子どもであり、住民の方です。地域防災も住民の方が主体に動かなければならないというところに、地区防災計画の切り口もあるわけです。

年に一度、総合防災訓練を実施しています。今年は、12,000人の人口の町で4,444人が参加しました。参加率は約37%でした。この訓練では、14の消防団に、南海トラフ地震が発生した直後という想定のもと、各地区で模擬的に災害が起こった状況を考え、訓練時にその情報を本部に流してもらいます。そうすると、各団から様々なことが寄せられてきます。「あっちの家が潰れて、人が埋まっている」とか出てくるんですけど、災害対策本部ではほとんど対応できないです。各地域の対応は、地域であったり、そこの現場にいる方がしなければ対応しきれないというのが、総合防災訓練で必ず検証されてきました。

小木の防災教育の効果は、イメージとしては、そういう現象が出るんじゃないかと思います。防災で地域に入って行っても、反対する人が余りいないんですよ。これまで教育現場も行政も対立した意見に悩まされることが多いと思うんですけど、防災を切り口にしていくと、案外対立がないんですね。自分たちも防災カルテづくりの中で、『防災隣組』という仕組みをつくりました。田舎が特異かもしれないけれど、隣の人程、案外仲が悪いんですね、利害関係でいつもぶつかるので。ところが、南海トラフが起こったことを想定して、隣近所で助け合う仕組みを作るといっていきくと、みんなその仲が良くなるんですね。防災には不思議な切り口があるんじゃないかと思います。

片田 頑張る子どもたちを見て、否定する大人がいないし、そして子どもたちがあんなに頑張っているのに自分達はこれでいいのかとなりますよね。実は、小木は最初、自主防災会がなかったんですよ。ところが、中学校が動きだしたら。全ての地区で一気に自主防災会ができた。まさに子どもが地域を動かすという形で発展している。

畦地さんは、小木中学校を見に行っていますよね。感想を頂けますでしょうか。

畦地 今年の2月に小木中学校を訪問させて頂きました。そのとき、廣澤先生が2年生の担任でしたよね。今日紹介された小木中学校の教育効果は、僕は予想していました。というのは、学校の廊下に自主学習の表が貼ってあったんですけど。2年生の日々の自主学習時間が圧倒的に多かったです。それを見て、「この子たちは、3年生になったらかなり伸びるんだろうな」と思っていたので、「やっぱりな」という感じです。

先生方に喧嘩売るようなことになるので、今日は言わないでおこうかなと思っていたことがあったんですが、小木中のお話を聞いて、やっぱり言おうと思います。それは、『先生、教えないでね』ってことです。

何が言いたいかというと、今、教育現場では『アクティブラーニング』というものがあって、これを推進している学校もあるんです。たまたま教育雑誌を読んでいたら、アクティブラーニングのことが載っていました。ハーバード大学のエリック・マズール教授という人の研究成果が紹介されていた。『ラーニングピラミッド』、つまりどういう事をやれば教育効果があるかという理論なんですけど、一方的に生徒に教える『講義』の平均学習定着率は5%しかないそうです。次に『読書』は10%、『視聴覚』20%、『デモンストレーション』が30%、『グループ討議』が50%、『自ら体験する』が75%、『他の人に教える』が90%だそうです。つまり、一方的に教え込むのは意味ないんですよ。小木中学校の生徒が一番最初に小学校4年生に教えた。これは90%の学習定着率で、先生が一方的に教えるよりも18倍も効果的なんです。

ということは、先生方が、「今までのように教える」ということをこの際やめてしまって、『教えない』。一方的な講義の授業はやはり効果が少ない。たぶん、先生方が一番実感されている

ことだと思います。そう考えると、防災教育は正解がないので、講義だけでは効果が期待できないとなってくると、『人に教える』とか、『自ら体験する』とか、『グループ討議をする』というようなことを積極的にやることによって、防災教育そのもの効果も高まるし、結果的に学力も上がることにつながる。僕はこれは必然ではないかと思っています。ですから先ほど、國友係長が、金井先生にご説明して頂いたものを図にて説明させて頂きましたけれども、僕はあれは仮説でも何でもなくて事実だと思います。それをはっきりとさせるとというのが、私たちの役目でもあるし、この連絡協議会の大きな目的ではないかなと思っています。

片田 小木中学校で、そんな育ちをしている子どもたちが、まもなくすれば、小木の地域を支える若者になってくれますよね。小木の将来が楽しみだなんて、そんな気がしてならないんですね。もちろん、それは例外もあれば問題点もいろいろとあるんであろうけど、総体として見たとき、あんな子どもたちが、これからの小木のことをいろいろと支えるとなると考えると、ちょっとわくわくするところがあるんですね。

友永さんは、34m という巨大津波想定から町を立ち上がらせる、その御旗として缶詰工場をつくりました。しかも、そのブランドマークは青旗印に 34m のロゴ。ちょっと見様によって「はふざけているのか」と言われそうなくらいですけど、逆手に取って、町を前向きに動かすその最先端で頑張っておられます。今の小木の話をお聞きなって、この先、この黒潮町の子どもたちがどう育まれていくべきだとお感じになりましたか。

友永 小木の良い話を聞いて、「地域とどう関わっていくのか」が一つテーマかなと思っています。私も防災担当していた頃に、結構学校に入ったつもりです。ただ「次こうしようよ」とか「こういう反応があったね」「今度これやろうよ」という感じで、個々の先生方との関係はできてるんですけど、人事異動でその先生がいなくなっちゃうと、学校としての取り組みになっていなかったんで途絶えてしまう。しかも、地域の取り組みになっていなかったんで、学校、地域としても広がりを持てなかったという反省があるんです。だから、その地域に上手く学校が溶け込んで、連携しているっていうのはとても参考になったし、興味深かったです。うちも教育委員会の中で色々な新しい動きがあって、そういったものは非常に大事にしているとは思いますが、そういった期待感もあります。

一つお願いがあります。私が防災担当をして、防災教育で学校に入ったときの話です。僕が下駄箱で靴を履き替えているときに、僕がいることに気づいていなかった子どもたちが、もぞもぞとしゃべっているんですよ。「また防災、暗くていやなんだよね」って。僕が横にいるに気づいて、逃げたんですけど、これはいけないなと思いました。命に関わることなのですが、リアリティを求めるが故に本当に怖がらせてしまっていたのかなとか。だから、皆さんには、「怖がらせない」、「入り口で扉を閉めない」ような子どもたちとの関わりをぜひ作って頂きたい。そして地域に繋げるという流れを作って頂ければと思っています。

だから、片田先生も言われていましたように、「ふざけたようなことをやってる町があるぞ」、「何でこんななっちゃったんだろう」みないなところで、多くの方の興味を煽るような形で、防災につなげていきたいと思っています。「防災は楽しい」ではちょっと不謹慎かもしれませんが、興味を持たせる一つの教材、人間を育むことに行き着くための入口として、ぜひ上手く取り入れて頂ければというふうに思っています。

片田 小木の子どもたちは、防災って聞いて「暗いな」なんて言いませんよね、絶対。前向きで楽しくって、そこに向かって一生懸命やっているから、防災を暗い話なんて、絶対思いませんよね。

それと、この前の話で指摘されたように、小木中や小木地区の取り組みは、自校化じゃないですけど、地域の中の学校として活動のかたちができる。学校が地域を巻き込むという継続性ができるというところに大きなポイントがありますよね。今日お集りの先生方はそれぞれで頑張っているんですけども、どうも個人の頑張りにクローズしてしまっている。そうすると、学校全体に広げ、自分が異動してもその学校に仕組みが残るっていう状態をどうやって作るか、自校化するのか。そして、地域の活動の中の一つとして、学校防災教育があるという形にどう定着できるのか、というのが一つポイントかなという感じがしました。

まだちょっと深め足りないところがあるし、もう少し皆さんの意見もお聞きしたかったんですけども、時間になりました。最後に町長さんに、ここまでの話を聞いて、「黒潮町のこれからの防災教育、斯くあるべし」という町長さんの思いであったり、お感じになったことをお聞かせ頂ければと思います。

大西 学校現場の先生方からお話をお伺いできて、自分たちが気付いていないところとか、自分たちの掘り下げが足りないところを、「本当にこれでいいんだろうか」とか「本当に伝わっているんだろうか」とか、あるいは次長からありましたように「10年後に本当に子どもたちは逃げられるんだろうか」とか、いろんなジレンマを抱えてながらやって頂いていると思うんです。ただし、結論から申し上げますと、やっぱり自信を持って防災教育をやって頂きたいと思っています。

課長から「防災には少し不思議な力があるんじゃないか」という話がありました。僕はこれは本質的なところだと思っています。前田先生から、「今までも戦争と平和っていう切り口であったり、道徳という切り口でやってきた。その成果がどうなのか。そして今度は新たに防災の切り口で、どういう成果があるんだ」という話だったかと思っています。極論を言ってしまうと、戦争だ平和だ、あるいは道徳だっていうのは、万人が共有することのできない考え方です。社会契約論者のお言葉を借りるとですよね、色んな考え方、色んな多様な価値観を持たれていて、かつそれを非常に大切にされている方が沢山おられる。そういったカオスの中で唯一コンセンサスが取れるだろうと思われること、これが生命の保持であって継続であって安定性があると。やっぱり本質なんだと思います。従って、防災という切り口で人間の本質的なところを突いていく教育をぜひお願いしたいと思っていますし、多くの先生方には、すでにやって頂いているんだと思っています。

今日、いろんな先生方からご意見頂きまして、まだまだ自分たちの努力の足りないところもあるだろうなと感じました。だから、これまで以上に、先生方とたくさんお話をさせて頂きたいと思っています。それからもう一つ、「自信を持って教育をやって欲しい」というのは、さっきほども触れましたが、例えば10年後20年後に、子どもたちの意識は今のレベルと比べてどのくらいになっているんだろうなと。仮に今の意識レベルから半分になっていたりとか、五分の一になっていたりだとか、そうになってしまう人がたくさんいたとしても、僕はそれが社会の姿だと思っています。そういうことになるからこそ、社会にそうでない人間を次から次へと排出していかなくちゃいけない。これが社会を継続するということであって、防災教育が義務教育課程で施される、一つの命題だと僕は思っています。従って、人間を作り上げるということと同

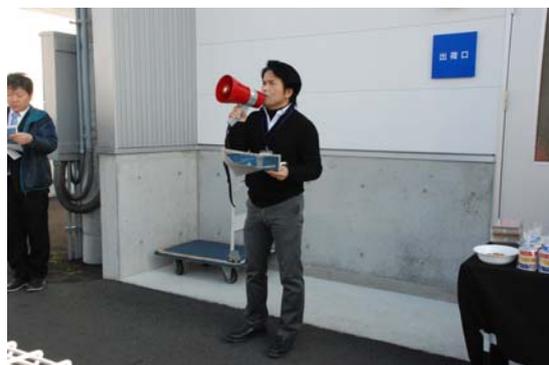
時に社会を作り上げていくこと、こういうことに大きく寄与して頂いているのが防災教育だと思っています。先生方、全国で一生懸命、自信をもってください。その中ででてきたジレンマ、「私たちはこんな課題があるんだよ」、「こんな悩みがあるんだよ」ということを、こういう場を利用して意見交換して頂いて、今年よりも来年がより良いものに、そして来年よりも再来年の防災教育が素晴らしいものになるように、子どもと社会を育てるだけでなく、ぜひこの防災教育自体も育てていって頂きたいと思っております。

片田 シナリオのないまま議論を進めてきましたが、奥深いテーマですね。切り口をどう定めるかによって、どのようにでも議論が展開できる内容だなとは思いますが。ただ一つ明確なのは、先生個人が奮闘するだけではどうにもならない問題であるということも事実です。そんな中で先生方が抱えておられる問題がいっぱいあるんだろうと思います。頑張ろうにも頑張れない状況もあると思います。その中でどうすれば学校の防災教育が地域の防災教育に展開していけるのか。その戦術はどんなところにあるのか。今この場では十分に意見を頂くことはできなかったんですけども、あとでディスカッションの時間がありますので、またそこで議論をふっかけて頂ければと思います。身のある議論もできたように思います。引き続き午後に繋げていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。



黒潮町視察（その2） 平成27年12月28日（月）10:00～11:30

黒潮町情報防災課、黒潮町教育委員会のみなさんに、黒潮町内を案内していただきました。
『黒潮町缶詰製作所』をしました。



4. 事例発表 2

(1) 徳島市立津田中学校

佐藤 康德 (徳島市立津田中学校 教諭)

小西 正志 (徳島市立徳島中学校 教諭)

- 津田中学校で防災講座を担当していた佐藤です。テーマは「繋がり、地域に貢献する防災学習」です。私は、防災学習は二つのことから成り立っているのではないかと考えております。一つは担任の先生が教室で行う防災学習。もう一つは担任の先生以外が教室以外で行う防災学習。今から私が発表させていただきます内容につきましては、担任でない私が学校以外で行っている防災学習になります
- 本校は生徒数 350 人前後で、全学級、全学年とも 3~4 学級くらいです。特別支援学級が 2 学級あります。南海東南海地震が発生した場合に、20%前後の家が倒壊するであろうと言われています。地震発生後 53 分くらいで第二波。第二波で最大の浸水が 6.2m に到達するという想定です。津田中学校区のほとんどは津波で水没します。真ん中に津田山っていう山があります。この津田山だけが高いので残る。それ以外は全て水没すると言われております。
- 私が行っていた防災学習は、2 年生 3 年生の総合学習の時間に『防災講座』という講座を設定しまして、希望する生徒が選択をします。選択をしない生徒達は、人権の講座であったり環境講座であったりとか、別の講座を選択して、一年間勉強します。防災講座は平成 17 年度から開設されています。授業時間中に企画して、活動は放課後とか夏休み冬休み、土曜日日曜日に活動しております。
- 防災学習を最初に始めた理由は、海に近いということと、その当時、南海地震が発生する可能性がこれぐらいですよと言われ始めた時期であった。それと何よりも、協力者、市社協の人がいたことです。この人が全面的に協力してくれたので始める事ができました。最初に年間計画、カリキュラムを考えるとときに集まった人が、私と市社協 2 人、県社協 1 人、徳大の教授が 1 人、町内の自主防災の会長さんが 1 人の全部で六 6 でした。
- 現在はこういう状態になっています。4 月にカリキュラム研究会を行うんですが、ここに町内の人とか徳大の先生とかそれ以外の協力者の方が 25、6 名集まって、カリキュラ



小西 正志先生

本校の概要

生徒数 350人前後(1年4学級, 2年と3年3~4学級, 特支2学級)

南海・東南海地震が発生すると…
昭和56年以前の建物が多く、倒壊率20%前後の予想
狭い道のブロック塀は倒れ、津田山の一部は崩落
最大津波は53分まで到着の予想 最大浸水深6.2m
津田中学校区ほとんど、津波で水没する予想

2

防災学習・活動を行う 企画

2, 3年生の**総合学習の時間**に、**防災講座を設定**(希望する生徒が選択)
その他、人権講座、環境講座、食講座など
防災講座は平成17年度~

+

防災講座を選択した生徒は 活動

放課後、夏休み、冬休み、土日

3

防災学習を始めた理由

- ☆ 海に近い
- ☆ 南海地震が発生する可能性が言われ始めた
30年後・・・50% 50年後・・・30%
- ☆ 協力者がいた(市社協)

平成17年・18年度の4月
防災教育年間カリキュラムの作成者

教員(私)、市社協(2人)、県社協(1人)
徳大教授(1人)、町内自主防災会長(1人)

4

カリキュラム作成会
H24.4.24

夏休み調査引率者会
H24.7.12

ムを検討します。夏休みには調査研究がありますが、そこにはOBも入って、引率します。なので、30数名の者が集まって引率者会を開く。このように大々的に取り組んでおります。

6. 1、2年目の主な学習内容ですが、青で書いて活動が現在の続けているもので、黒で書いてあるのはこの年限りのものです。1番は防災意識調査。2番は意識調査結果の配布・掲示。3番が町内の避難訓練に参加。疑似体験とか避難経路の確認とか防潮林の植樹などをしましたが、この年限りでそれ以降はやっておりません。
7. 防災意識調査の様子です。このように一軒一軒、子どもが訪問します。ここには1,100人と書いてありますが、年によって異なり、だいたい2,000人弱くらいです。町民が16,000人です。
8. その結果を子どもたちがまとめて、町内の方に掲示入してもらいます。例えば、ラーメン屋さん、銭湯、大きなスーパー、銀行、コンビニなどを訪問して、貼ってもらえようをお願いしてきます。
9. 町内の避難訓練へ参加ですが、最初は参加しただけですが、子どもたちが受付をやったりとか、あめを配ったりとか、何かの仕事を任せられる形で運営に関わっています。
10. 3年目なんですけど、ここで一つの大きな転機がありました。生徒から「防災学習は校内だけで活動していても駄目だ。校外へ出て、色んな人と繋がらなければ駄目だ」の発言がありました。それで19年度は、一泊二日の被災キャンプ。それから、みかんジャムを作って高齢者に一軒一軒配布しました。それから、調査結果を町内で発表させてもらったり、阪神淡路大震災の追悼イベントを校区外の大きな公園でさせてもらったりして、これらの活動は今現在も続いております。
11. 一泊二日被災体験で、子どもたちはグラウンドにテント張って宿泊しました。
12. 子どもたちがジャムを作って、高齢者に配っています。
13. 町内の人が集まったときに調査結果を発表させてもらっています。
14. 阪神淡路大震災の追悼イベント。これは今年もやるんですけども、大きな町の真ん中の公園でやっております。もちろん、神戸から希望の灯りを取ってきて、それで町民の人と市民の人に配っております。

平成17年・18年度 主な学習内容

講義(メカニズム, 被害予想, 防災グッズ, 自主防災組織, 避難シミュレーションなど)

- 活動
- ① 町内防災意識調査
 - ② 意識調査結果の配布・掲示
 - ③ 町内避難訓練に参加
- ☆ 疑似体験
 - ☆ 避難経路確認
 - ☆ 防潮林植樹

6

① 町内防災意識調査 H24.7.21~7.25



7

② 防災意識調査結果の配布 H24.9.10



8

③ 町内津波避難訓練 H24.11.18



9

平成19年度 生徒の発言

「防災学習は、校内だけで活動してもダメ。校外に出て、いろいろな人と繋がろう」

平成19年度に追加した活動

- ① 1泊2日被災キャンプ(町民一部参加)
 - ② ジャムを作り、高齢者宅に配布
 - ③ 研究結果を町内で発表(提言)
 - ④ 阪神・淡路大震災追悼イベント
- ☆ 防災フォーラムで発表(県民対象)

10

平成20年度に追加した活動

- ☆ 町内炊き出し訓練に参加
- ☆ 災害時要援護者を考える(町内探索)
- ☆ 避難所設営体験(町民と一緒に)
- ☆ 津波高さの表示(町内)

平成21年度に追加した活動

- ① 水害災害のボランティア活動
- ② 幼・小・高齢者に防災出前授業

15

15. 4年目、5年目の活動です。町内の炊き出し訓練や要援護者を考えたりとか、避難所の設営体験とか、津波高さの高さを表示したりとか、水害ボランティア、幼小、高齢者に防災出前授業とか。こういうようことを行っております。
16. 岡山県美作市での水害ボランティアの様子です。
17. 幼小出前授業に行っているときの子どもたちの様子です。
18. 6年目の平成22年度に追加した活動は、家具転倒防止器具の設置を一軒一軒に呼び掛けていきました。それと、東日本大震災義援金活動を行いました。
19. 一軒一軒訪問している様子です。
20. 東日本大震災の義援金活動を行って、全部で314万円が集まり、被災地にお送りすることができました。
21. 平成23年度に追加した活動は、津波避難支援マップを町民と一緒に制作をしたり、市役所とか県知事さんに陳情に行ったり、全国の防災ミーティングに参加したりしました。
22. なぜ子どもたちが避難支援マップの作成を考えたかという、平成22年にチリ津波があったとき、子どもたちの調査では、「避難勧告、避難指示が出ていなかったから避難しませんでした」という回答が67%でした。ところが、3.11が起こったときには、避難勧告が出たんですが、避難した人は22%しかいない。このギャップは一体何なんだろうと。前年度には避難勧告が出たら避難すると言っていたのに、実際出たら22%しか避難してないんじゃないかと。子どもが考えた原因は、人は考えたことは長続きしない。だから、見える場所に避難支援マップの看板を立てる必要があると。
23. これで常に町民の方に語りかける必要があるということで、子どもたちが町民の人と一緒につくりました。
24. 行政への要望ですが、避難場所となっている津田小学校が水没すると思う人が84%。じゃあどうしたらいいかということで、山を整地してもらいたいと。その当時、山は登れない状態だったんです。道もない。上に平地もない。それで整地して道を付けて欲しい、上に平地を作りたいという要望が40%ありました。これをメインとして、同報無線の設置も含めて行政に要望に出掛けました。
25. 市と県知事さんをお願いに行きました。データに基づいて、子どもは一生懸命説明をしておりました。
26. 全国防災ミーティングにも参加しました。
27. 平成24年度に追加した活動は、幼小中の合同避難訓練で

② 幼小防災出前授業 H24.11.20



津田中学生が出前授業
津波の高さを表現する
防災教育の一環として

17

平成22年度に追加した活動

- ① 家具転倒防止器具設置の啓発(町内)
- ② 東日本大震災義援金活動(町内)

18

① 家具転倒防止器具設置の呼びかけ H22.7.28



「家具固定を」高齢者に呼び掛け
防災教育

19

平成23年度に追加した活動

- ① 津波避難支援マップの制作(町民と共同)
- ② 行政への陳情(市役所へ、県知事へ)
- ③ 全国防災ミーティングに参加
- ☆ 東日本大震災追悼イベント(徳島)に参加

21

① 津波避難支援マップの作成 の理由

平成22.23年度 津田中学生による調査結果より

平成22年チリ津波 避難しなかった理由
「避難勧告・指示が出ていなかった」 67%

平成23年東日本大震災
「避難勧告が出たので、避難した」 22%

人は、考えたことが長続きしない

↓

見える場所に避難支援マップの看板

22

平成24年度に追加した活動

- ① 保・幼・小・中合同避難訓練
- ② タブレット型PCを使った避難訓練
- ③ 事前復興まちづくり計画の作成

27

あるとか、タブレット型 PC を使った避難訓練とか、事前復興まちづくり計画です。これは現在も続いています。

29.タブレット型 PC を使ったバーチャル避難訓練。ちょっと珍しい内容だと思います。

31.事前復興まちづくりは現在もやっています。東日本で避難されている人が、復興しても戻らないという現象が起っており、希望を持ち続けるために、災害が発生する前から復興まちづくりを協議して動くことが必要です。そのために町民の意識調査を実施して、その政策について生徒が自ら考えていこうという取り組みです。

32.子どもたちが行ったアンケートの結果です。地震が起こった直後に既に町外に出ると答えている人が 38%。もう戻りませんという人です、1年経つと 70%の人が戻りませんと、意思表示しています。3.11 から 5年経ちますが、調査では5年経つと、98.3%の人は戻らない。ということは、こちらが津田に愛着がある人で、こちらが生活を優先する人。この結果から生徒が考えた事は、今から復興のまちづくり計画を進めておく必要があるとこういうことです。

33-34.「不安な施設はどこですか」という質問をして、「それはどこに建てたほうがいいのか」も聞きました。

35.そのうえで、子どもたちは復興まちづくり計画案を考えました。これは考えたうちの一部分です。

37.小西先生から 3 年前に防災講座を引き継ぎました佐藤と言います。引き継いだ 1年目については、小西先生からアドバイスを受けまして実施しました。そのときに、小西先生に「ぜひとも継続でやってもらいたいことはありませんか」とお聞きしたら、小西先生は「全部なくしてもよい」と言われました。しかし、継続することが私の役目だろうなと思ひまして、継続できるようなプログラムを組むことにしました。しかし、今日の午前中の討議の中にもありましたが、ちょっとずつでも新しいものを入れていくとか、評価がちゃんともらえるようなものを入れないと子ども達たち満足しない。特に津田の防災講座の子どもたちは、「次は何するんですか」というような感じできてましたので、とにかくいろんなものを入れていこうと思ひました。

38.今年、防災の一泊研修も復活させました。この研修は津田中学校が主催です。「津田中学校がやるので、自主防災会や市の危機管理課、コミュセンの人たちも達も見に来な

平成24年度のテーマ
事前復興まちづくりとは

東日本大震災で避難されている人が、復興しても戻らないという現象が起っている。

希望を持ち続けるために、災害が発生する前から復興後のまちづくりを協議しておくことが大切。

そのための町民意識調査を実施し、その後実際に生徒が作成した。

31



佐藤 康徳先生



さい」、「これをモデルにして作って下さい」ということでやらせて頂きました。防災講座のOBの高校生が避難所運営の運営委員をしました。つまり、高校生と中学生だけで一泊研修をやってしまいました。これちょっと無謀なことをやってしまいましたが、凄く勉強になったと思います。

39.フィールドワークも、このような形で3年間ずっとやってまいりました。300~600軒の間でフィールドワークさせて頂きました。

40.本年度は、津波の浸水域の表示活動を行いました。各家々に「ここまで水が来ますよ」というのを表示する活動をしました。津田の場合は最大5.2mということで、子ども達が基準値から測りまして、2~4.5mくらいの高さにステッカーを貼りました。これは市の方と相談してやってたんですが、もう「中学校だけでやっちゃいます」ということで、中学生が家に回ってこのように貼っていくという活動を行いました。こんな感じです。

41.アンケートを書いてくれた方が沢山道にいて、そのうちの80%、108人の方々に、家の壁や外の壁にテープ貼らせてもらいました。県の側に聞きますと、「こんななに協力してもらえない」とのことです。お願いに行っても「何で貼らないといけないんだ」と言われると。ところが、中学生が行きますと「どうぞどうぞ」「貼って下さいよ」ということで、中学生強しということが何となくわかります。しかも、貼って下さらなかった家々の方々は、「昨日の夜掘ったばかりだから止めて」とか理由のある家庭が多くて、それ以外はほとんど貼って頂けたということで、凄く津田の皆様には感謝をしております。

42.事前復興まちづくりです。24年度から始まっておりますが、先輩方を受け継いで、25年度からは実行ということで、町のレイアウトとかアクションプランを考えることを進めています。

43.それぞれの班がこのように町のレイアウトを組みました。

44.そして、そのレイアウトを実際に形にしていくということで、ジオラマを制作しました。後でできますが、これにつきましては、町の方の評価も得ております。

45.この赤線で囲まれた部分は、現在徳島市が開発協議会を立ち上げて、どうやって開発していくのかの折衝が現在お続いています。

46-48.そこで、その中に子ども達の意見を取り入れようとい



津田町内フィールドワークおよびミニコミ誌配布

平成25年度

- 東日本大震災前と後では、津田町内の方々の意識がどのように変化したかを調査した。
- 平成25年7月22~26日調査 個別訪問 300軒

平成26年度

- 津田山と木村団地の活用方法について調査した。
- 平成26年7月24~28日調査 個別訪問 600軒

平成27年度

- 地震速報や避難マップの有用性について調査。
- 浸水被害想定値を壁などに貼ることにより、被害想定を視覚化。
- 津田・新浜・西新浜地区 個別訪問 350軒



平成25年度から取り組む事前復興まちづくり

南海地震が発生し、町内のほとんどの建物が津波で流出したとする。

↓

その後の津田のまちづくり計画を、今から作っておく必要性が高い。

街のレイアウトやアクションプランを考える。



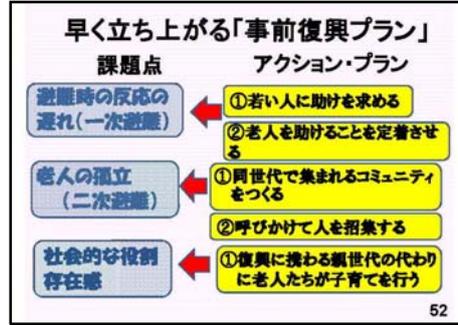
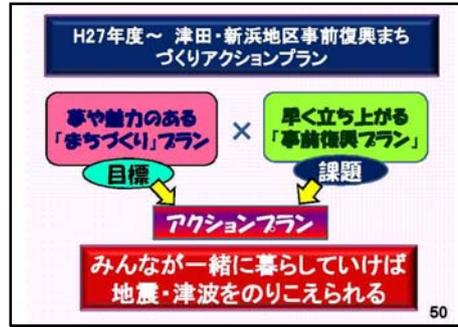
うことで、昨年度、子どもたちが色々案を考えまして、ジオラマを作りまして提示させて頂きました。これが実際にどうなるかわかりませんが、現在折衝中です。子ども達の意見が反映されるのではないかと考えております。

49.先ほど言いましたように、町民への提言ということでしてもらいました。町民からは、子どもたちがつくった案のうち、津田山の上にお城を建てて復興のシンボルとするという案が、一番人気が高かったです。

50.今年度はフィールドワークとして、意識調査をやってみました。その中で、高齢者のうち「逃げない」というような回答が2割強おりました。それから、若い人の避難訓練等への参加が非常に少ない。実は20代30代は非常に知識は高いのですが、「逃げられるだろう」といった誤った認識をしています。防災に対する取り組みが低いというか、意識が低い。その辺りを考えたときに、もう今までの感覚では駄目だなと感じました。

そこで、アクションプランを今年から始めました。“夢や魅力のある「まちづくりプラン」”というのは、先ほど紹介した町のレイアウトです。それにプラスして、“早く立ち上げる「事前復興プラン」”を考えるために課題をみつけることをしました。そのときに、子どもたちは、おじいちゃんの立場で考えてみたり、若い人の立場で考えてみたりして、各年代の人達の感覚をもう一回皆で考えてみて、皆と一緒に暮らしていける、地震津波を乗り越えられるまちづくりを考える。ということが話し合いの中で出てきました。昨年度までは子どもたちは、夢のような町を考えていましたが、今年度からはいよいよ具体的にどのようにしていけば、おじいちゃんも逃げて助かって楽しく過ごせる。若い人達も防災意識を持って頂ける。そういうふうな感じでアクションプランを作っていました。

51-52.一つ持って来たのが、75歳のおじいさんの立場で考えてみた結果です。もちろん避難の遅れがございますので、若い人に助けを求めるとか、老人を助けることを定着させるとかというような感じで、このようなアクションプランは必要であろうということで、子ども達の意見を出しました。二次避難の場合、老人が孤立化するであろうと。コミュニティが必要ですね。人を集めて招集するような力が必要ですね。社会的な役割ということで、子育てをおじいちゃん代わりにやって貰いたいと。30代の方々は仕事があるの



で避難所からすぐ出て行っちゃう。だから、おじいちゃんおばあちゃんに子育てをして欲しいんですよ。というような形で、意識を持ってもらうことで、お年寄を一人にさせないような形でアクションプランを考えました。

54.今回、年代毎に全てづくりました。それぞれの世代を子どもたちが意識ちょっと考えまして、アクションプランを考えてみました。これを見て、意識を高めてもらおうということで、津田中学校の全戸、それから各事業所に配って掲示してもらうようにしてあります。これについては、今年が一年目なので、これからどんどん製錬されていくかと思えます。

55.この地域に根ざした防災学習ということで、実は平成 25 年度から津田中学校防災講座 OB 会が発足しました。

56.津田中学校の卒業生が自主的に活動を行うということで、例えば、お祭りの中で防災テントを作りまして、お祭りに遊びにきた地域の子どもたちに防災の啓発を行いました。

57.町内避難訓練でも OB 会のテントを作りました。このように、子どもたちが自主的にどんどんどんどん地域の中に入っていき、という活動を OB になっても続けて行っています。

58.県議会の方に招かれましたので、ちょっと意見を言わせて頂きました。お金が欲しいとはとても言えなかったですが、色々勉強会に参加させて頂きました。

59.26年度からはデイサービスのおじいちゃんおばあちゃんのところに出かけて行って、防災活動をやっております。これにつきましては、子ども達も非常に勉強になりました。これまで避難する時の持出品といえば「水」でしたが、ここへ行ったときにおじいちゃんが「一番大事なものは薬だ」「薬がないと死んでしまうんだ」と言っていたのを聞いて、「避難するときは、一人ひとり持っていく物が違うんだな」と考える大きな転機になりました。

60.これまでお世話になったのがこの方々です。これは津田防災のゆるキャラです。“たるぼう”といいます。新しく作りました。

61.津田中学防災講座は 3 つの柱です。一つは、「防災活動のリーダーたれ」ということで、君たちがリーダーになるんだというのが一つ目です。次は「継続は力なり」ということで、卒業しても防災のことを意識し続けていきなさいというのが二つ目です。最後は「故郷を好きになれ」という

H25～ こども夏祭り 防災テント



町内津波避難訓練

町長800人が参加



H26 徳島県議会・勉強会に参加



H26～ デイサービスにも出かけました



お世話になった方々

津田地区コミュニティ協議会
津田・新浜地区自主防災会
津田地区民生児童委員協議会
津田地区社会福祉協議会
津田・新浜地区青少年健全育成会
防災講座OB
徳島大学
ニタコンサルタント株式会社
徳島市危機管理課
徳島市災害ボランティアグループ



60

津田中学校防災講座は

1. 地域の防災活動の
リーダーたれ！
2. 継続は力なり！
3. 故郷を好きになれ！

61

ことで、故郷である津田のことを必ず見るような大人になりなさいというのが三つ目です。このような3つの柱で、防災活動をやっております。

小西から引き継いで三年間やってまいりましたが、教訓が一つあります。それは、いろいろ私も悩むことがあったんですが、「困った時は生徒を出せ」ということです。我々がいると全然相手にもしてくれない人達が、子どもが行きますととても嬉しそうな顔をして、「先生、いいですよ。これ出します。これやります。」となることがある。また子どもたちが積極的にしている姿を見ると、大人たちも頑張らなきゃいけないなというような感じで、本当に変わっていくんですね。ですから、私どもは午前中の話し合いを聞きながら、「自分は何してきたのかな」と思いながらも、やっぱり子どもたちの場を作って、子ども達を前に出して活動させてあげるとというのが大事だなと思いました。本当にここで津田中防災、学習することが非常に多かったです。

このようにずっと二人で防災講座続けてきました。これからもご支援よろしくお願ひしたいと思ひます。

コメント：谷本 明（田辺市立新庄中学校 教諭）

新庄中学校の谷本と申します。津田中学校さんの活動とお名前は前々からずっと知っていたんですけど、今日改めて、きちんとした内容を聞かせてもらいまして、「やっぱり凄いな」と思いました。初めは少人数で始まったのが、年々パワーアップというかグレードアップして行って、「中学生が町を変えていくぐらいのレベルまで達しているな」と感じました。

新庄中学校でも同じような感じで、毎年度始めにテーマを決めて、総合的な学習の時間を使ってグループに分かれてやっていっていますが、たくさん参考になる部分がありました。学校以外の機関との連携ですかね。例えば、大学とか市社協とか自主防災組織とかとのその繋がりです。新庄中学校は、学校主体でいろいろとやっているんですけど、そういう他との繋がりがまだ弱い部分があって、今の発表聞かせてもらってすごく参考になりました。

最後の「子どもを使え」というのも、本当にその通りだなと思いました。午前中の小木中学校のもそうだったと思うんですけども、生徒が行ったら動いてくれるということが多いというのが改めてわかりました。浸水域に、教師がそんなものを持っていったら、「そんなの家に貼るのか」って怒られそうな感じなんですけども、生徒が行ったらほぼ全員が貼ってくれたというのとか、生徒が直接住民宅を訪問しているとか、そういった事も凄く参考になりました。また真似させてもらいたいなと思いました。大変参考になりました。ありがとうございました。



谷本 明先生

(2)大阪市立鶴見橋中学校

木下 祐介 (大阪市立鶴見橋中学校 教諭)

川島 彰允 (大阪市立鶴見橋中学校 教諭)

大阪市立鶴見橋中学校の木下です。本日は、このような場所で、私たちの学校が発表させて頂くことは本当に恐縮なんですけども、せっかくなので、私たちの学校ですと取り組んできた防災教育について発表させていただきます。



木下 祐介先生

1.川島です。ここからは私が本校の防災教育についてご説明させていただきます。本校の防災教育は大きく分けて、『学び』、『実体験』、『発信』の三つに分けてご紹介させていただきます。お手元のマニフェストにも、防災教育の取り組みを書かせて頂いています。

2.まずは『学び』についてです。午前中の黒潮町の防災教育の取組のサイクルとまさに同じなんですけども、本校の学びというものも、受け身になるような受動的な学びではなく、自分達の足を使って現地に赴き、しっかり学ぶということを大切にしております。



川島 彰允先生

左上の方が東北からの学びということで、今年で4回目になるんですけど、震災後毎年、代表の生徒が東へ伺わせて頂いております。その横に教職員視察とありますが、大阪市の「頑張る先生支援事業」という政策がありまして、本校は3年連続でその政策を受けさせて頂いております。教職員の東北視察、また和歌山、ここ高知、新潟等、様々な所の先進的な取り組みをされている学校を視察をさせて頂いております。私自身も今年の2月に始めて東北に向かうことができました。

春と夏の年2回、消防署のご協力を頂きまして、大型バスを貸し切って生徒50名近くを連れて、校外防災フィールドワークに行かせて頂いております。こちらは和歌山であったり、阪神淡路大震災のあった後の記念館であったりその現地に足を運ばせて頂いております。

専門家による学習会です。こちらは学校の中で座学で行うんですけども、この写真は、舞子高校の環境防災科にいらっしゃった諏訪先生にお越し頂きまして学習会を行いました。この取り組みの大きなポイントは、教職員だけでなく、子どもたちの防災の自主組織のリーダーと一緒にそこに交えまして、教職員と生徒が同じように座って、この学習会を受けることです。教職員も生徒も一つになって学んでスタートしていこうというような意味を込めて学習会を行いました。

3.続きまして『実体験』ですが、避難所訓練合宿が大きな取り組みの一つとなっております。先ほどの津田中学校さんも一泊二日の合宿の紹介がありましたが、本校でも取り組んでおります。ライフラインが限定された体育館での寝泊り、また今年は津波によって体育館が使えないということで、校舎の中でどこを使えるだろう、というようなアイデアを出しながら、子どもたちと一緒に作りました。

地域との連携が本当に課題で、うちの地域でも課題になっているんですけども、区役所の方に来て頂いたり、実際に警察消防の方と一緒に交流ができる機会でもあります。これも今年で4年目になり

ますが、何か新しいことをしようということになりました。そこで、生徒がそれぞれの家から一品食材を持ち寄って、その中でグループ分けをして、一泊二日で何を作れば乗り越えられるだろうかというようなサバイバルクッキングをしました。グループ分けをして、避難者役と誘導受付役に分かれて、実際に災害が起こって何分後に誰か来てっていう形で、混雑する受付所の中で混乱を経験するというような、少しだけでもリアリティに近づけるような活動を取り組んでおります。こちらの実体験の活動に関しても、子ども達の自主組織のリーダーが共にしっかりと考えて作る、ということを目指しております。東北に行った生徒、フィールドワークに行った生徒が学びを発表して、共有する場しております。

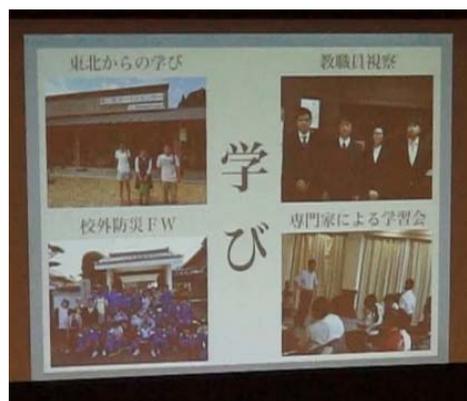
4. さらに『発信』という点ですけど、こちらは学びから感じたことを発信する、その中で子どもたちが自己肯定感を高めて、自分のやってきた事への達成感を感じる場として発信を作っております。

左側には、他校の教職員研修として、近隣校の中学校の先生に、自主組織が取り組んでいることを見て頂いて、子どもたちが、どういう思いで、どういう行動をしているのかを発表させて頂きました。その右は校区の小学校への出前授業です。右下は地域の様々な場所で、子どもたちが防災活動で学んだことを発表させて頂いております。中学校の先生や大人に発表するときは、子どもたちが立派にモデルになるような生徒、この様な思いを持っているというのを発表すると同時に、校区の小学校では、先ほどアクティブラーニングのお話もあったんですけども、自分よりも後輩の子ども達に教えるということで、しっかりと子ども達は学ぶことを意識して伝えてくれています。この小学校から「中学校に入ったらこの防災の組織に入りたい」というような声が出てきて、実際にその思いで、今年、中学校一年生になって活動してくれている生徒が7人おります。左下の岩手県の高校生がプレゼンというのは、今年4度目の東北視察で、初めて学びに行くだけでなく、本校の思いをしっかりと伝えようということで、この様な取り組みをさせて頂きました。

以上のように三点、学び、実体験、発信という形で本校の防災教育は進めております。



1



2



3



4

本日の参加者リストを拝見すると、大阪から来られた方がいらっしやらなかったなので、せっかくですので私たちの町や歴史、なぜ大阪で防災教育をやっているのかというのを木下から話させていただきます。

5.これは観光名所なんですけどもご存知でしょうか。日本一高いビルとして、ついこの間できた『あべのハルカス』であったり、グリコの看板のあるのが『道頓堀』です。下は『通天閣』です。私たちの校区は、ここから一駅くらいしかの距離にあります。子どもたちは、自転車でこちらに行くことができるような、繁華街にも近い地域でもあります。



5

6.学校は西成区にあるので、たぶん名前をご存知だと思いますが、繁華街よりも近い場所に、『あいりん地区』と言われている場所があります。全国で最も日雇い労働者の方がいらっしやる地域であります。路上生活の方が本当に沢山いらっしやいます。そこから学校まで自転車で10分くらいの距離にあります。



6

こういったところで育っている子どもたちなんですけども、ちょっと想像してみてください。私は8年前に講師として初めてこの学校に来させて頂いたんですけど、当時はとても今のように防災教育ができる環境ではありませんでした。辛かった時期は、みんな勉強してなかったです。もう学校が学校じゃないといいますが、名札を付けている、付けていないのレベルじゃなかったです。私服で学校に来る。好きな時間に学校に来る。路上や校内で喫煙する。突然学校からいなくなる子も沢山いるような状況でした。こういった状況でとても勉強ができるような環境じゃありませんでした。

子どもたちの現状

地域の課題
生活背景
家庭環境

7

7.子ども達の現状としまして、地域の課題、生活背景、家庭環境という、三つをあげさせて頂きました。まず地域の課題としましては、すぐ近くに難波などの繁華街がありますので、ガールズバーとか性犯罪、覚せい剤の問題等も非常にある地域です。次に生活背景においても、生活保護や何らかの支援を受けている生徒の割合が高く、経済的にも非常に辛い地域であります。それから家庭環境については、母子家庭と父子家庭の割合が半分以上で、親に虐待やネグレクトを日常的に受けているという生徒もいます。3年間担任させて頂いた生徒なんですけど、生徒会長とクラブのキャプテンをしていたんですけど、毎朝5時に起きて、自分にご飯を作って、洗濯物を干して、それで朝練に来ていました。「ここはどういう学校なんだ」という感じで、私自身も当初は「こういう環境の中で教育なんてできないんじゃないか」と思いました。親が「勉強なんかなくていい」と平気で言う家庭も多かったですので、授業が成立しないような状況でありました。

8.しかし、東日本大震災が発生したときに、当時の校長先生が、「自分たちできることは何か、もっと考えよう」と言われました。すると、有志の3人の教職員が、6月に突然南三陸にボランティアに行かれました。そして、実際に現地を見て、帰ってきた3人が、「これはもう真剣にやらなきゃいけない」と思ったのがきっかけでした。その年の夏に、地域の応援もありまして。生徒3人と教職員2人が東北を訪れさせて頂きました。

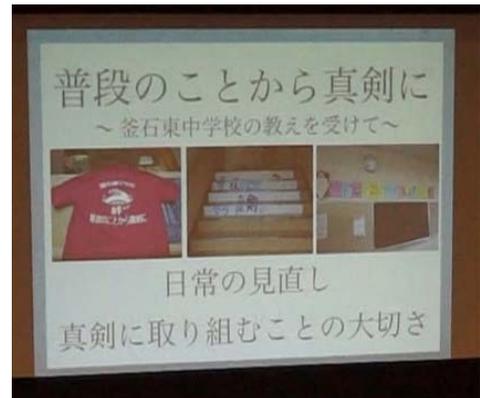
9.この写真は、釜石東中学校さんなんですけども、私どもの生徒会長と副会長の3名が、当時の釜石東中学校の生徒会の生徒さんと交流させて頂きました。そのときに交流の中で、生徒さんから「普段のことから真剣に」という言葉を教えて頂きました。この3人が帰ってきて、全校集会でそのことを報告したんです。普段の集会では教師の話なんて聞かない状況だったんですけど、まだはつきりと覚えているんですけど、そのときは学校の部屋が静まり返るように、子どもたちが3人の話に耳を傾けていました。それを見て、「もしかしたら学校が変わるかもしれない」と思いました。「普段のことから真剣に」というのは、「避難訓練を日常的に真剣にする」というメッセージだったみたいなんですけど、私たちは「全て日常見直して、全ての事真剣にしないといけない」という教育活動を行っております。

10.「全ての事を真剣に」ということで、挨拶、服装、掃除、遅刻といった単純なところから始めたんですけど、そういうそういったことに前向きになってきました。その中で、これは大阪城公園という所なんですけども、ボランティアに自分らで参加したりするようになりました。注意しても聞かなかった生徒も、そういうムードに流されるといいますか、真面目な生徒に声掛けられて、学校全体が前向きなムードになっていきました。これは自慢したいんですけども、治安が悪いとか怖い地域だと思われている方いらっしゃると思うんですけど、この地域は本当に温かい町でして、そういういろんな課題のある方も受け入れるということで、本当に温かい学校なんです。

11.防災教育のスタートということで、子どもたちの方から「先輩みたいになりたい」と言われ、「じゃあ生徒会みたいな組織を作ろう」ということで、『子ども防災プロジェクトチーム』、子防プロと皆は言っているんですけども、そういった組織を立ち上げました。最初は有志5、6名で



8



9



10



11

始めました。校長先生から「あなたがやりなさい」と言われ、何もわからないのに「はい」と言いまして、担当になりました。この組織で、神戸に行ったり、消防局の人に訓練して頂いたりしました。三年生の担任をしていたんですが、辛い毎日で「何でこんなことしないといけないんだろう」と思ってスタートした次第でございます。

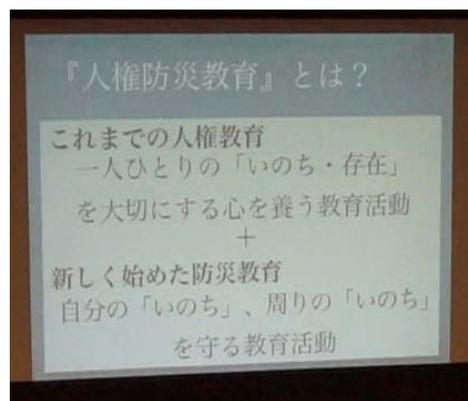
12.本校はずっと人権教育を大切にしてきました。これまでの人権教育は、「一人ひとりの『いのち・存在』を大切に
する心を養う教育活動」ということで、本校は平成 22 年
度から 24 年度まで、人権教育の指定校になっていました。
そして、防災教育は、「自分の『いのち』、周りの『いのち』
命を守る教育活動」と捉えると、「いのち」というフレー
ズが共通するんですね。ということで、私たちは、二つを
合わせて『人権防災教育』としまして、教育活動を発展さ
せようとしております。

13.たぶん大阪と他府県の方との一番の違いなんですけど、
タイトルに「未災地」という言葉を使わせて頂きました。
いつ災害が起こるかかわからないですが、実際にもし災害が
起こったとしても、川は近くにあるんですけど、津波の被
害はほとんどない地域なんです。ですが、先ほどお話しし
たように、いじめの問題であったり、いろんな事件事故、
あるいは火災など、そういったものはもの凄く近い存在で
す。なので、そういった「いのち」とか「つながり」を大
切にする教育活動ということで方向を変換しております。
もちろん、地震とか津波の訓練もしておりますけども、「命
を守る」とか「繋がりを大事にしよう」という教育活動で
今は行っております。

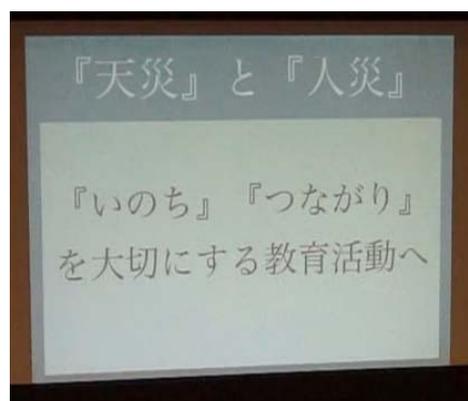
14.ですので、命の学校を目指して、今は頑張っております。

15.その中で、「本物との出会い」が大事だと思います。先ほ
どの三人の先生に、私が担当になったとき「東北行かなきゃ
いけない」と言われて、プライベートで無理やり連れて
行かれました。お金を使うことで支援をしようとイベント
だったんですけど、そこで語り部をして頂いた大槌町の男
性に出会いました。津波で婚約者が流されたそうなんです
が、「今大事な人がいるんでしたら、大事にして下さい」
というような話を、生の現場で聞きまして、それまで「や
らされてる」と思っていたんですけど、「やらなければなら
ない」と自分の心も変わりました。

教育活動する中で、沢山の方と出会っております。つい



12



13



14



15

この間なんですけど、新庄中学校さんにも子どもたちと一緒に伺ってきました。旅館の女将さんに出会ったり、東北の現地の方の話をたくさん聞かせていただいて、私自身も変わりましたし、それを見て、子どもたちも変わってくれたというストーリーになっております。

16. どうしても代表の生徒しか現地に連れて行けないので、去年からなんですけど、「命の講話」を始めました。去年は岩手県の男性の方をお願いして、鶴見橋中学校に来て頂きました。その人の話を聞いて、やっぱり子どもたちが凄く変わりました。右の写真は阪神淡路大震災を4歳のときに経験された女性の方です。こういった体験した人の生の声、本物の声を聞くことで、子どもたちがどんどん変わってきております。

17. 「防災透明人間」という謎の言葉です。僕が、学校防災委員会という大人の会議も担当していて、週に一回授業の間に毎週やっています。最近子どもたちが本当に変わってきてまして、子どもたちから「こういうことをやらせて下さい」というようになってきました。だから私も防災の会議の書類を全部子どもたちに見せて、「これどうですか」と聞いて、「それだったら、こっちの方がいい」という子どもの意見をそのまま採用するようになっていきます。

ここで『透明人間』というのはどういうことかと言いますと、「教員はいるけど見えないような存在」といいますか、「黒子に徹する」といいますか、とにかく「子どもたちが主役になる」、「やりがいを感じるような教育活動」をしていかないといけないなと思っております。

18. 「人は人でしか変わらない」ということで、全国各地との心の交流というのが続けられております。本当に嬉しいんですけども、子どもたちがこのような状況のなかで輝いていくのを見て、被災地の方がこちらに勉強させてもらいたいという話になりました。右側は大槌町の高校生の方なんですけど、来月の連休のときに初めてなんですけど、大槌町からこちらに来て頂いて、子どもたちと交流をするというところまで発展しています。

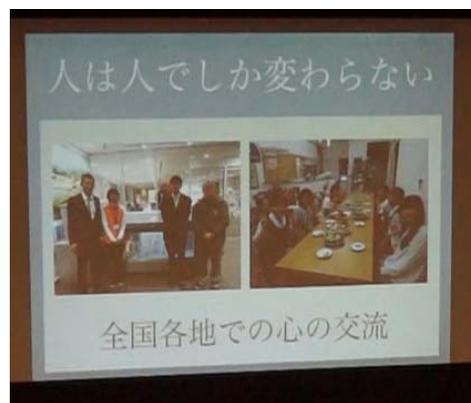
左の写真なんですけど、私は中越地震を全く経験してなかったもので、つい先日ですが、旧山古志にも行かせてもらいました。「人は人でしか変わらない」と書いてあるんですけど、これもお聞きした話なんですけど、この何年間で本当に沢山のの人に学ばせて頂きまして、自分自身ここまで変わることができました。



16



17



18

19.続きまして、「持続発展可能な実践のために」ということです。先ほどの討論会でも孤軍奮闘されている先生、でもそれは後に続かなく発展しないという課題があったと思います。本校でも木下先生が、8年間、孤軍奮闘されてきました。私は鶴見橋中学校に赴任してまだ2年目です。昨年のことを思い出して話をさせていただきます。

あのような生活背景とか課題のある学校に赴任して、正直なところ、子どもたちの現状であったり、地域の現状に本当に度肝を抜かれました。その中で防災委員に入らせて頂いて、いきなり「避難訓練をなさい」とか「地震に備えろ」という話を聞いたときに、正直な気持ち、そんな事をやっている暇ないと。一年生の担任を持たせて頂いたんですが、学級崩壊していました。子どもたちと心が通わない、心がすさんでいるところで、新しく来た自分に対して凄い罵声を浴びせるというようなところがありました。そんな中で、「訓練をなさい」とか「防災のことを語りなさい」と言われても何一つできなかつたんです。

ただ、いきなりそんな状況に放り込まれたんですけども、先ほど紹介された「本物の命の講話」として、大槌町から来られた婚約者亡くされた男性の「本当に大切な人に『ありがとう』という言葉を送って下さい」という話を聞いていたときの子どもたちの目の輝きと、その後に書いた感想、その後の行動というのが本当に変わりました。それを目の当たりにして、「防災教育って、こうやって何か子どもたちの核心に迫って、命から揺さぶっていくような取り組みなんだな」ということを学びました。そして、私も「やらせている」という気持ちが「自分からこれをやりたい」という気持ちに変わりました。私がそういう気持ちになると、子どもたちもその姿を見てくれて、特に防災の事をクラスで全て伝えているわけじゃないんですけども、素直な子ども達ですので、「取り組みが変わったな」、「行動が変わったな」ということをそのまま声に出して伝えてくれました。

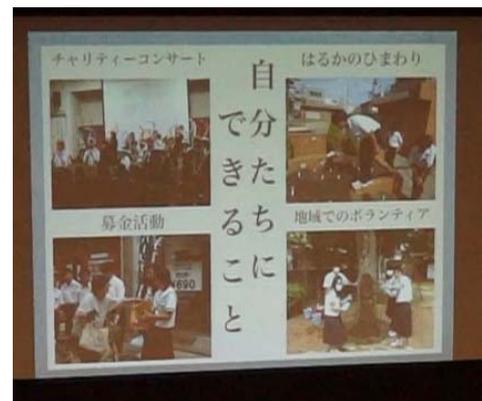
子どもたちを「学び続ける生徒に育てたい」と思うのであれば、まず自分に矢印を向けて、まずは自分が変わらないといけないということを、鶴見橋中学校の取り組みを通して教えて頂いたと思っています。

20.そんな中、昨年度の終わりから、私自身がボランティア活動をしていた経験がありましたので、「自分たちにできることを考えよう」、命を見つめたうえで、その命を何に使うかを子どもたちと一緒に考えたいと思いまして、ボランティア活動に積極的に取り組みました。子どもたちが何か一つ動くと、地域の大人であったり、周りの教職員の方々から、「ありがとう、偉いね」という言葉をもらえるんですけども、それが何よりの子どもたちへの報酬だと思っています。

左下のネパール地震の募金活動では、やったあとに「西成のおっちゃんおばちゃんが、こんな気軽に募金してくれると思わなかった」「みんなケチだから、きっと一円も集まらないんじゃないかと思った」と子どもたちは言ったんですけど、生徒達が大声で募金の声掛けたら、すぐに地域のおっちゃん



19



20

んおばちゃんが自分の小銭握って、入れてくれていました。その姿を見て、僕自身も西成を見る目が変わりましたし、子ども達も「自分達の地域って本当に温かいんだな」っていうことを口々に言っていた活動になりました。



これは、本校の文化だと思っんですけども、防災という言葉聞いたときに、「子どもたちをどうしたら輝かせることができるか」ということで、教職員の方々は工夫をします。右上の写真は、「はるかひまわり」という取組です。阪神淡路大震災の跡地に咲いたひまわりの種を植えるという取り組みを、一年生の学年の先生方が、子どもたちとともに作り上げたプロジェクトになりました。左側はチャリティーコンサートです。木下先生受け持っている音楽部の生徒と学年主任をされている三年生の生徒が、チャリティーコンサートを行って、それを大槌町に返したいということで実施しました。当日 100 名以上の方がお越しになって、5 万円近くの募金が集まり、そのお金を大槌町に送ることができました。驚くことに、大槌町の方は、そのお金を違う災害で被災された方々のために使いましたというご報告を頂きました。このように、そういうバトンが人と人との繋がりで子どもたちにも受け継がれているということを感じています。

今回、高知に来る前にも、生徒がこの一年間のボランティア活動の総まとめの発表を防災と絡めてしてくれました。その前に、生徒が同様の発表してくれた時の話です。担当の生徒たちが、地域の皆さんの前で、「私達は地域のためにこういう活動しています」と立派な発表をしてくれました。そして、みんなから「頑張ったね」と言って褒めてもらいました。しかし、その同じ日に、校区の小学校の前の公園で、発表した彼らの同級生が、煙草を吸って、騒ぎ散らかしていると地域から通報されてしまいました。ついさっきまで「地域のために頑張ります」と言っていた中学生を率いていたのに、その直後に、地域に迷惑をかけている同級生を指導。このようにまだまだ課題もたくさんあります。ただ、先ほどの座談会でのまとめのように、「どうしたらその子どもたちを包み込んで、新しい実践ができるのか」ということをしっかりと学んで、今度は、「その子どもたちもこっちの輝かせる側にもっていけるような活動」をしっかりとしていきたいなと思っております。

本当にまだまだ課題があります。特に学力の問題が非常に辛いです。しかし、こういう活動によって自尊過程、自己肯定感が、昨年度もまた全国平均を上回りました。子どもたちは自主的に動いております。せつかくなので、この 3 年間で変わってきた子どもたちの様子を見て頂きたいと思います。今年の 1 月 17 日に阪神淡路大震災からちょうど 20 年ということで、防災土曜日授業を行いました。そのときに三年生が、「卒業する前に最後に後輩に伝えたいことがある」ということで、アドリブだったのですが、リーダーの子が後輩たちに伝えるという映像を見て頂きたいと思います。

それで、マニフェストに『鶴中未来宣言』を載せています。他の学校さんもされているようですが、これはぼうさい甲子園の防災未来宣言を拝見させて頂いて、鶴見橋バージョンを作ろうということ作成しました。前文は私が作っておりますが、映像は、子どもたちが考えた宣言文を全校生徒の前で発表する様子です。

『三年生の宮川です。私は今すごく後悔しています。一年間勉強しなかったことや、大切な人に「ありがとう」という言葉を言えていないことをものすごく後悔をしています。子防プロに入って後悔しているのは、後悔していることを今やっておかないと、そうやって震災のときに何も本当に後悔してしまうから。だからとりあえず伝えたいことは、「今自分がやりたいなと思っていること」、「伝えたいなと思っていること」は絶対にやってください。』



『三年生の金沢です。僕がまず言いたいことは、「誰かがやってくれるだろう」という考えをなくしてほしいことです。そういう考えを持っている人は多いと思うんですけど、やってくれる人は本当に少ないです。誰かはやってくれません。だから、本当に自分からやらないと、自分達たちが動かないと何も起こりません。逆に「どういうことを行動したらいいか」と言ったら、私がしゃべった時に自分の命を守ってください。自分の命を守るのは、どうしてもそれぞれの防災教育の力、またそれぞれの自己を守るための力、そういうことも少ないですけども、自分が死んでしまったら人の命は守れないので、まず自分の命を守ることっていう。とにかく命は大事なので、そこから皆さんを連れて行ってください。ありがとうございました。』

『鶴中未来宣言。鶴見橋中学校は、東日本大震災を受けて、「自分たちにできることは何か」と考え、先輩たちが東北を訪れました。そのとき学んだ「普段のことから真剣に」を学校のスローガンにたくさん取り組みを行ってきました。決してそのときだけで終わらず、先輩の意思を引き継ぎ、命の学校を目指し、何事にも一生懸命取り組んできました。東北の皆さんからのメッセージ、防災学習会、避難所訓練合宿、様々な活動を通して、命の大切さを改めて感じ、沢山のひと繋がり、思いを伝えてきました。2015年、阪神淡路大震災から20年を迎えました。これからも私達は、この鶴見橋中学校をさらに発展させるために、未来に向けて宣言します。

- 一つ、今を大切に、今を一生懸命生き抜きます。
- 一つ、自分の命、周りの命を大切に活動を広げます。
- 一つ、国と地域、社会、自然、かけがえのないものとの触れ合いを続けていきます。
- 一つ、もしもの時も生きる指導をし、地域の一員として子供を守ります。
- 一つ、感謝の気持ちや思ったことをその時言葉にし、行動に移します。
- 一つ、この時代に生まれた人間として、使命感を持って生き抜きます。

2015年1月17日、子ども防災プロジェクトチーム一同』

今しゃべっていた子も、本当に課題のある家庭の子ですし、一生懸命聞いてくれていた子たちも課題がある子です。私自身も防災教育はまだまだわからない部分もあるんですが、教育のプロとして、プライドを持って、先生方と一緒に教育活動に励むとともに、子どもたちがもっと輝けるような学校作りをしていきたいと思っています。このような会議の場で発表する内容ではなかったかもしれませんが、以上で私たちの発表を終わります。

コメント：西本 貴俊（黒潮町立佐賀中学校 教頭）

黒潮町立佐賀中学校の西本です。今の発表を聞かせて頂いて、日々先生方が子どもたちに真剣に向き合う。そして、先生方が変わり、子どもたちも変わる。その中で、子どもたちが自分たちで動いていく姿が、発表の中から思いとることができました。日々のいろいろなご苦労の中に、喜びを感じながら、実践されている先生方の力を大きく強く感じました。



西本 貴俊先生

まだまだ課題はあると思いますが、子どもたちと真剣に向かい合っている先生方の姿を見ながら、子どもたちは日々学習していると思います。そんな中で防災教育に取り組み、そして先生方が『人から学ぶ』という素晴らしい姿で、子どもたちに実践を伝えている。そして子どもたちが変わってくる。そういった姿の中から色々学ぶべきことがありました。

私たちの学校も、防災教育に取り組みながら、そして同じように人権教育を基盤としながら、日々の取り組みを行っております。今年は、若い防災主任の先生が中心になり、各学年部の先生でまとまって、前向きに防災教育に取り組んでくれています。ただ、まだ子どもたちが自主的に活動するまでには至っていません。

発表を聞かせて頂いて、やはり自分たちが学びながら、そして子どもとともに学習を深めていく。そして子どもたちの考え方を大切にしながら進めていく防災教育、そして人権教育、そして教育全体に波及していく力が、やはり大事であるということを学ばせて頂いたと思います。本当にありがとうございました。

(3)高知市立城西中学校

宮田 龍 (高知市立城西中学校 校長)

- 1.城西中学校の校長の宮田と申します。うちの三浦先生です。前任校の潮江中学校でも一緒でした。前任校で、彼は防災主任、生徒指導を担当し、3年間組んでやっていました。先ほどの話ではないですが、大変厳しい学校でございまして、赴任した当時は1年間でガラスが100枚も割られました。防災教育と生徒指導を取り入れることによって、3年目の最後の年は、20枚に減りました。昨年城西中学校に赴任しました。城西中学校からは高知城がすぐ前に見えます。学校から直線で100mくらい行きますと坂本龍馬の生誕地がございまして。うちの校区でございまして。
- 2.今日のお話のポイントは二つでございまして。『城西龍馬新聞』を作成し、発信しました。テーマは防災を中心に行っていました。そして、道徳の冊子を作成し発信しました。新聞づくりはNIEを昔から好きでしたのでやっておりましたが、道徳教育につきましては、昨年城西中に来てから勉強いたしました。平成30年度に道徳の教科化が始まります。今まで反対をしておりましたが、やるならば一番に冊子を作り、先に実践していこうという思いがあります。
- 3.うちの校訓は、長い間「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という考えでした。私はそれを具現化するなかで、偉人ではなく先人の思いをポイントにし、「龍馬の夢と志は、城西中学校の生徒の夢と志」を設定しました。学校教育には『夢と志』がなければ、教育の本筋から外れるという思いから、ここをポイントにおきました。
- 4.では、『龍馬の夢と志』を持っていくなかで、何をするかというと、『防災教育』、そして『道徳教育』です。道徳、同和教育、人権教育は、前々任校の朝倉中学校でも長い間実践してきました。人権同和教育と道徳教育は、ある面では対極にあります。しかし、龍馬の勉強をしていくと、薩摩と長州が対極にあったということはないかもしれないけれども、子どもの幸せや思いを大事にしていくことはしっかり一緒にやっっていこう、という思いで道徳教育を中心に入れております。そして、『観光教育』。私はこれから観光教育だと思っております。観光教育というのは、郷土に自信と誇りがなければ、絶対自分の土地の良さをPRする



宮田 龍先生



三浦 洋志先生

<p>防災教育連絡協議会にて</p>  <p>平成27年12月27日【日】 城西中学校 宮田 龍</p> <p>1</p>
<p>今回の取組のポイント</p> <ul style="list-style-type: none">*「城西龍馬新聞」の作成・発信 テーマは防災を中心に！*「道徳の冊子」の作成・発信 《龍馬地震への八策》 <p>2</p>
<p>本校の教育の校訓が、 「ひとりみんなのために みんなはひとりのために」を伝統として教職員・生徒も長い間引き継いできている。</p> <p>⇒昨年度(平成26年度)に現在の生徒へのメッセージとして、先人の龍馬にスポットをあて、 「龍馬の夢と志は 城西中生徒の夢と志」と目標を設定した。</p>  <p>3</p>

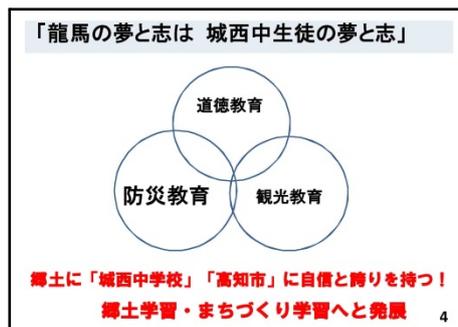
ことはできないと思っております。最近、観光教育学会が立ち上がりましたが、どうしても観光教育も入れていかなければならない。城西中学校は高知市の真ん前でございますから、取り組めるんじゃないかなと思いました。という思いで、城西中学校、高知市に自信と誇りを持つ、そして、郷土学習、町づくり学習へと発展をしたい。私は、防災教育は『自信と誇りを持つ教育だ』と思っております。もっと言えば、人権教育で勉強してきた中の『優しさの教育』ではなかったかなと自分自身は思っております。

- 5.今日は防災教育に特化してご説明させていただきます。『龍馬の地震への八策』、『交通安全の八策』を作りました。
- 6.『地震への八策』の内容は資料を見て頂いたら、おわかりになると思っております。子どもたちと一緒に作りました。実際のところ、子どもが六割で、教員が四割くらいは力を入れております。いろいろなテーマで八策を作っておりますが、最後の方に作った『観光教育の八策』では、子どもが95%、教員が5%くらい力しかいれなくても作れるようになりました。

『龍馬の八策』にちなみまして、『食育への八策』とか『交通安全の八策』、『観光教育の八策』など作りました。三つ四つでは足りませんが、五つになると結構いい、十個では多すぎる。だから、八策、八本としたのは、上手くできたなと思っております。『地震への八策』は約3,000枚作りまして配りました。高知市長さんに大変気に入って頂きまして、庁議にかけて、そして高知市の内容としていただきました。

- 7.昨年作った『城西龍馬新聞』です。一号は龍馬が食べたであろうという食事です。そして二号が「地震でも『八策』ぜよ!!!」という形です。防災教育を目立たせたいということで、二号を一番にして表に、一号は裏にしました。中味は全て、『チーム龍馬』が作りました。うちのスポーツクラブの子はあまり強くないですけど、よく頑張ってくれています。私は勝った負けたというよりも、家庭科部とか華道部とか、あまり目立たないクラブの子がどうか、こういう機会を通じて活躍できるといいと思って、龍馬が食べたであろうという食事の再現、地産地消をテーマにしました。

- 8.昨年、この新聞と八策を出しましたら、国土強靱化という中で特別賞を頂きました。八策という切り口が上手かったのではないかと。
- 9.今年は、気仙沼市立階上中学校とテレビ会議を行いました。『薩長土生徒フォーラム』ということで進



平成26年度
「龍馬の夢と志は 城西中学生の夢と志」
テーマを打ち出す。
*「龍馬の地震への八策」
*「龍馬の交通安全八策」
◎「城西龍馬新聞」の発行
※国土強靱化大賞の特別賞



平成27年度
◎7月9日(木)階上中学校と【防災について】テレビ会議
文科省政務官来校
◎7月28日(火)「平成の薩長土生徒フォーラム」城西中にて
○「龍馬の食育への八策」作成中
◎「城西龍馬新聞」の発行
※道徳の教科化(地域教材)
1月17日(日)自主発表会

めていきました。

城西中学校を紹介するのを忘れておりました。龍馬の生まれた町にある学校で、生徒数 350 名です。いろんな学校に赴任してまいりましたが、現在の城西中学校は大変素晴らしいです。エスケープはゼロ、金髪はゼロ、煙草を吸う子どももゼロです。学力は上から何番という学校です。今まで厳しい学校で闘ってまいりましたので、いい学校はもっと良くしていこうと。「こういうこともできるんだよ」という形を前に出していくのが仕事かと思っております。

例えば、この新聞ですが、A3 で作っておりますけども、これを意図的に拡大版にして、4,000 部作りました。保護者に配り、地域にも配りました。学校の前に『龍馬の生まれた町記念館』がありますので、そこも置いています。500 部位置きますと、一ヶ月でなくなります。新聞を大きくして作るお金はどこからできてきているかという、裏面の隅を見てもらったらわかりますけれども、いろんなところの助成団体やから出ております。それから企業の広告です。

10.今年 9 月 29 日、藤井先生（京都大学大学院教授）に本校に来て、土木学会が作成した「防災まちづくり・くにづくり」に関する授業を行ってくれました。

11.うちの学校の隣に、高知県で唯一の盲学校があるんです。そこで、盲学校の子どもたちと一緒に勉強して、そ

して点字で八策を作ろうじゃないかということになりました。私は、長い間、人権教育を進めてきておりましたけれども、うちの子どもから学び直しました。この点字の勉強を通じて、優秀な子どもから言われたのは、「防災教育で一番大事なのは、ハンディキャップという辛い思いの人が全部助かったら、防災教育で一番いい特典なのかもしれないですね」、というような言い方をしていました。

12.前任校では、『八策』を、英語、中国語、韓国語に翻訳していました。中国からの子ども、韓国からの子どもがいたので、「ぜひ作ってくれ」と言ったら、自信をもって全部中国語、韓国語に直してきてくれました。前任校で、韓国、中国からの留学生と話をしておいたら、「高知県で南海トラフの地震が来るのを知らなかった」、「全然聞いたことがない」と言っていました。それで、中国語、韓国語のポスターを作って、高知大学等々に置かせてもらい、大変インパクトがあったなと思っております。

城西中学校には、中国、韓国からの子どもは現在いませんので、英語版をつくりました。優秀な子どもたちなので、ほとんど自分たちでつくりました。校正は ALT がさっとやってくれましたね。それで、せっかく作ったのをそのままにしておいてもいけないので、高知市の観光課に持って行って、観光課で配ってもらうようにしました。

13.学校教育の中に大学の力を入れるのは当然ですけれども、私は企業の力、行政の力、民間の力を入れることは絶対必要だと思っています。その中で、企業の協力、災害救援槽を中庭に置いてもらいました。もちろん無料です。学校教育の中に、企業の力、アイデアを入れることは、ある面ではインパクト

「龍馬の地震への八策」の『点字版』を作成



お隣の盲学校の校長先生にお渡ししました。

11

「龍馬の地震への八策」の『英語版』を作成



高知市商工観光部観光課長さん
観光協会 事務局長さん にお渡ししました。42

【企業の協力】災害救援槽を中庭へ 平常時は地下貯蔵槽、災害時は便槽



13

トがあるんじゃないかなと思っております。普段はこの中に、トイレットペーパーや防災グッズ、トイレの上屋を入れております。そして地震が起こったときには、自分たちで上屋を建てる。下は便槽として使うことになり、500人が30日間使えるということなので、1,500人くらいの便槽として使えるんじゃないかなと思います。地下に埋めてあるので、中庭はフラットになっています。身近にこういうものが設置してあると、子どもたちの意識付けになって、大変いいんじゃないかなって感じです。

15.先ほどご説明したように、中学校で防災のテレビ会議を日本初で取り組みました。

全校の子どもたちが、階上中学校の生徒がしゃべることを各教室で聞きました。本当は、階上中学校へうちの子も350人全員が行って、自分で勉強するのが一番大事です。それが駄目なら、体験している方に来てもらって、お話を聞く。しかし、もっと有効的なことは、子ども同士で話することだと思ひ、宮城県の階上中学校との防災の交流をテレビ会議で行いました。

16.こんな感じです。事前にうちも勉強しておきましたけれども、宮城県で災害を経験した子との話し合いは、雲泥の差でしたね。こんな質問しても、相手は全然中味が違ってましたね。

17-18.その後、私は生徒4人代表として気仙沼のその学校まで行ってきてもらいました。

19-20.帰りに永田町に寄りまして、国会、総務省、文科省等々にも寄って帰ってまいりました。

21-23 行ってただけで、そのまま終わるわけにはいけないうこと、訪問した子どもたちには新聞を作ってもらいました。「つながる防災への思い」という記事です。

24.そして、全校生徒に見せたんですね。子どもたちは読んで、びっくりしていました。行って来たといことは聞いていたけれど、「こんなふうに仲間は感じてきたのか」「こんな勉強してきたのか」という形で、仲間の感動や学習が思い浮かんだということです。子どもたち同士の内容というものは影響力があるなと思っています。

25.「龍馬の夢と志は城西中学校の生徒の夢と志」を作っております。この中に、『龍馬の八策』とか、『地震の八策』。そしてまた『観光への八策』を作っております。八策シリーズは、全てアクティブラーニングにしております。「こうしなさい」とは何一つ書いておりません。自分たちで「この八策



からどんな事がわかるか」、そして「どんな答えを導いているか」を重視しています。

今までに授業で実践していたときに、読み物資料を見せましたら、勘取りのいい子どもは、読んだ瞬間に「公正公平だ」とぱっと答えを言うてしまうんですね。そして、授業をやっていると、授業をやっている私の心情を読むんですね、「宮田は何が言いたいのか」と。読み物資料を使った指導法、やり方がまずかったんでしょうね。だからこそ、子どもたちが自分で問題解決をしていく指導をしていく。

26.例えば、『地震の八策』を見て、その中味を考えて、「一番から八策までの中で、一番好きなのは何だ」、それは「どうしてだ」とか、「八策だけじゃなくて九番目もあるはずだ」、じゃあ「九番目の落っこちてしまうところは何だろうな」と考えるなど、ゲストティーチャーをいれて、みんなで一緒になって研究していこうかなと思っているところです。

27.うちの学校が、しっかりと『防災教育』にアプローチしたのは、昨年からになります。もちろん高知市内の学校ですので、それまでものある程度のベースはございます。私は、大卒の中で、『観光教育』、『道徳教育』、そして『防災教育』を重ねた中で、「龍馬の夢と志は城西中の生徒の夢と志」なんだと、こういうところに持っていきたい思いがあって、今進めているところです。

私は、城西中学校の生徒に「自信と誇りを持たず」、「これが学校経営の骨である」。そんなふうにして、いろんな形で勉強させて頂いて、『防災教育』がその中の大きなポイントであると思っています。ありがとうございます。

コメント：小川 正（輪島市立輪島中学校 校長）

今日の三本の事例発表を聞いて、自分は防災教育の関わりで来たんですけども、教員研究にきたのかと疑うような感じで今降ります。二つ目の大阪の先生のお話は初任者研修、一つ目のお話は中堅の先生方の研修、そして三つ目の校長先生のお話が管理職研修と、三本とも素晴らしい講演でした。



小川 正先生

自分が思っていたのは、校長先生の発想力、そういったところから考えると、防災教育だけではないですけども、トップに立つ者もあるいは新人であってもそうですが、まずやっぱりクリエイティブであるというか、『創造性』、これが一番大事なんだと思いました。これは、片田先生が提唱された『想定にとられるな』と通じるところです。

またアクティブに、そしてポジティブに進んでいくためには、率先して何かをしていくことが必要かと思えます。「率先先駆者たれ」と勝手に思っているんですけども、こういったことを感じます。

そして、「最善を尽くせ」ということもそうですけれども、防災教育をやっていくときに、自分も感じているのは、『発信する力』。先ほど、黒潮町では、「逆手に取って 34m の旗のマーク」をつくられていました。そして、宮田校長先生は「この新聞もわざと大きくしました」とおっしゃいました。今年の夏、新庄中学校へお邪魔したときに体育館に新聞の切り抜きが貼ってあったんですけども、これもパネル大に拡大してありました。具体的にしっかりと「見える化」して大きく発信していく。「大きなことは、いいことだ」って昔言いましたね。それがやっぱり大事なんだと。

もう一つは『柔軟さ』。これは絶対大事かなと思います。黒潮町さんもそうでした。また、このパンフレットの裏には「この冊子は〇〇の助成により作成しました」と書いてあります。何を作成するにしてもお金がかかります。そのお金をどうやって取ってくるのか。こういったところに一つヒントがあるのかなと。

もう一点は、午前中の座談会の中で、「防災教育を進めていくときに、何が一番根本的に大事ですか」と。リアリティの問題もありました。でも、自分がその時に感じたのは、「未来へ生きていきたいという思い」がなければ、逃げたいという思いにはつながらない。つまり、「未来にこの地域に住みたい」とか、「将来大きくなってささやかでも小さな家庭を作りたい」とか、「僕はこういう大学へ進学したい」、だから「今死ぬわけにはいかない」と。一番基本的なところが大事なんじゃないのかな。それが何かと考えたときに、『志』かなと思っていたんです。

大河ドラマの「花燃ゆ」の中に、「何故学ぶか」と。「学んで考えるんだ。それが生きる力につながるんだ。」と美和さんが話しました。生きる力とは、そういう事かとおぼろげながら思っていました。また「お前に志はあるか」と龍馬が美和さんに問いかけました。校長先生がつくられた「龍馬の夢と志は、城西中学校の生徒の夢と志」は、そのまま持って帰ろうと思いました。「〇〇の夢と志は、輪島中生徒の夢と志」。『希（まれ）』が、一生懸命パティシエへの夢を語っていました。これに引っ掛けて何とかしてやろう、と思っています。

校長先生がここで話されているのを聞いて、「次は何をするんだろう」と何となくわくわくしてきました。文科省へ行ってみたり、色んなところへ行ってみたりと、次から次へとアイデア出てきますよね。こうやってアイデアがでてきているときは、当然ポジティブですし、そういったエネルギーがでるときなんです。マイナス思考がないとき。防災教育にマイナス思考はいらないと思います。逆に防災教育は、プラス思考を発揮する絶好の機会。アクティブラーニングの使用もそうですし、解はないんで安心してチャレンジできると思います。だから、できることから手当たり次第にやっていく。「次何するの」って、子どもたちから言うてくるくらいに、どんどんアイデアをだしていき、そういう事が今の校長先生のお話の中から出てきたんじゃないかなと思います。

それから今ちょうど『能登半島』、『希』と引っ掛けて、輪島を宣伝したい」と思っていたところに、『観光』を三つの柱の一つにされていた。今日は自分のためにお話いただいたのかと思いました。『観光』と『道徳』と『防災』、これも持って帰ってすぐに使える。要はアンテナを如何に高くして、いろんなところに繋いでいくのか。ですから、防災教育のキーワードは、「つなぐ」なのかなと思っています。年代をつなぐ、地域をつなぐ、文科をつなぐ、何でもいいから「つなぐ」をキーワードにすれば、そこから色々な切り口ができるのかなと思っています。そういう意味では、三校の学校の先生方から本当に素晴らしい発表を頂きました。ありがとうございます。

5. グループディスカッションを踏まえた全体討論

(1) 趣旨説明と話題提供

金井 昌信（群馬大学大学院 准教授）

今回のグループディスカッションでは、二つのテーマについて、グループで議論して頂きます。一つ目は『児童生徒の心に響き、行動を変える授業とは？』で、二つ目が、『地域と連携した防災教育』です。前回、田辺市で開催させて頂いたときにも、二つのテーマで議論させて頂きました。一つは「防災教育の為にコミュニケーション力」、もう一つは『地域と連携した防災教育とその継続』でした。今回のグループディスカッションは、前回の議論を踏まえて、更に深掘して議論することを目的としています。前回参加されていない方もいらっしゃるのので、まずは前回の議論から一体どんな事が知見としてえられたのかを、私の方から話題提供させて頂きます。前回の議論から、効果的な防災教育を構成するポイントを3点に整理してみました。

一つ目は、『授業の内容・位置付けの転換』です。何でもかんでも教え込むのではなく、子どもたちの防災を通じた“学び”から、自分たちの問題、地域の問題であるという“気づき”を引き出すような授業、問いかけがまずは大事だということが指摘されていました。

次のポイントは、『家庭・地域と連携のそのあり方の見直し』です。子どもたちの“気づき”から具体的な“実践”につなげることです。ここでは、何でもいいから家庭や地域と一緒にやるのではなく、子どもたちへの教育効果を高めるという観点から、連携のあり方を考えることが重要だということが指摘されていました。

そして、最後のポイントは、『継続的な防災教育の実施体制の構築』です。“実践”した結果から、子どもたちに「さらに何かやりたい」「もっと知りたい」というやる気がでてきたときに、それを次の“学び”につなげる。さらにその新たな“学び”から新たな“気づき”を促し、そしてその新たな“気づき”から新たな“実践”を促す。このようなループを切れ目なく回していくために、それぞれの学校の実情に応じた防災教育カリキュラムを構築することが必要だということが指摘されていました。

このループと子どもたちに見られる教育効果との関係をまとめると図のようになります。

今までの防災教育は、座学として防災に関する知識を与えるような授業が多かったと思いますが、これだけだと「教えられる知識を得る」というだけの“受動的な学び”になる。そこで、命を意識させたり、子どもたちの心に葛藤が生じるような“心をゆさぶる発問”をすることで、座学を通じて知り得たことは、「自分たちに関係する問題なんだ」という“当事者感”“わがこと感”を高め、災害と対峙している自分に“リアリティ”を与える。そして、その問題の解決策を考えることを通じて、“命の大切さ”家族や友達、地域の人といった“他者を思いやる心”を育む。ここまでが一つ目の段階です。

対策を考えたら、そのあとは「じゃあ、みんなでやっぺいこうね」と単なる努力目標とせず、具体的な実践につなげていく。そして、実践につなげていくのは、学校だけで対応することに限界もあるので、そこで初めて“家庭や地域との連携”が具体化してくる。そして、地域の大人と一緒に具体的な活動を行うなかで、子どもたちは自分の考えを伝えたり、みんなで協力して物事を行うことなどを経験する。これらの経験を通じて、子どもたちに“コミュニケーション力”が身につく。さらに、子どもたちの実践をただやっただけにせず、地域に還元する、他者に伝える活動も行う。そして、子どもたちの行った活動に対して、家庭や地域の大人から評価してもらう。大人たちからポジティブな評価を得るこ

とで、子どもたちの“自己肯定感”や“自己有用感”が高まる。そして、「もっと自分たちにもできることがいろいろあるんじゃないか」と、地域に貢献したいという欲求が高まる。ここまでが二つ目の段階です。

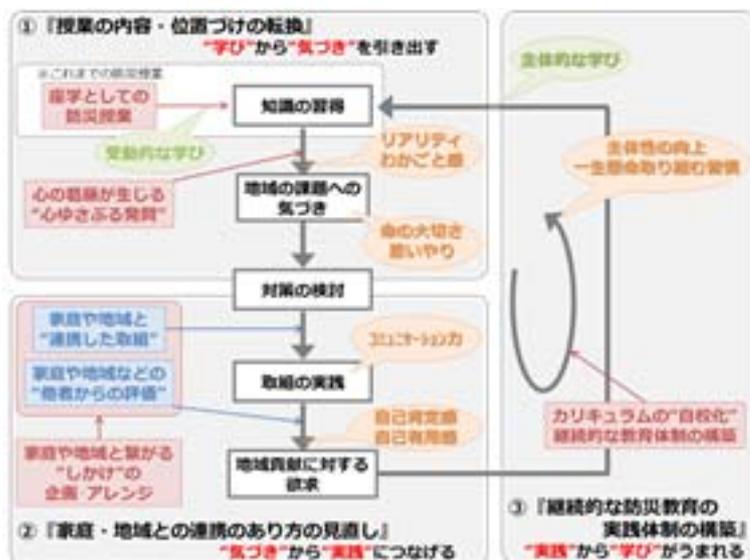
「もっと地域に貢献したい」、「でも何をしたらよいかわからない」となると、子どもたちは自ら主体的に知識を得ようとする。すなわち“主体的な学び”がうまれる。そして、新たな“知識”を得て、新たな“気づき”があり、新たな“実践”につながる。このループが継続的に回り続ける仕組み

を各学校に構築することが必要で、そして、このループを回していくことで、子どもたちの“主体性”は向上し、また“何事にも一生懸命取り組む習慣”が形成される。これが学力向上につながる要因の一つではないかと思います。これが三つ目の段階です。

先ほどの3つの事例発表をお聞きしていても、この3つのポイントは間違っていないのではないかなと思います。そして、このような観点に至ったときに、グループディスカッションの二つ目のテーマ『地域と連携した防災教育』とはどうあるべきなのか。これまでに先生方はいろいろな活動を実践されてきたと思います。例えば、「保護者と一緒にまち歩きをして、防災マップを作りました」とか、「保護者参観で防災マップの発表会やりました」とか。そういった活動のどこをどのように工夫すれば、より効果的な実践になったのか。防災に関わる場所以外の教育効果として、思いやりが高まったとか、コミュニケーション力高まったとか、一生懸命やる子になったとか、そういった教育効果が得られたという事例と比較することを通じて、具体的な内容を議論していただくのが、テーマの二つ目でございます。

もう一つのテーマは、先ほどのポイントの第一段階として、災害や命に対する“リアリティ”や“わがこと感”を高めるために、どういう発問、投げかけがありえるのか、という点です。座談会でも紹介されていましたが、すでに黒潮町では、「命の教育」ということで、命を題材にした授業の実践が始まっています。「命の授業案」という資料の二つ目と三つ目がその授業案です。そして、その資料の一つ目にある授業案は、和歌山県田辺市の小学校で実際に実践して頂いたものです、同様の授業を実践された先生が何人かいらっしゃるのですが、かなり難しいと聞いているんですが、こういう事例を参考にし、子どもたちの“わがこと感”や“リアリティ”を高めるためのポイントを具体的に考えていただきたい、というのが一つ目のテーマです。

しかし、“命の教育”といっても、なかなか実感湧かないし、イメージしづらいところもあるかと思いますが、そこで、この資料の一つ目の授業案を、田辺市立芳養小学校の太田先生が実践されたときのビデオがありますので、それをご覧になっていただきたいと思います。映像は45分の授業のうちの最後の10分間です。





太田 自分の命を守るために、次のような状況を想定をしてください。

「あなたの大切な人が避難できない」状況です。怪我をしているかもしれない。何かに挟まれているかもしれない。要するに、避難しようにも避難できない状況です。動けなくなっているのは、自分にとっても大切な人です。家族の誰かかもしれない、それは自分で決めてください。そして、「すぐに津波が来るかもしれない」状況です。

このような状況のとき、そばにいるあなたはどうしますか。「自分はこういう判断をした」というのを聞きたいと思います。

児童 A 僕は、家族とかを助けられなかったら、ひとりで高いところまで逃げきって、大切な家族が生き残ってくれることを祈ります。

太田 逃げるほうですね。逃げるんだけど、逃げ切ってから家族の無事を祈る。他に「逃げるよ」って人いますか。

児童 B 私は逃げる方を選びました。もしも助けられたとしても、すぐ津波が来ているから、どっちも助からない。

太田 どっちも助からないと。みんなの判断を見ると、「逃げる」って方が結構多いみたいです。だけどその中にも、「逃げない」っていう人もいます。ちょっと聞いてみたいと思います。

児童 C 僕は大切な人に、「逃げて」と言われたら逃げます。でも、何も言われない場合は一緒にそこにいます。理由は、その人を一人だけ死なせるのは本当にいやだからです。「逃げて」と言われた場合は、その人は死ぬかもしれないので、その人の言うとおりにします。

太田 大切な人を死なせるのはいやだ。一緒にいます。同じ意見の人がいたんで、聞いてみますね。

児童 D 大切な人だから、津波が来るまでに助けられないと思うけど、その場に一緒にいます。それは大切な人だから、自分だけ見放して逃げるのは駄目かなと思うからです。

太田 はい。代わりに言ってくれます。谷本さん。

児童 E 私は、自分だけ助かるのは、自分だけが助かるのは、あとでいやだからです。

児童 F 僕は、相手を謝ってからすぐ逃げます。理由は、相手は絶対助からないと知っているけど、最後に逃げることを謝っておきたいからです。

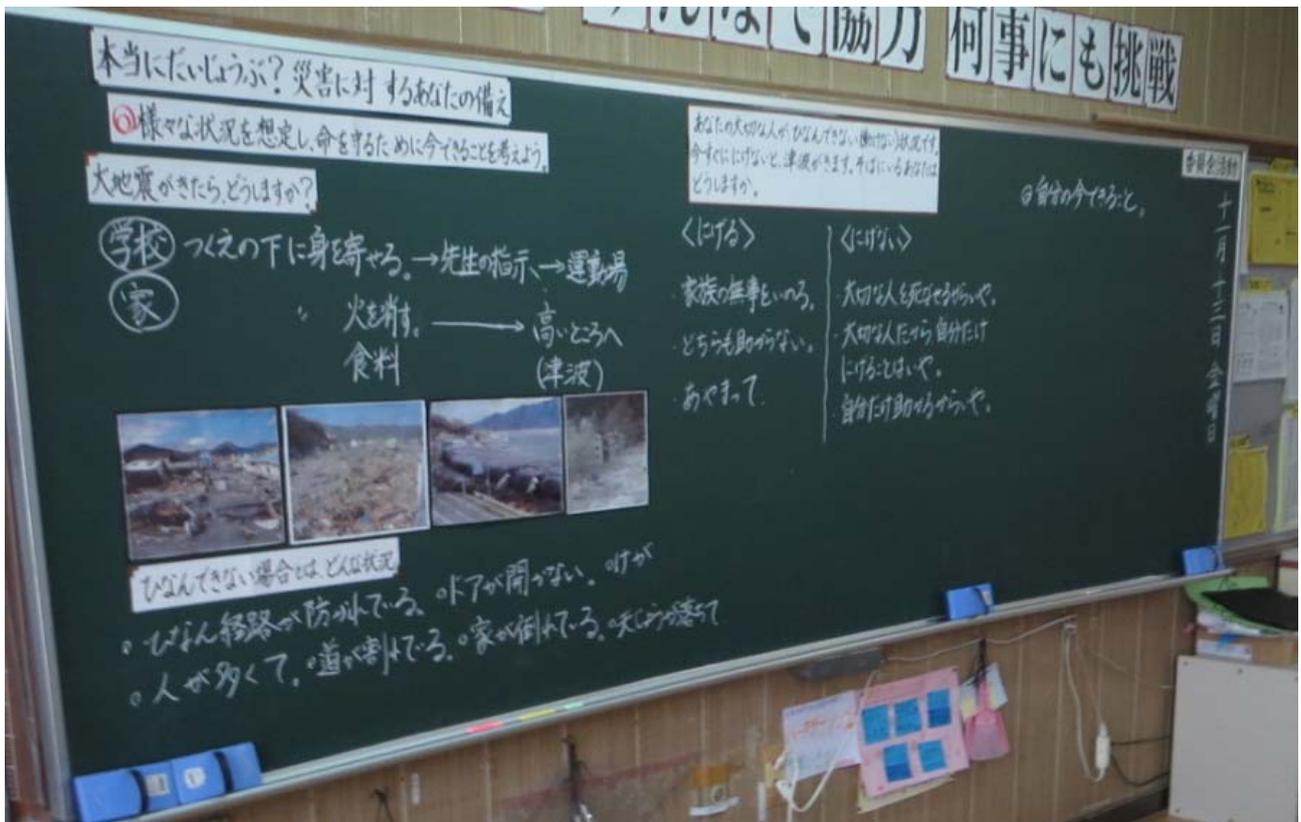
太田 皆さんが、命を失ってしまうかもしれない状況をしっかりと考えてくれたから、涙が出てきたんですね。ちょっと見てね。逃げる人も、「自分の命がやっぱり大切だから逃げる」っていうのもあるんだけど、家族の無事を祈ったり、どっちも助からないけど謝っておくって言うていたよね。要するにこの結果は、みんなにとって幸せですか。「自分の命が助かった」のだから、幸せだと思う人。幸せではないと思う人。幸せじゃないよね。

じゃあ、逃げない人はどうかな。「大切な人を置いて、自分だけは逃げられない」、先生もそうです。先生も子どもが同じような状況になったら、そのままにしてとても逃げられない。大事な人だから置いていけない。でも、こっちを選ぶと、一緒に命を落とすわけでしょ。「かわいそうだから、大切な人と一緒に流される」、これは幸せですか。幸せじゃないよね。

この状況になっちゃたら、両方とも幸せじゃないよね。だけど、幸せじゃないことだけ、今しっかりいやな事を考えられるのは、「生きているから」でしょ。今皆さんが生きているから、考えられるんですよ。こうなりたくないよね。

じゃあ、今皆が命を守るためにやっていること、避難訓練だったり、家で準備しているものだったり、そういうのは本当に今の状況で大丈夫ですか。

最後に、自分の今できることを書いてください。これまでの避難訓練を振り返ったり、お家で準備しているものを考えたりして、いろんな原因を探ったなかで、こういう目に遭わないために、今しなければならないこと、今だからできること、今だから考えられる自分の命を守るためにできることを書いてください。



授業の最後のまとめ部分を切り出して見ていただきました。授業の最後の問いかけは、「命を守るためにどんな備えが必要ですか」ということでした。ここだけ見ると、『命を守るための備えを考える授業』です。このようなねらいの授業は、これまで、多くの先生方も実践されたことがあると思います。でも、その途中で、一体どれほど「子どもたちにリアリティ」を持たせることができたのか、「自分に関係する大事な問題なんだという意識」を持たせることができたのか、それを持たせないと実行力は低いです。この授業は、大切な人の命を考えることを通じて、子どもたちの“リアリティ”や“わがこと感”を高めることをねらったわけです。そのため、このようなちょっと厳しい問いかけになってしまい、子どもたち、そして、実践された先生は大変だったと思うんですけど、この授業を参考に、「こういう問いかけはどんな効果があるのか」とか、またはその課題とか、同様の効果をねらった場合に他にどのような問いかけが考えられるのか、といったことを具体的に議論していただきたいと思います。

ということで、資料にある二つのテーマについてグループディスカッションをお願いします。

一つ目のテーマについては、「あそこまで子どもを追い込んでいいのか」という点についても議論があると思います。そういうことも含めて、通り一辺倒の「逃げましょうね」、「は〜い」という授業ではなくて、『防災』という課題を通じて、自分の命、家族の命に真剣に向き合えることを促すような授業、問いかけ、実践は、どんなのがあるのかを議論して頂きたいと思っています。

それから二つ目のテーマについては、午前中の座談会、午後の事例発表で紹介されていたように、『防災』を題材として家庭や地域と連携した実践的な学習を行うことによって、防災以外の面でも、子どもたちの様々な成長、効果がみられる。であるならば、そのような成長を効果的に引き出すためには、どのような実践、連携のあり方が求められるのか、という点について具体的な議論して頂きたいと思っています。

グループ分けについては、グループ1から4までが小学校グループ、グループ5から9までが中学校グループとなっています。このあと、グループディスカッションを踏まえて、全体で議論させて頂きたいと思っておりますので、それぞれのグループで議論した内容について発表してもらいますので、準備をお願いします。

(2) グループディスカッションを踏まえた全体討議





金井 全体討議を始めさせていただきます。まずは一つ目のテーマ、『児童生徒の心に響く、行動を変える授業』について議論されたグループからの発表をお願いします。

中村 三重県尾鷲市の中村です。グループ3では、心を揺さぶる仕掛けについて話をしました。先ほどのビデオの授業者である田辺市の太田先生がグループにいたので、あの授業についていろいろとお話させて貰っていました。

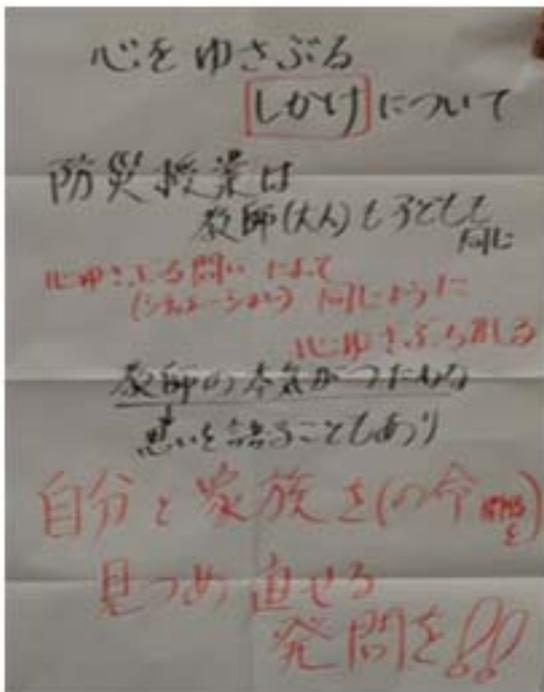
授業で、“わがこと感”を持たせるためには、「この発問自体が重たくなるのは仕方ない」という意見だとか、「あれくらい一生懸命考える、しかも自分の言葉でそれをしっかり伝えるのはいい」という意見がありました。逆に、「ああいう高め方じゃなくても高まるんじゃないか」、「この発問、厳しすぎるかな」という意見もありました。また太田先生から、先ほどの10分の映像の中で、「先生が、もしも子どもが挟まれている状況になったら、『自分も逃げられない』と子どもに言ってしまったことを反省しているとおっしゃっていました。これに対して、「子どもには『逃げなさい』と言うけど、先生自身もやっぱりそういう状況に置かれたら困ってしまうし、迷うし、放っては逃げられないという事実というか本音を言ったことは、子どもたちに、『先生も本気なんだ』、『本気でこのことに向き合っているんだ』というようにしっかりと伝わったんじゃないか」ということを話しました。「防災の授業は。他の教科と違って、『先生がいて、子どもがいる』という感じではなく、命に関しては教師も子どもも、大人も子どもも関係なく、横並び「皆経験がしたことのないなかで、想像するしかないなかで、『教師が上で、子どもが下』、は違う」という話をしました。「心を揺さぶる間によって、同じように教師側も心を揺さぶられるというのがいい」と意見もありました。先ほども言いましたが、“教師の本気度”を子どもは見ているので、「先生がどれだけ本気



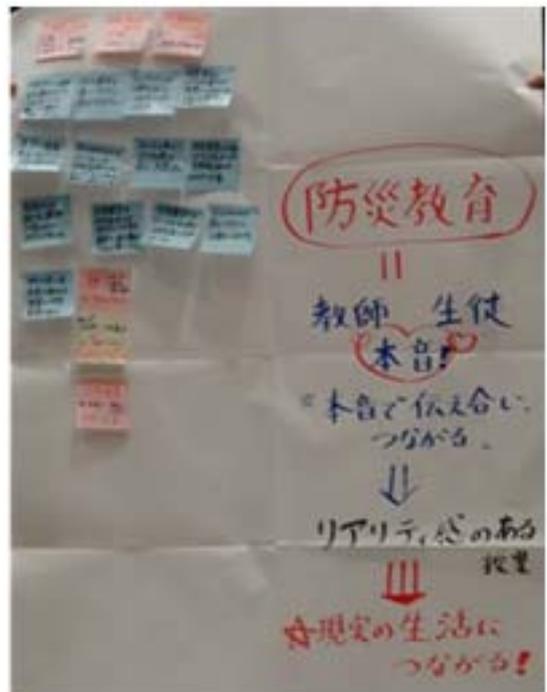
中村 佳栄先生

で、自分たちに命の大切さを伝えてくれているのか」を子どもは感じると思うので、『本気なんだ』という思いをとにかくぶつけていく」、「教師が。時には自分の思いを語ることも大事な」という話もありました。

『心を揺さぶる仕掛け』について、結論としては、「“自分と家族の命”とか、“自分と家族を見つめ直せる”ような発問がいいんじゃないか」ということになりました。「普段何気なく自分の周りにいる人たち、お母さんだったりお父さんだったりを、そこまで大事に思える」、「涙が出るほど大事なんだから見つめ直せる」、「保護者が自分のことを凄く大事に思ってくれていることに気付く」、そういう自分と家族を見つめ直せるような発問がいいね、そういう発問ができたらいいいよね、とい話でまとまりました。



グループ3



グループ7

西本 黒潮町立佐賀中学校の西本です。グループ7では、“リアリティ感のある授業をどう作るのか”ということについて話をしました。やはり、防災教育をしていて「教師が本音で語れる」、そして「子どもたちが本音の意見が言える」、そういった授業環境のなかで、本音を伝えあい、繋がるのが一番大事ではないかという話ができました。教師は防災教育の中では、自分の本当の気持ちをさらけ出して授業をしていく。

そして、授業中のつぶやきや感想の中から見えてくる子どもたち一人ひとりの気持ちを大切にしていける。それが“教師と子どもの繋がり”であり、それが“リアリティ感のある授業に繋がってくる”のではないかと。そして、この授業が日常生活、現実の生活に繋がっていくように、教師と生徒が一体となって防災教育を進めていく。そのように授業を進めていくことが大事ではないか、ということをお話ししました。



西本 貴俊先生

林 串本町立古座小学校の林です。グループ1は、いろんな意見が出ましたが、一つ目のテーマ『児童の心に響く』というところで、ビデオを見た感想や意見が一番多かったです。その中で、子どもに『すごい葛藤のある授業』でした。小学校の場合、一年生から六年生まで発達段階が全然違いますので、「低学年、中学年、高学年でも可能なのか」、「低学年で可能なんだろうか」という意見が出ました。

ビデオの授業は、『子どもたちに「逃げなきゃいけない」ことを教える授業』ではなかったんじゃないかと思います。あの授業で、子どもたちが心を揺さぶられる、心が揺れてどうしたらいいかわからないから、家に持って帰って家族で話し合う。授業の中で「逃げなきゃいけない」と答えが出て、それで終わりではなく、あとで家族と「あのようなきはどうしたらいいんだろうか」を話し合う。そうすることで、家族愛とか家族の絆を見つめ直すための授業だったんじゃないかと思います。この授業を行ったことで、そのあとに行う防災教育の中で、「じゃあ、あんなことにならないためには、こんなことをやっておかないといけない」という気持ちが、すごく生きてくるんじゃないかな、という話になりました。



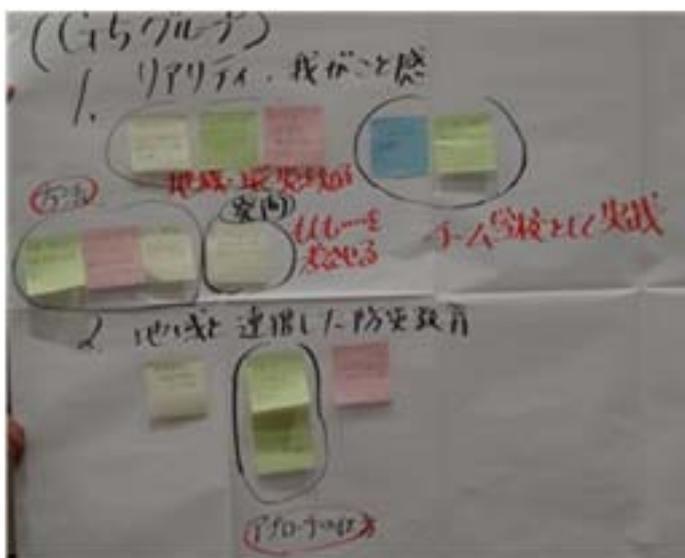
林 宣之先生

文野 黒潮町教育研究所の文野です。グループ5では、まずリアリティを学ばせるためには、地域の状況とか環境というのがすごく大事になってくるんじゃないか、という意見がでました。特に地域の被災経験者から話を聞いて、そのときの状況を児童生徒にわからせていくことは大事じゃないか。それから、地球温暖化などの環境問題と併せて、災害に目を向けていくことが大事ではないだろうか。という話が出ました。



文野 友喜 所長

発問については、もしもの状況で子どもたちに考えさせることで、心揺さぶる、葛藤させる、悩ませる、そういったところが大事じゃないだろうかという意見がでました。そういう発問は必要だという話になりました。それから“わがこと感”については、もちろん教師の意欲やる気は大事ですけど、教師一人ひとりでは防災教育はできない。やっぱりチーム学校として、とにかく全員が実践して、協働していくことが大事じゃないだろうか。という話になりました。



グループ5

池上 黒潮町立三浦小学校の池上です。グループ2では、ビデオで見せてもらった授業の話をさせてもらいました。他のグループでも言われていましたが、確かに両方の意見がある、という話ができました。けれど、「やっぱり命は教えたいね」ということでまとめ、そのためには、「工夫をしながら教えていかなきゃいけないな」という話をしました。



池上 巖先生

金井 各グループから一通り、一つ目のテーマについて、議論して頂いた内容を発表していただきました。片田先生、ここまでの発表を聞いて、コメントをお願いします。

片田 「両方の意見があるという点が、実は僕も一番引っかかっています。これまでも僕自身が、『命を見つける』ということを通じて、そのリアリティを実感し、子どもたちが実際に行動をとれるようになる」というシーンをたくさん見てきました。そういう面



片田 敏孝先生

では、「命に関わることのリアリティを与える」ということは、この心を“揺さぶる授業”の非常に大きなポイントになっていることは間違いないですね。

ただ、話題そのものが、あまりにも厳しい。釜石の子どもが本当に一生懸命逃げようと思った理由は、「僕が逃げれば、お母さんが逃げてくれる」という思いなんですよね。その教え方が良いのか悪いのかはともかく、アウトカムとしての行動結果は良かったんですね。しかし、「だから、いいんだ」という話にはならないような気がするんです。このあたりが僕にとっても一番悩ましいところですね。ある程度の学年になって、災害による死というものをいろいろと見聞きするなかで、「人には寿命が尽きるというときがあるんだ」ということを、子どもたちが心の中で消化できるようになった年齢ならばいいんだけど、そうじゃない学年の小さな子どもにはきびしいのかなと。今でも正直、「あの教育は良かったんだろうか」と思うようなシーンがたくさんあります。

小学校低学年の子どもたちに、「先生はみんな逃げると思うよ」、「でもみんな皆が逃げた後に、みんなのお母さんどうするだろうか」と問いかけたときの子どもの不安げな顔。「お母さんが迎えに来ちゃう」と言ったあの子どもたちの顔を思い出すと、厳しかったかなと正直思います。あの子たちの心の傷になってなきやいいけど、と思うことも正直あります。

その点が一番気になっているところではあるんですけども、“心を揺さぶる”ということにおいて、やはり“命をダイレクトに扱う”ことほど効果的なことはないと思います。子どもたちは、「お母さんが迎えに来る」と思っている。しかし、「その結果、お母さんがどうなってしまふのか」というところに思いが及んだときに、初めて「自分の命を投げうってまで迎えに来てくれる親」のありがたさを意識する。これは、日々日常の生活の中で言わずもがなで理解していることなんですね。当たり前のように、敢えて再定義するまでもなく、別にありがたいと思わずとも、「お母さんはそんなもの」と思っている。

ところが、災害はそれをも全部破壊しつくす。「それがなくなる」という現実を認識させる

ために、「津波のとき、お母さんが迎えに来る」、そして「お母さんの命が危ない」というところまで、こちらが子どもたちの思いを導いていくことで、そこで初めてリアリティが出てくる。「自分の命がまずい」、「自分の命だけではなく親も命もまずい」というところまで思いが及んだから、「僕は逃げよう」と子どもたちの内発的な避難意欲がでてくる。でもそれは、自分ではなく他者の命を見ているから、自分の命や行動を改定することができるんですよね。

災害心理学をやっていると、災害に向かい合う心の特性には二つの大きな特性があります。その一つが『正常性バイアス』です。自分の命がなくなるということを前提に、人は物を考えないという特性ですね。「あなたの命が危ない」、「逃げなきゃ死んじゃうぞ」とどれだけ言われても、『津波で亡くなっていく自分の姿』をリアリティを持って想像できる人なんていない。だけど、これを他者に話を転じると、客観的に見られるようになるんですね。いくつか事例をだしますね、「今この瞬間で震度7の地震があったとする」、「一分後、十分後、一時間後、自分はそれぞれ何しているか」を考えてみてください。おそらく多くの方は、「一分後は机の下に頭突っ込んでいる」、「十分後は建物の外に出て身の安全を確保している」、「一時間後は瓦礫の下から人を救い出している」と答える。そこで誰も言わないのが、「自分は瓦礫の下で死んでいる」ということです。要するに「自分は命あるもの」として常に人間は物事を考えていくわけですね。そうすると“自分の死”というものを前提に議論を吹きかけられても、自分の命の問題は、横っちょに置いちゃうんです。

そうは言っても、実は頭の中ではわかっている。それが二つ目の話です。頭の中でそういう状況はあり得る。「逃げなきゃ命がなくなっちゃうよ」と言われれば、知識としては、それがわかる。その一方で、「行動を取らない自分」がいる。こういう状態を認知的不協和といいます。「わかっていること」と“やっていること”が乖離している状態は心理的に気持ち悪いです。そこで、人はこの状態を解消するために、いろいろと理由をつけて整合化するんです。このとき、だいたいの方は“逃げていない自分”を正当化します。「だって今までそんなこと起こったことない」、「前に来ても大丈夫だった」、「津波警報なんかでたって津波がきたためしないじゃないか」というように理由は何でもいいんです。「周りのみんなも逃げてない」でもいい。何でもいいから正当化する理由は探す簡単に見つかる。このようにして、逃げない状態ができあがっているのです。

こういう特性があるなかで、「逃げなきゃ死んじゃう」と『自分の命の問題』をダイレクトに指摘し、「だから逃げなきゃならないんだ」と言っても絶対駄目ですね。絶対駄目です。またそれは人間らしい心の特性でもあるんです。だから、『自分の命の問題』からちよつとずらして、『母親の命の問題』として考えさせる。子どもたちにとって一番大事なものを事例に出して、それが最大級の地震でどうなっちゃうのかを考えさせる。これがリアリティに繋がっている。お母さんだけでなく、他の人を対象とした事例もあります。それは、「ご近所のおじいちゃん、おばあちゃん」です。それだったら、子どもたちは客観視できるんですね。ビデオを見て、「ものすごい津波が迫ってきている」、「あの杖ついたじいちゃん、逃げられるか」と言った段階で、彼らがすごく冷静に客観的に考えることができます。他にも「あの保育園の子どもたち、あんなにいっぱいいるのに保育士さん三人しかいない、あれは無理だな」と言う。あの子たちをどう守ってやるかというところから考え始めて、行動するうちに、それが『自分の命の問題』として捉えられるようになり、正常性バイアスを払拭することにも繋がっていく。

ダイレクトに正常性バイアスを払拭させようと思っても駄目なんですね。これは教育のテクニックとして覚えておいて頂きたいですね。どれだけ、君の命が危ないんだってことをどれだけ言っても駄目です。頭でとりあえずはわかります。でも人間ってのは、わからないもんだということを前提に、教育の現場ではあたって頂きたいです。だからこそ、横に“ずらす”んです。お母さんとか近所のじいちゃん、ばあちゃんとか、小さな子どもたちとか、そういう形で、“ずらす”ということを考えて頂きたいと思いますね。

先ほど太田先生の授業もそうですが、それぞれの現場で“心を揺さぶる”というところをバラエティに富ますことはできると思うんです。でも、やはり『言わずもがなで受けている愛情の存在』ということに気付かせること。そして『災害は、それをも破壊するもの』だということのをわからせることが、心を揺さぶることに直結しやすい話題ではないかなと思います。とにかく直接的に「君の命がまずいんだ」とか、「この地域は危ないんだ」とか、当事者として命の議論をしても駄目なんだということを、皆様の頭に留めておいて頂くと、今後の授業なんかの計画に少し参考になるかもしれません。

金井 各グループで一つ目のテーマで議論して頂いた内容を情報共有させて頂き、それを踏まえて片田先生からコメントを頂きました。黒潮町でも、今年二回の研究授業を同じようにやらせて頂きました。『命の教育』の授業実践を先生方が見て、その内容について議論しています。また、ビデオを見て頂いた田辺市でも同じように研究授業を通じて、『命の教育』には「どのような投げかけがあって、どういう授業がいいんだろう」ということを議論しています。一つ目のテーマについては、やっと議論がまともに行えるような地域がだんだん出てきた、という状態だと私は思っています。今日の議論を持ち帰って頂いて、ご自身でやってみたりとか学校で実践してみたりして頂いて、そこで得られた知見などは、各地域、各学校、各教員だけで持っていないで、ぜひ情報発信して頂きたいと思います。それを踏まえて、また継続的に議論していただきたいと思います。

二つ目のテーマ『地域と連携した防災教育』について、同様に各グループで議論した内容の発表をお願いします。

山本 和歌山県田辺市立大塔中学校の山本です。グループ8では、まず先ほどの太田先生の授業についてのお話をしました。「他にも違ったリアリティの伝え方があるんじゃないか；という話になって、やはり、例えば「今こう会議をしているときに地震が起こったらどうするは」ってことを考えることがリアリティじゃないか。また、「避難する途中に通る家の中に、いったい高齢者が何人いるのか、小さな子どもが何人いるのか」、そういうことがわかることで、よりリアリティを高めることになるんじゃないか。「避難経路に人が倒れていた場合、その人を運ぶと避難完了に何分かかかるか」とか、そういうこともあり得るのではないかとというように、ちょっと視点を変えた話し合いをしました。



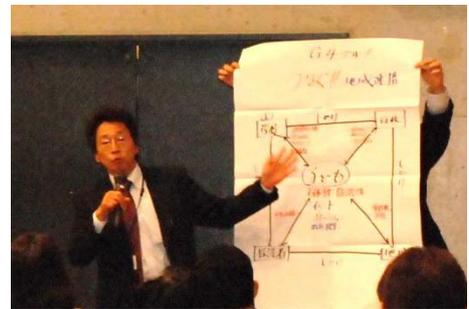
山本 博章先生

防災教育は、命が関わってきて、どうしても重たくなってしまっているので、子どもたちまた職員も、ちょっと辛くなってくるんじゃないかという話ができました。そこで、より前向きな発想を

生むような取り組みに変えていったらどうかということができました。生徒主体でいろんな地域に向かって情報を発信したり、案を出したりする。「避難経路のどこで壁が崩れてくるかもわからない」とか、そういったことも子どもの方から出てくる。その後「どうしていけばいいか」ということも、生徒主体で引き出していくという形に持っていく方が、教師側も長続きできる。そして、先輩たちが頑張っている姿を見て後輩たちが憧れて、「自分たちも先輩たちに続け」と良き伝統としていって、少しずつ改善していくという流れを作っていってはどうかという話になりました。

山本 黒潮町立拳ノ川小学校の山本です。グループ4では、『家庭と地域の連携』というキーワードは、やっぱり児童生徒を中心にして、如何に学校や行政、地域、保護者に仕掛けてくるかと。その仕掛けはやっぱり学校が、子どもたちに対して色んな働きかけをしながら実践していく。今日の討論を聞いていると、その効果があったんだろうと。だから、まだまだこの部分の伸びしろいっぱいあります。子どもたちに、如何にして、その地域の独自性とか、学校と地域、学校の独自性を生かした働きかけの手法を伝えていくか。それによって学校も地域も変わっていくし、何よりも子どもたちの主体性やコミュニケーションの能力だとか、いろんなものを高めていくことができるというのを再確認でできたのではないかなと思います。

最後に、「やっぱり黒潮町、すごいな」と思ったのは、町内10の小中学校が同じ方向を向いてやっているところは、全国に発信できる素晴らしいことだなと改めて思いました。「本当に良かった」という声がグループ討議の中ででてきました。



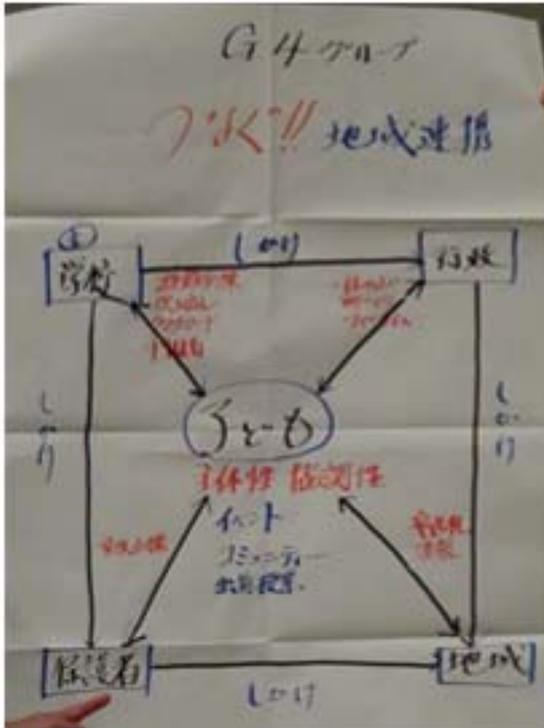
山本 明彦先生

宮川 黒潮町立大方中学校の宮川です。グループ9では、「リアリティ」などについて話すことに始まったんですけど、体験とか実感とかいう話になっていきまして、最後は、「つなぐ」という話になりました。そのなかで、防災授業の実践を促すために、『どこが中心になっているか』が各地区で違いました。黒潮町は、防災教育の作業部会として担当者会もありますが。先ほどの発表にもありましたが、一方で黒潮町は行政というか黒潮町全体が同じ方向を向いてやっています。これは珍しくて、学校が中心にやっているとか、学社融合とかいうところもありました。学校が中心になってみんなを動かすのは、なかなか大変だということも出ていました。



宮川 昭二先生

また、「つながる」ということでは、子どもたちが地域を知り、それを子どもたちが情報発信して、地域がそれを知る。地域に知ってもらうことで子どもたちに達成感がでてくる。このように、「学校や子どもたちを地域に知ってもらうこともいいんじゃないか」という話がでていました。『子どもたちが地域に自信を持つ』ためには、地域と“つながる”防災教育が必要だという意見が出ていました。



グループ 4



グループ 9

筒井 黒潮町立大方中学校の筒井です。グループ6では、出し合い話みたいになりましたので、出たアイデアを紹介したいと思います。

まず話のなかで、「避難訓練がマンネリ化してきて、リアリティがなくなっていく」というところがありました。佐賀中学校は地域の人も巻き込んで避難訓練をしていますけど、「坂道を登るのにおじいさん、おばあさんは、「もうここまででいいや」と諦めがちなところがある」という意見があるそうです。そこから発展して、何かイベントを作ったり、楽しいことを作ったりして、まずは学校にきてもらえるようにする。そして、学校に来てみたら、「実は避難訓練でした」というようなことができれば、もっと楽しんで前向きに取り組めるんじゃないかという話をしました。

出てきた意見の中でとても面白かったのは、海上保安庁にへりを呼んでもらうことでした。先方の訓練も兼ねることで、全部手配してきてくれた事例もあったそうです。これを警察に相談すると、書類やら何やらがすごく大変みたいで、直接海上保安庁に連絡すると上手くいったというお話もありました。

また総合的な学習の時間も選択制にすると、子どもたちの中から自主的に取り組みが生まれるのではないかという話もありました。地域の方が、避難したことがわかるような絵札を作って地域に配ったり、過去の経験者に話を聞いて DVDに残すとか、そういう取り組みもしている学校があるということをお聞きしました。



筒井 祥子先生

金井 『地域とのつながり』について発表していただきましたが、私は最後のグループ6で発表していただいたことが現状の全てなのかなと思いました。先生方、みなさんいろいろ実践されているんですね。例えば避難訓練であれば、地域の人と一緒にやるのもそうだし、海上保安庁なり消防を呼んで一緒にやる、また校区の避難馬場所を確認するために地図作ったりとか。まだまだいろいろとやっていると思うんです。これからは、そのやっていることに一工夫していきましょう、その際には子どもたちの成長を中心に考えて、家庭や地域などとの連携方法を考えてみましょうということなんだと思います。やる内容が決まっている学校行事などとしてやるんじゃないくて、子どもたちの自発的なアイデアから実践につながるように仕掛けてあげるとか、実践する場を作ってあげるとか、子どもたちが実践したことを地域の人たちに発表したりとか、今までやってきたことに何かプラスアルファ、もう一工夫というか、もう一努力していただくことで、子どもたちの次の主体的な行動に結び付くものと実感しております。

片田 『地域とつながる』ことの大事さは、もう散々冒頭から議論があったと思うんですね。やはり、「どう前向きに防災教育をやっていくのか」、そして「その前向きな仕掛けをどのように入れ込んでいくのか」というところが非常に大きなポイントになると思うんですね。小木中学校の例もそうですが、防災教育に悲壮感がないことはすごく大事で、もちろん話題は命なんですけども、子どもたちが保育園の子ども達に一生懸命こう避難訓練させていたりする。どれだけいきがっている中学生でも、保育園の子どもが「お兄ちゃん」と言ってなついてくれば、いきがるわけにもいかないわけですね。その子を「守ってやりたい」という気持ちが、子どもたちの中にできるわけですね。それが子どもたちのやりがいになり、その結果、保育士さんに感謝され、そして小さな子どもたちのお母さんにも心強いと思ってもらえる。このような経験を通じて、自己肯定感を高め、やる気満々になって「さあ次何やろうか」となる。小木中学校が上手く続いていったのは、そのループが上手く繋がっていつているからです。そういう良いループに入って、はじめて防災教育は継続性ができると思うし、やる方も辛くないですよ。楽しんでできるようになると思うんですね。

僕は防災教育が、よく言うように、“脅しの防災教育”であってはならないと思っているんですね。もちろんリアリティを与えるために必要なことなんですけども、でもそれだけでは絶対によくないんですね。やっぱり『地域に誇りを持つ』ことが一番大事ですよ。『大好きなこの町に住み続けるためのお作法』と僕は言っています。「海に近づいて、こんなに綺麗な海があって、こんなに美味しいお魚がいっぱいある」、「でも海に近づいているんだから、ときには荒ぶることもある」という自然の正しい理解ですよ、「そんなこともある、でも大丈夫だ」、「その日そのときに、パチッと逃げられる自分であるればいいんだ」と理解する。「大きな津波がこのまちに襲ってくるんだ」「逃げなきゃ死んじゃうぞ」と教えて避難訓練をするもの一つの方法です。でも、お作法として避難訓練やるのも同じ避難訓練なんですよ。避難訓練一つとっても、アプローチによってどれだけでも明るく持っていけますよね。

さらに、重い話でも子どもたちが、誰かから褒められるような仕掛け、子どもたちが肯定されるような仕掛けというものを作っていく。子どもたちがやったことを地域の方に褒めてもらう。それを受けて、子どもたちはさらに次に何を考えるのかを考える。みんなに喜んでもらうためには何をしたらよいかを考えるわけですから、前向きに物事に取り組みますよね。このように考えると、『地域との連携』は、子どもたちを褒めてもらうためにでもいいと思うんです。

子どもたちが次の一步を踏み出す推進力を得るために連携する。大阪の報告でもありましたけど、子どもたちが行けば「みんな OK」だと。どこでもそうですよね。子どもたちの発案、子どもたちがやることに對して否定的な話なんか出てきたりはしませんよ、子どもたちを褒めてもらって、次の一步を踏み出すための推進力を得るために地域と連携していくというのも、重要なポイントなんだろうなというふうに改めて思いました。

『地域との連携』は、いろんなパターンがありましたよね。黒潮町はやっぱ凄いんですよ。町全体をあげて、全部の学校が同じ方向を向いて、同じように動けるなんていう町はそうないんです。どこの町も学校によって温度差がある。そのときの管理職の姿勢や、一人二人の担当の先生のやる気、そういったものに左右されて、学校間でかなりのバラつきがあると思います。でも黒潮町は違う。何と言っても、日本一の津波想定がある。この御旗のもとに、みんなで頑張っていく。だから「一番で良かったじゃないか」という話になるんですけども、黒潮町はある意味特別な例なんだろうと思います。

ただ、『地域との連携』のパターンとして、「どう教育委員会が絡むのか」、「どう役所の防災が絡むのか」というところは非常に重要なポイントになります。小木中学校のように、「頼る相手がないので、自分でやるより仕方なかった」という例もありますが、これもご特別な例でしょう。一般には、市町の防災部署と教育委員会が一緒になって、そしてそこにやる気のある先生方も一緒になり、全体が前を向いてやっていくという方向に引き上げていくことが、非常に重要なんだろうと思います。地域によって、「教育委員会が各学校を取りまとめ、そして共有しながら、次から次へとリードしていく」という地域もあれば、「各学校がやっていることをただ報告させてとりまとめる」だけという地域もあり、様々です。しかし、教育委員会の力だとか、町の防災の姿勢だとか、もっと言うならば組長の姿勢だとか、こういったものが、『地域の連携のあり様』決定的に影響を及ぼすことは、明らかなことだろうと思います。

また、より多くの連携があればあるだけ、推進力ができるという事も事実だろうと思います。今日ここにお集りの方々はほとんど学校の先生方です。先生方だけでどうにもならない部分は確かにありますけども、どのようにして地域の仕組みとして動いていけるように連携を深めていくのかも重要なポイントかなとは改めて思いました。黒潮町は特別な例ですが、理想形の一つだと思います。「この町から犠牲者を出さない」という思いのなかで、皆が前を向いていけるような地域であるといいなと思います。そうすると、多少人事異動があっても、何とかかなというような感じも致します。

人事異動の話もあって、『自校化』が冒頭の話題になりました。防災教育の取り組みは先生に依存するべきものではないと本当は思います。その学校に根付いていくという形をどう作るのかというのは、大きなポイントとしてあるように思います。まだまだ先生方、個人個人に委ねる部分が非常に多いというのが現実なんですけども、この動きが定着し、そして各学校で防災教育が、『自校化』できるような取り組みにしていくことが必要です。個人プレーで動いている間は、継続性は低いと思わざるをえないと思います。もちろん、そういう先生方の個人個人の頑張りの広がりがあるが、『自校化』つながることになりますので、今まで通り頑張っていたいただくことはもちろん大事です。防災教育を学校、地域にどのように根付かせていくのか、そのための連携内容は考えていくことも大事ななと感じました。

金井 二つのテーマについてグループディスカッションで議論して頂きました。

ここで議論している内容は、他に地域や集まりに行くと全然かみ合わないことが結構多いと私は感じています。二つ目のテーマとして議論して頂いたような、「地域を巻き込んで子どもたちの主体性を高めたりとか、思いやりを高めたりするような授業を実践しましょう」という話は、ここでなら共通理解が得られて、議論することができます、昨年今年と、全国の小中学校を対象に防災教育の実施状況を把握するアンケートを2回実施させていただきましたが、その中に教育効果を図る項目として、「いじめがなくなった」とか、「学力上がった」という項目を把握してみました。すると、それらに項目に全く当てはまらないと回答して頂くだけでなく、「何で防災教育をやって学力上がるかが全く理解できない」というコメントが付け加えられたりしていました。確かに防災教育を「防災について教えること」として捉え、学力向上を「学力テストの点数が上がること」と捉えると、これらを直接結びつけるのは難しいとは思いますが。でも今日、改めて実感しましたよね、防災を通じて主体的な姿勢が高まって、何でも一生懸命やるという姿勢が身につくにつれて、それが日々の生活態度の改善につながり、その結果として学力も向上した。そのメカニズムが理解できたような気がするんですね。またこの理解が当たり前だと言える社会にはないかもしれません。せつかく志を同じにして、思いを同じにできるメンバーが集まって頂いたので、今日でこれでおしまいじゃなくて、この後もそれぞれで情報交換して頂いて、“つながり”を持って頂ければよろしいかと思います。

以上

黒潮町視察（その3） 平成27年12月28日（月）10:00～11:30

黒潮町情報防災課、黒潮町教育委員会のみなさんに、黒潮町内を案内していただきました。佐賀小学校、佐賀中学校の裏山に作られた津波避難場所を視察しました。



6. 全体討論



金井 最後のプログラムになりますが、全体討論として、今回この会に参加して頂いた先生方からお話を伺わせて頂きたいと思います。まずは、

昨年冬の釜石市、今年夏の田辺市、そして今回の黒潮町とこれまで三回開催させて頂きました。最初の釜石市では、顔合わせの会として、集まって頂いたみなさんがそれぞれでこんなことやっているのかをについて情報交換をさせて頂きました。そして、今年夏の田辺市では、多くの現場の先生方が抱えておられるであろう課題として、「防災教育をどのように進めていくのか」、「効果的な防災教育のために、子どもたちとどのようなコミュニケーションをとればよいのか」という点と、「家庭・地域を連携した防災教育をどのようにすすめていけばよいのか」という点について、二つのパネルディスカッションとグループディスカッションを通じて具体的に議論させて頂きました。そして、それを踏まえて、今回はさらに具体的に「地域、子どもを育む環境をどう作っていくか」という観点で、昨日、座談会とグループディスカッションを通じて、議論させて頂きました。

最後に、今回参加して頂いて、思ったことや、「こんなところがためになった」といった感想等をご発言して頂いて、情報交換したいと思います。

嶺口 田辺市教育委員会の嶺口です。率直な感想です。「学校と行政とが一体となって取り組んでいる」、「町をあげて一本化している」というのを見て、本当にこの町は素晴らしいなと思いました。昨日の町長さんの「子どもが地域を守る」という言葉にそれは象徴されているかと思います。そして、昨日はあれだけの方々が集まってきて、本気の意見をだされていました。やっぱり防災教育は、如何に本気なのか。やっぱり教師が本気になれば子どもは変わらない。それが根本的なところだと思います。そういった面で、田辺市から一緒にこの会に参加してきている先生方と、昨日も一昨日も2時過ぎまで集まっていろいろと話をしたんですけども、毎回この会に参加させてもらって、「すごく力をもらおう」、「元気をもらおう」、「やる気をもらおう」といった感じだな、と思います。

五十嵐 三条市立第一中学校の五十嵐です。2回目の田辺市に行かせて頂いたときは、新庄中学校の実践を見させてもらってすごく刺激を受けました。「こういう実践ができるんだな」、「こういうプログラムで学校運営ができるんだな」ということを改めて目の当たりに見させて頂いて、勉強になりました。今回の黒潮の場合は、今お話にあったように、町長さんをはじめ、行政と学校とが一体化して防災教育を進められているという点でまた勉強になりました。

昨日、能登の中学校で「防災教育と学力とが相関関係にあるのではないか」という話がありました。うちの学校も3年前から防災教育に取り組んでいるんですけど、それまで学力がなかなか上がらずに困っていたところ、ちょうど3年前から徐々に学力が上がりはじめました。学力テストの結果を見ると、1年でだいたい1.5ポイントずつ上がっているんですね。3年前は学力偏差値が48くらいだったんですけど、今は53くらいに上がってきています。それと、私は社会科を担当しているので、子どもたちが夏休みの課題で、人権作文や税の作文を書いたものを一通り目を通すのですが、なんか最近ちょっと視点が違うなあと感じています。それまでは自分のこと、自分の視点で見ていたものが、この防災を始めるようになって、子どもたちがいろんな視点で物事を見るようになったと思っています。それが原因なのか、新潟県内のトップレベルの賞を続々と受賞するようになりました。小木中学校の話聞いて、ちょっと検証してみる価値があるかなと、どういう関係があるのかを調べてみたいなと思いました。そういった意味で防災教育の拡張性というか、今後の取り組みをやるうえでは、少し振り返ってみる必要があるような気がしました。

松本 新宮市立緑丘中学校の松本です。五十嵐先生と同じように、私のところも学力がアップしていればいいんですけど、防災教育をはじめてまだ2年くらいなので、まだこれからといった状態です。しかし、「主体的に学ぶ」というところでは明らかに変わってきているなど感じることもあります。「子どもたちが自ら学ぶ」ということは、防災教育に取り組む中で、可能なものやっつけていこうという教育意識などを含めて、絡めることができるかなと思います。

話を戻してしまいましたが、黒潮町に来させて頂きまして、行政との一体化ということが非常に興味深かったです。また、参加されている先生方の意識の高さを感じました。これまでは「どうやって継続させていこうか」、「どうやって一般化していこうか」と考えていました。今回の会議に参加して、「子どもたちが自ら学ぶ」、「教員が自らやり通す」、「学校全体が意識を持って行政とやってやる」、そして「地域へ広げていく」というようにいろいろなステップがあると思うんですけど、今後、具体的に考えて頑張っていきたいなと思いました。

金井 今、お話し頂いた3人の先生は、一回目から毎回参加して頂いております。多くの先生が、3人の先生と同じように、「黒潮町の町をあげて一生懸命やっている姿勢は凄いな」と感じて頂いたかと思います。今回、黒潮町の先生方にも沢山参加して頂きました。今回初めて参加していただいた先生からもお話をさせて頂きたいと思います。

山本 黒潮町立拳ノ川小学校の山本です。今話にあったように、黒潮町の独自の取り組みは、町行政とそれぞれの学校玄関が一体となっている。昨日の町長の話の中にもあったように、その思想って言いますか、目指すものがはっきりしてぶれないというところが、黒潮町の一番の強みだと思っています。かねてから片田先生が指摘されていて、小木中の実践の中にもあったように、やがては子どもたちの学力向上とか、生き抜く力まで育てていこうと思っております。「きっとそうなるんじゃないか」と思いながら、自分たちもそれぞれの学校現場で実践をしていました。

が、今回の会議に参加をして、他校や他県の話聞くなかで、それは間違いないなと思っていました。

防災教育が、今までの教育内容と大きく違うのは、「自分たちの命」、「生きる」ということとダイレクトに関わってくる点だと思います。だから、子どもも、家庭も、地域も、それから自分たち教職員も一生懸命になり得ることができると。こういうのは今までになかった教育内容だと思っています。ただ、学校現場では、教育課程の編成と防災教育をどう関連付けていくかなど、まだまだ越えていかなければならないハードルはあります。

今のところ自分の学校の中での位置付けは、総合的な学習とか学級活動の時間を活用して進めています。これからは道徳科と同じように、防災教育科という大きな教科のような中身になればと願っております。まだ教育課程の編成の中ではなかなか難しいですが、少なくとも黒潮町は10年後につながる、小学校1年生から中学校の3年生までの9年間を見通したプログラムを確立しています。だから、10年後の子どもたちの姿を描きながら、進んでいると思います。まだまだ“伸びしろ”はたくさんあるので、自分たちの実践もそれぞれ工夫ができる場所だと感じています。



金井 黒山本先生からお話があった通り、黒潮町は、町をあげてぶれないでやってきているというのが強みです。しかし、多くの地域はまだそうはなっていないくて、先生方が孤軍奮闘されているところもあると思います。これまで長く実践されてきた津田中学校から佐藤先生、小西先生に今回初めて参加していただきました。他の地域の事例を聞いて、何かお感じになったことがあれば伺いたいです。

佐藤 徳島市立津田中学校の佐藤です。今回初めて参加させて頂いて、すごく勉強になるというか、良かったなという面がたくさんありました。というのは、防災教育に関しては県の方から「防災プログラムを全学年作りなさい」といった指導があって、それで熱心にやっているという感じがしています。県でもいろんなことをやっているのですが、来ている方は管理職の人ばかりで、マニュアル作って終わりとか、そういう会もたくさんあります。しかし、今日の会のような“横のつながり”といいますか、こうやって皆でぎっくばらんに語り合っている会が余りないんですね。ですから、今回参加させて頂いて、“横のつながり”がすごく大事なんだなと非常に感じました。いろんな実践されているお話を聞いて、それを次に生かせるというのは凄くありがたいことですし、嬉しいことですし、本当に今回参加させて頂いて、「こういう人たちっているんだな」ということを率直に感じました。本当に良かったなと思っています。

今回、「防災教育における授業」について議論がありました。これから津田中学校でもやっていかなければと思いました。これまで津田中学校は、「防災教育を授業で実践」という形とは違ったやり方をしています。防災教育は、いろんな実践があつていいと思うんです。「津田中学校は、全体ではどうされているんですか」とよく聞かれます。「一部の子はすごいけれども、全体はどうなんですか」という聞かれ方をよくします。津田のやり方は、100人いたら80人は0.5歩ずつ進んでいきます。全体を一步二歩と進めるやり方ではなく、本当にじわじわなんですけど進んでいるんです。その代り、他の20人が40歩くらいズドンと突き抜けて進みます。その子どもたちが80人の中から一人、二人、三人と取り込んでいって全体を底上げするんです。ですから、子どもたちが主体的に防災教育をやりだすわけです。OB会ができたりもするんです。今回も2年生は出前授業に行きましたけど、担任の先生は何もしません。防災講座の子どもたちが4つのクラスに行って、「こういうことするんですよ」、「こういうふうにするんですよ」と説明して、出前授業に行きました。中には金髪やら茶髪も何人かいるんですけど、その子たちも一緒に保育所とか幼稚園に行きまして、〇×ゲームをやったりして、楽しく過ごして、帰ってきました。そして、感想を見ると「おもしろかった」と。その子たちの中でも、小さい子に教えることを通じて、「僕らも勉強になった」と書いてありました。

今後はも、そういう実践を続けていながら、今回いろいろと勉強させてもらった授業なども取り入れながら、防災教育をこれからやっていかなければならないなと思いました。

小西 津田中学校に長い間いた小西です。最初に開放座談会中で、黒潮町の教育委員会の教育次長さんが「子どもは命を懸けて故郷を守っていくんだ」という話をされたと思うんです。あの言葉が、まさに津田中学校の先ほど佐藤先生がお話した20人の姿なんです。13歳、14歳から「如何に津田を守っていくか」という地域貢献を、その一点にかけてやっていく子どもたちが、毎年20、30人というわけです。それが毎年つながっていきますので、もうすでに一番上の子は23歳になりましたけども、そこからずっとその下がつながっている。その子どもたちが故郷を守っている、という良いつながりができます。ですから、その話がとても自分たちにとっては、「ぴったりきたな」、「しっくりきたな」と感じました。

金井 佐藤先生から、「横の繋がり」というお話を頂きました。今回、徳島市の津田中学校さん、高知市の城西中学校さん、それから大阪の鶴見橋中学校さんに事例発表していただきました。今回参加していただく前に、3校とも大変素晴らしい実践をされていると伺っていたので、この会への参加のお願いをするために3校を訪問させていただきました。訪問してお話を聞いてみると、3校ともそれぞれの学校のことを御存知だったんです。最初に城西中学校に行って、「このあと津田中学校に行くんです」って言ったら、「小西先生、佐藤先生のところね」とすでに面識があつた。また大阪をお邪魔したら、木下先生もお二人のことをご存知だった。小さい範囲ですが、つながりはあつたんですよね。今回、せつかくもっとさらに広い範囲で、全国的に先生方に集まって頂いているので、毎回申し上げているのですが、参加して頂いた先生同士で、交流して頂ければと思います。

それから、私は、津田中学校を訪問しお話を聞くなかで、これは防災を通じたリーダー育成だけでなく、すごく良いキャリア教育にもなっているなと感じました。防災を通じて、人の役に立ったりと言って消防士になりたいと思ったり、学校の先生になって子どもたちに防災を教えるってあげたいとか、キャリア教育としての効果もあるのかなと感じました。

木下 大阪市立鶴見橋中学校の木下です。うちの生徒の学力の問題は、本当に厳しいです。うちのクラスの半分以上は学習障害として思い当ります。一言で言いましたら、保護者がいない家庭だったりすると、何にも教えてもらっていない。そのため本当に純粋で、いい意味で言えば、本何も分からない、生まれたての卵のような子どもたちなんです。だから、出会う大人によって本当に変わります。また、家に居場所がないという子どもたちもいる。そんな中で、「何故勉強しないといけないのか」が純粋にわからない子どもたちと過ごしてきました。その中でも防災教育に関しましては、むしろ勉強ができない子どもが一生懸命やりましたし、むしろ家庭環境が非常に辛い子どもが「人の役に立てる」とか「命を大切にする」といった活動を、非常に頑張るようになりました。災害が起きたときは皆で助け合わないといけないので、皆のために一生懸命に手伝ったりすることができる子どもに育ってきているのを見ると、防災教育が本当に力になったなと思っています。

何人かの子どもたちは、毎朝、自分たちで学校の玄関の掃除をするようになっています。その掃除をしている子どもたちの一人の子の話なんですけど、その子は親もいるんですけど、毎朝小さな妹を保育園に送ってから学校に来ています。そして、放課後もすぐ帰って、迎えにも行きます。でも、その子は朝 8 時に間に合うようにちゃんと来て、掃除しています。本当に純粋な笑顔で「おはよう」と友達や後輩に声をかけているんです。その姿を毎日見て、「自分もやらざるを得ない」と思うようになり、子どもに変えて頂きました。だから、子どもたちの可能性を信じて頑張っていきたいなと思いますし、今回、本当に勉強させて頂きましたので、また、川島先生（大阪市立鶴見橋中学校）と二人頑張っていこうと決意しているところでございます。

太田 田辺市立芳養小学校の太田です。いろんな実践を見させて頂きまして、教員として防災学習を進めていく上で様々なヒントを頂いたというか、学校の中でいろんな実践を進めていく方法や材料がたくさん集まった、かなり収穫があったなと感じています。

最初、防災教育を始めた頃は「ちょっと実践してみなさい」と言われて、ハザードマップ作りだとか、見様見真似でいろんなことをやっていて、そのときは「防災教育ってこんなものかな」って思いながら授業をやっていました。しかし、今回、「子どもが命を見つめる」という授業を実際に実践してみて、子どもたちが授業を通して、家族を見つめ直したりとか、お友達のことを思いやったりとかするようになったことを実感し、防災教育として、色々な効果が生まれてくるような授業が幅広くできるのかなと感じました。今後、授業をそういう視点で考えていけたらいいかなと思いました。

うちの学校は“学社融合”ということで、地域の人も含めて学校に入ってもらって、「地域の人が子どもたちを見て、地域の人に学ぶ」ということを授業の中にたくさん取り入れながら、学習活動を行っています。そこにも防災の学習を取り入れながら、いろいろな広がりを作っていけるかなと思いました。まだ具体的にどんなふうにしていったらいいかはわかりませんが、いろんな可能性が広がるなって感じていました。

今回初めて参加しましたが、それぞれのお話を伺って、こんな機会じゃないと自分の授業風景を見る機会もないので、すごく自分の授業の反省もできましたし、凄く勉強をさせて頂きました。

山本 田辺市立大塔中学校の山本です。今回、私も初めて参加させて頂いて、防災に対して様々な視点から見ての方がいらっしやったので、そこが勉強させてもらったところかなと思います。私自身もこの前授業をさせて頂いたんですけども、それが全てなのかどうなのかというところで、太田先生と一緒にちょっと悩んでいるところがありました。昨日グループ協議の中で、佐藤先生にいろいろとお話して頂き、「どういうことから始めていったらいいか」と相談させて頂いたときに、「無理をしないで自分ができるところから、とりあえず始めてみたらどう」と言って頂いて、私自身、肩の力がふって抜けたような気がしたんです。自分自身が無理してやろうとすれば、子どもたちもきっと無理するだろうし、自分自身ができることから始めたら、子どもたちも自分たちができることから考えて始めていくから、まずはやっぱり、そこからスタートなんだなと感じました。

それと、地域の方との交流の仕方もヒントを頂きました。地域の強いところと弱いところを自分たちで話し合っ、まず今の地域にどういう状況かということ把握して、そこから良いところはどんどん伸ばしていったらいいし、自分たちの弱いところを地域の方々と共有し合っ、自分たちで解決に向かう試みを少しずつ進んでいけたらなと思います。私もまた帰って、できることから少しずつ始めていきたいなと感じました。

それと、防災だけではなくて、学校教育っていうことはいろいろな問題があり、やらなければいけないことがたくさんあります。学力の向上、体力の向上、また生徒の問題、暴力等の問題など、様々な課題を抱えながら同時進行でやっていかないといけない。防災教育もその中の一つ、と私は今まで考えてきたんですけども、この会に参加させて頂いて、防災教育をすることによって、自ら考えて行動できる生徒の育成が学力向上につながる。防災教育を通じて、皆で力を合わせる、そして命の重み、他人への感謝の気持ち、そういうことにもつながってくるという話も私の中で印象に残っています。さらにまた自分自身もできる限り高めていきたいなという向上心を持って、これから取り組んでいきたいなと思います。

金井 お二人の先生とも各校の防災教育担当者として、田辺市の担当者会に参加されています。ぜひ今回の経験を、ご自身の学校、担当者会議の中で伝えて頂ければと思います。



大川 尾鷲市立矢浜小学校の大川です。先生方の話を聞いて、「自分自身がこれまでやってきたことは足りなかった」と思いました。「自分たちが何とかして子どもたちにこういうことを教えなきゃいけない」とか、「こういう子どもたちに育ててほしい」という願いはあるんですけど

れども、結局は教え込みであったり、引っ張っていってしまう部分があったりして、子どもたちが自主的に活動するという部分が、とても弱かったなって改めて思いました。

それともう一つ思うのは、自分のように教頭の立場でここへ参加してもらうよりも、やっぱり小中学校の担任の立場で、子どもと毎日一緒に生活している先生方が、このような中でいろんな話を聞かせて頂いて、その中から「よし、帰ったらあれをやってみよう」というところにつなげていくのが、一番大事だなと思いました。そういう点ではこういう機会があることを自分自身も教職員に広げていきたいと思いました。

中村

尾鷲市立賀田小学校の中村です。私は、5、6年生の複式クラスの担任をしていて、去年からの持ち上がりなので、2年間、同じ子どもたちと向き合っているところです。最初に話にでていた学力については、「防災を頑張ったから学力が上がった」ということは全然できないなと感じています。ただ、“気持ちの優しさ”には効果が現れてきているように感じます。昭和の南海地震や津波の話をした後に、すごくやんちゃな子が、毎日学校からの帰り道ですれ違うおばあちゃんに「おばあちゃん、地震とか津波のこと知っているの？」と話しかけたそうです。その子には、そのおばあちゃんが80歳以上に見えたらしく、それなら地震を経験しているかもしれないと思い、聞いたそうです。学校ではとてもやんちゃして、いつも怒られているような子が、地域のおばあちゃんに声をかけて、津波のときのことをいろいろ聞いて、それを次の日学校で「あそこのおばあちゃん、何か知っているんだって」と言って、友達に話してくれました。それから、「保護者が自分のことをどれだけ大事に思ってくれているか」ということを感じた後で、お母さんが調子の悪かったときに、その子は「家庭科でカレーを作れるようになったから」と言ってカレーを作ってくれたそうです。保護者の方は「そんなことしてくれたのは初めてで嬉しかったです」と言っていました。学力面では「明らかに良くなりました」という報告はできないんですが、“気持ちの優しさ”とか“命の大切さ”という部分では、随分子ども達には伝わってくれているんじゃないかなと思います。

5、6年生なので、「低学年に自分たちが学習したことを伝えに行こう」とか、「な紙芝居を作ろう」とか「歌でやっぺいこう」とか「保育園に伝えに行こう」という計画を立てているところです。そういう自分達発信で他の学年にどんどん広げていく。それが学校全体のものになっていく。また、小学校を卒業したら中学校に行くので、小学校と中学校が連携してやっぺいすることで、それをさらに地域にどんどん広げていく。「こうなったらいいな」という理想はあるんですけど、まだまだできてないところが多いです。でも、まずは地域からの目とか、教員の目からとか、色々な目で地域を盛り上げていって、「賀田は頑張っているよ」というアピールをすることも大事なのかなと感じました。

あとは管理職と同じ方向を向くとか、教育委員会にも後押しして欲しいなって思うときもあります。皆がそれぞれが独立してやるのではなくて、黒潮町みたいに皆で同じ方向を向いていくっていうのは、とっても大事だなと感じました。



金井 中村先生が最後に教育委員会の後押し、との発言もありましたが、その前のところで「防災教育を通じて、学力と言うまでにはいかないけれども、命の大切さ、気持ちの優しさというのはすごい感じるころはある」とのことでしたが、確かにそうなんだと思いますね。

ただですね、「防災教育をやりましょう」と言ったら、多くの先生は「防災を教える教育をやりましょう」とイメージしちゃうので、そうすると「逃げ方を教えて、いざというときにちゃんと逃げられるようなスキルを避難訓練で身に付けさせとけばいいんでしょ」となってしまう。ここに集まって頂いている先生方のように、防災教育の可能性を広げて考えていくことができずに、話がかみ合わなくて、それが学校全体に広がらない理由になっているのかなという気がするんですね。それで、何が必要なのかなという、学校の先生なので「教えている目の前の子どもが変わっていく」、「そのよく変わったところと一緒に見て、変化を実感する」という成功体験を多くの先生方と共有することができる取り組みや支援が必要なのかなと感じています。広げる方法を少し真剣に考えなければいけないなというのを少し感じました。

広げる役割と言うと、教育委員会の話が中村先生からもあったので、教育委員会の方からお話を聞きたいと思います。

福田 和歌山県新宮市教育委員会の福田です。今年度から教育委員会に異動になりました。今回、黒潮町の行政と学校が一体となった取組はすごいなと思いました。自分自身のことを思うと、自分の仕事の中には、人権教育だったり、生徒指導だったり、スクールカウンセラーだったりがある中で、その中の一つという感じで防災をやっていました。また、市には防災推進課がありまして、そちらでも防災を進めているので、「自分のすべきことはどういうことか」というのが、はっきり見えていませんでした。しかし、今回黒潮に来させてもらって、協力しながら、学校と行政をつなぐことが、今の僕の仕事だなと思いました。

今度の1月に行政主体の防災訓練があります。学校にも積極的に参加して、生徒も参加させて、という話もさせてもらっています。今回、この会議に参加させていただいたことを踏まえて、行政とも相談しながら、学校をどう巻き込んでいくか、できればその地区の学校の先生方にも入ってもらいながら話を進められたら、もっとつながっていけるのではないかと思います。それは帰ってから頑張ってみます。

奥村 尾鷲市教育委員会の奥村です。今年から尾鷲市の指導主事になりましたけど、それまでは、尾鷲市で社会教育を3年、そして三重県教育委員会で社会教育主事を4年させて頂いておりました。先ほど気付いたんですけども、自分の思った防災教育は、昔の「逃げる」というイメージでした。それよりも一歩進んだ防災教育というものを、前回、片田先生が尾鷲にきていただい

たときに仰って頂いた話からなんとなく理解していたつもりでしたが、今回、この会議に参加させていただいて、「今後やっていくことはこういうことなんだ」とつながりました。皆さんの実践を聞かせて頂いて、黒潮町さんがやられているように、今後、行政と学校がつながっていく方向で防災教育を進めていきたいと思います。多くの先生が防災教育をやられていますので、それを支援するのが私の仕事だと思いますので、よい方向に進めていきたいと思います。最後に開催地を代表して、畦地さん。お願いします。

金井
畦地

二日間、黒潮町にお出でくださいまして、ありがとうございます。缶詰もたくさん買って頂きまして、ありがとうございます。

“一体になった取り組み”と非常にお褒め頂きました。“一体になった取り組み”というよりはむしろ、“行政が先生方に押し付けている”というのが、ある意味現実ではなかろうかなと思っています。ですから、順応していく先生方は大変だなというのが本音ではないかなと。ただ、先程、「先生を動員」という話になりましたけれども、決して我々は、先生方を動員してはおりません。昨日、今日の参加については、「各学校の判断をお願いします」ということになっております。学校によっては勤務日になっている学校もあろうかと思いますが、そうでない学校もあるということです。昨日、大勢の町内の先生方が参加してくれたのは、「来なさい」と一言も言っているわけではなくて、「できたら参加してください」という内容案内だけであれだけ来て頂けるのは、熱意の表れです。先生方の名誉のため言っておきたいと思います。

一体的に取り組みができるようになってきたのは、まさしくトップの姿勢があったからなんですね。トップが「一人の犠牲者も出さないんだ」という大きな姿勢があった。その姿勢を持つには、日本一の想定をもらったということ。そういうものがあるので、全員が一方向を向いて取り組みができていくというのは間違いないと思っています。しかし、二日間の議論の中でうちの町に欠けているのは、大きく二つだなあと思いました。一つ目は、子どもたちが主体的に「僕たちこういうことをやりたいんです」というところが少ない。特に中学生についてはそういった取り組みが欲しいんだけど、そういうものはうちにはないです。二つ目が、地域と連携をした取り組みが不十分であると思います。多くの避難訓練等はするんですけども、本当に子どもたちが地域に感謝される場面を得られるような連携がない。この二つが、今のうちの弱い点かなと感じたところでした。

僕は一般行政職の職員なので、何かするときにはいろんなことが頭を駆け巡ります。防災教育にしても、「ああ、これは売れるかな」と思っています。まずは、そのまま防災教育を売りたいと思っただけで、例えば、カリキュラムという本であつたりとか、防災教育というシステムを売る。あるいは、うちの町に来て頂くと、「“命の教育”とかも含めて、防災教育についていろんなことが学ぶことができますよ」というように修学旅行の誘致とか、そういうことができないかなあと思っています。実はうちのNPOは第三種の旅行業の免許を持っているので、情報を持っているので、将来は防災教育も町の産業にしていきたいなと思っています。

ということで、二日間どうもありがとうございました。



金井 今回 3 回目として、黒潮町で開催させていただきました。この会を通じて、「防災教育をどうやって行ったらいいのか」という問題意識の共有ができかこと、また何人かの先生に仰って頂いたように、元気になって、やる気ももらって、熱ももらって帰って頂けるということは、この会を開催させて頂いた側として、非常に嬉しく思います。ただ、ぜひお願いしたいのですが、「いやあ、いい話を聞いた、頑張ろう」と思って帰って頂いたのに、年が明けて忘れてもとに戻らないでくださいね。今だったら、来年の4月から始まる新学期に「どうやって防災教育を取り組んでいこうか」というのを考えて計画するのにまだ間に合うと思います。3学期中に実施してください、と言われると大変だと思いますので、来年度に向けて準備をすすめていただければと思います。そして、ご自身または学校で何かしらの取り組みを実践していただいて、その結果をもって、また皆さんとディスカッションさせて頂いたらなと思っております。

7. 閉会

片田 敏孝（群馬大学大学院 教授）

二日間に渡り、熱心にいろいろとご議論して頂きまして、ありがとうございました。皆さん。黒潮町に来られて、「商魂たくましいな」と思いませんか。「商魂たくましい」というよりは「決して負けてない」し、「置かれた状況、条件の中でどう生きるか」、「どう前向きに生きるか」ということだと思います。たまたま津波の話をするところ「ここが一番酷い」という話だけであって、土砂災害や洪水など災害はいろいろあります。群馬県も浅間山を抱えておりまして、



片田 敏孝教授

あれが噴火したら、僕らは一番の被災者になります。自然災害という面では、地域に様々な災害もあるわけですし、またそれぞれの子どもが大人になり、そして生涯を終えるまでには、生きていく上でいろいろとあるんですね。特に鶴見橋の子どもたちは、今まさにそういう状況の中で生き抜いている。そういう中であっても、どうたくましく前を向いて、歩いていくのか、生きていくのか。我々自身もそうです。いろいろな側面で、我々は「与えられた条件の中で客観的にリスクを自分で評価し、その中で自分で正確な道を考える」、そして「明るく一步一步どう前に進んで生きていくのかを考える」。そういう中で、たまたま黒潮町であれば、津波という事象に対して皆が同じ方向を向いて動いていける。

僕らが目指している防災教育というのは、何度も言いましたけれども、単に“逃げろ逃げろ教育”をやっているわけではないということだけは、もう間違いなく皆さんの共通認識としてでき上がってきたんだろうと思います。ただ、正直、まだ暗中模索ですよ。子どもたちに、次から次へとあれやらせ、これやらせ、とメニューの連続でいく。あれもやらせました、これもやらせましたが防災教育ではない。それももちろんわかっていることです。でも、「具体的にコミュニケーションとしてどうすればいいのか」、「どういうステップを踏んで子どもたちを育てていくのか」ということに関しては、皆が皆、未知の領域に入ってきたと思います。正直私にとってもそうです。このプロジェクトは、文科省からご支援をいただいております、昨日も皆さんの議論を担当者が見学に来ていました。彼と話をしていたら、「改めて防災教育を凄く小さく捉え過ぎていた」と仰っていました。

今回で3回実施させていただきました。それなりの成果も上がりつつあるとは思っていますが、まだ僕らがたどり着いたところは、「防災教育が目指すものとは何なのか」、そして「その効果の可能性」についてコンセンサスが得られてきたというところだと思います。決して、“逃げろ逃げろ教育”だけではなく、「主体的にどう生きるか」ということに対して、子どもたちが変わっていきける。そして、小木の事例を見ても、子どもたちに「勉強しろ、勉強しろ」と連呼したわけじゃないですよ。子どもたちが自発的に伸びてきた。そんな子どもたちを育むことができたのも防災教育の成果かなと。防災教育の効果、その広がり可能性はわかってきた。そして、やりようによって、それは明らかに打ち立てることができるものだという事もわかってきた。さらに、そこにあたって障害を乗り越えた事例も各地から色々ご報告を頂き、その中から参考になること、良い模範となるような授業もできてきた。そして、“命の教育”が重要だという認識のもとで、「命を扱いながら心を揺さぶる」ことについて、肯定的な意見から「いつもこんな厳しい問いかけばかりで防災教育は成り立たない」と意見も、いろいろな気づきが

あって、今この場で共通の認識を持つことができているんだと思います。この先はこの共通認識のもとで、各地で事例を増やして頂かないといけないような気がしているんですね。今回、太田先生の授業を見て頂いたり、前は、私がシンサイミライ学校でやった授業を見て頂いたり、いくつか事例はできました。ここから先は、それぞれの学校でそれぞれの先生が、ここまで学んだもの、参考にするべきものを使って、実践して頂き、その結果を持ち寄って、議論させていただきたい。「こんな成功をした」、「こういうアプローチで子どもたちはこう変わった」という事例をいろいろと持ち寄って頂けるといいなと思っています。そういう面では、今回、大阪から木下先生、川島先生に来て頂きましたが、他にも全国にはまだそういうことをやっておられる方もいらっしゃると思うんですね。そういう方々にも入って頂いて、議論を深めていきたいなとも思います。

何れにしましても、この年末の本当にお忙しい中、これだけの多くの方々に来て頂きましたこと、心より感謝申し上げます。そして、何よりも黒潮町の皆さん、先生方、教育委員会の皆さん、本当にご協力ご支援を頂きましてありがとうございます。お陰様でまた一歩、前に進むことができたかなと思っています。また、何らかの形で次年度、皆さんにお声掛けを致しますので、それまで今日、今回持ち帰ったものを使って、様々な実践をしていただきたいと思います。そして、ぜひ次の集まりに報告して頂けるようにして頂きたいなと思います。本当にありがとうございました。また来年度もよろしくお願い致します。



【付録】 当日配布資料

資料 01	プログラム
資料 02	参加者名簿
資料 03-1	黒潮町の目指す防災教育について 黒潮町教育委員会 國友 広和さん
資料 03-2	平成 17 年度～平成 24 年度 繋がり, 地域に貢献する防災学習 徳島市立徳島中学校 小西 正志 先生 徳島市立津田中学校 佐藤 康德 先生
資料 03-3	未災地にできること～『いのち』『つながり』を大切にする学校づくり～ 大阪市立鶴見橋中学校 木下 祐介先生・川島 彰允先生
資料 03-4	防災教育連絡協議会にて 高知市立城西中学校 宮下 龍 先生
資料 04-1	グループディスカッション資料
資料 04-2	第 2 回防災教育推進連絡協議会 in 田辺市 から得られた知見
資料 04-3	命の教育 授業案